

青森市埋蔵文化財調査報告書 第6集

大矢沢野田(1)遺跡

発掘調査報告書

平成13年度

青森市教育委員会

青森市埋蔵文化財調査報告書 第61集

大矢沢野田(1)遺跡

発掘調査報告書

平成 13年度

青森市教育委員会

序

青森市には、現在、30箇所以上の遺跡が所在しております。これらの遺跡の多くは丘陵地に所在しており、平野部に所在する遺跡はあまり多くはありません。大矢沢野田（1）遺跡は、本市において数少ない、平野部に所在する遺跡の一つであります。

本遺跡は、平成9年度末に横内川多目的遊水地建設工事に伴い発見された遺跡であり、平成10年度の青森県教育委員会の調査では、旧石器時代～縄文時代の埋没林のほか、縄文時代の遺物を包含する河川跡等が検出されました。

当委員会では、平成1年度の堤川広域基幹河川改修事業に先立つ試掘調査及び市道筒井幸畑団地線特殊改良事業に先立つ発掘調査を皮切りに、平成13年度まで両事業に先立つ発掘調査を継続して実施してきており、本市ではこれまで検出例のない縄文時代前期初頭の竪穴式住居跡のほか、縄文時代前期初頭～後期にいたる遺構・遺物が検出されました。

本書は平成11～13年度の発掘調査成果をまとめたものであります。

最後となりましたが、本書を刊行するにあたり、調査委託者をはじめとした関係各機関・関係各位のご理解・ご協力に対しまして、深く感謝の意を表する次第であります。

平成14年3月

青森市教育委員会

教育長 角田 詮二郎

例 言

1. 本書は、青森県教育委員会が実施した青森市大矢沢字野田に所在する大矢沢野田（1）遺跡の発掘調査報告書である。
2. 大矢沢野田（1）遺跡は青森県遺跡台帳に遺跡番号 01292として登録されている。
3. 発掘調査は平成 11～13年度に実施し、発掘調査総面積は3,700㎡である。
4. 本書に記載されている内容は、平成 11～13年度に実施した市道筒井幸畑団地線特殊改良一種（特定）事業に伴う発掘調査報告及び平成 12～13年度に実施した堤川広域基幹河川改修事業に伴う発掘調査報告である。平成 11年度に刊行した『大矢沢野田（1）遺跡調査報告書』は平成 11年度に実施した堤川広域基幹河川改修事業に伴う試掘調査成果並びに市道筒井幸畑団地線特殊改良一種（特定）事業に伴う発掘調査成果の概要を所収したものであり、平成 12年度に刊行した『大矢沢野田（1）遺跡発掘調査概報』は平成 12年度に実施した両事業に伴う発掘調査概要を所収したものである。記載内容については本書を優先する。

なお、平成 10年度には堤川広域基幹河川改修事業に伴う発掘調査が遊水地北側えん堤工事区域を対象として青森県教育委員会によって行われており、当該年度に報告書が刊行されている。

5. 本書の執筆・編集は青森県教育委員会が行い、設案政健が担当した。
6. 出土石器の石質鑑定については調査員である、青森県総合学校教育センター指導主事工藤一彌氏に依頼した。
7. 平野部から採取した泥炭層の分析についてはバリノサーヴェイ株式会社へ依頼しており、結果は第 5章に収めている。
8. 出土遺物及び記録図面・写真関係資料は青森県教育委員会にて保管している。
9. 引用・参考文献は巻末に収めた。
10. 発掘調査及び報告書の作成にあたって次の諸機関、諸氏からご指導・ご協力を賜った。記して感謝の意を表する次第である。（敬称略・順不同）

青森県教育庁文化財保護課 青森県総合学校教育センター 横内地区連合農事振興会 百原新 木村勝彦 小笠原雅行 木村鉄次郎 小林達雄 斎藤岳 福田友之 小山浩平 斎藤正 中島友文 大田原潤 中村哲也 中村美杉 辻誠一郎 木村真明 佐野忠史 羽生淳子 工藤大 三宅徹也 茅野嘉雄 辻本崇夫 沼宮内陽一郎 千葉操 工藤清衛 野沢与八郎 対馬義道 里村清衛

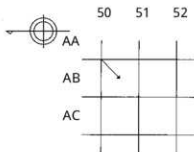
凡 例

1. 図版及び表番号は、一冊を通じて連続するものとし、「第 1 図」「第 1 表」とした。依頼原稿については「図 1」「表 1」とした。ただし、依頼原稿については執筆者の指示を踏襲している。
2. 各種平面図の方位は磁北を示した。なお、写真図版の縮尺については、統一を図っていない。
3. 遺構の略号は、S I = 竪穴式住居跡、S N = 焼土遺構、S K = 土坑、S P = ピットである。第 1 号遺物集中ブロックについては略号を付していない。
4. 遺構の規模はcmで表示している。

5. 本報告書の土層注記については、「新版標準土色帖」(小山正忠・竹原秀雄 1993)に準拠した。
 6. 縄文原体に関する用語については、『日本先史土器の縄文』(山内清男 1969)に概ね準拠した。
 7. 遺物の実測図の縮尺は、土器 = 1/3 石器・土製品・石製品 = 1/2 礫石器 = 1/4である。
 8. 石器観察表における石質の略号は次のとおりである。

「珪」珪質頁岩、「安」安山岩、「流」流紋岩、「石」石英安山岩、「輝」輝緑凝灰岩
 「凝」凝灰岩、「変」変朽安山岩、「泥」泥岩、「熔」熔結凝灰岩

9. グリッドの呼称は次のとおりである。(例：AA - 50)



10. 図中で使用したスクリーントーンは次のとおりである。

遺構平面図・セクション等



炭化物



焼土



A地区地山



溶結凝灰岩



ローム

遺物



焼けはじけ



被熟



すり



くぼみ



たたき

11. 遺物の分類は次のとおりである。

土器

第 群 縄文時代早期の土器

第 群 縄文時代前期初頭の土器

- a. 刺突文・コンパス文が施されるもの
- b. 押し引き沈線文が施されるもの
- c. 器面全面に縄文が回転施文されるもの
 1. ループ文が施されるもの
 2. 縄端回転文が施されるもの
 3. 斜縄文・羽状縄文が施されるもの
- d. 胴部・底部の資料

第 群 縄文時代前期中葉の土器(円筒下層 a・b式土器)

- a. 縄文が回転施文されるもの

- b. 縄の側面圧痕が施されるもの
 - c. 結節回転文が施されるもの
 - 1. 隆帯をもたないもの
 - 2. 隆帯をもつもの
 - 3. 竹管状工具による擬似結節回転文が施されるもの
 - d. 単軸絡糸体第1類が回転施文されるもの
 - e. 単軸絡糸体第5類が回転施文されるもの
 - f. 単軸絡糸体第6類が回転施文されるもの
 - g. 単軸絡糸体第6A類が回転施文されるもの
 - h. 多軸絡糸体が回転施文されるもの
- 第 群 縄文時代中期前半の土器
- 第 群 縄文時代中期後半～後期初頭の土器

石 器

- A 石鏃
 - 1 円基鏃
 - 2 平基鏃
 - 3 尖基鏃
- B 石槍
- C 石錐
- D 石匙
 - 1 縦形のもの
 - a. 両側縁が直線的なもの
 - b. 両側縁ないし一側縁が梳曲するもの
 - c. 側縁の一部に凸凹がみられるもの
 - d. 下端が鋭く尖るもの
 - e. 下端にむかって細くなるもの
 - f. 丸みを帯びるもの
 - g. 下端にむかって幅広になるもの
 - h. 欠損により分類不能なもの
 - 2 横形のもの
- E 石筥
 - 1 片面のみ刃部調整されているもの
 - 2 両面が刃部調整されているもの
- F 不定形石器
- G 磨製石斧
- H 半円状扁平打製石器
- I 敲磨器類

1 磨り石

a . 面的に磨り痕が認められるもの

b . 側縁に磨り痕が認められるもの

2 凹み石

3 たたき石

J 石皿・台石

目 次

序		
例 言		
凡 例		
目 次		
図版目次		
第 章 調査の概要		
第 1節 調査に至る経過		1
第 2節 調査要項		1
第 3節 調査方法		4
第 4節 調査経過		4
第 5節 本書の編集方針と整理作業		5
第 章 遺跡の環境		
第 1節 遺跡の地理的環境		9
第 2節 周辺の遺跡		9
第 3節 遺跡の層序		11
第 章 調査成果		
第 1節 A地区の調査		
1. 検出遺構と出土遺物		
1) 竪穴式住居跡		13
2) 焼土遺構		16
3) 土坑		16
4) ビット		17
5) 遺構外出土遺物		32
・ 土器		32
・ 石器		45
第 2節 B地区の調査		
1. 検出遺構と出土遺物		
1) 第 1号遺物集中ブロック		58
・ 出土土器		59
・ 出土石器		80
・ 出土土製品・石製品		83
第 3節 C地区の調査		
2. 検出遺構と出土遺物		
1) 土坑・Tビット		107
2) 遺構外出土遺物		108
第 章 自然科学的分析		
大矢沢野田(1) 遺跡の古環境について		110
第 章 分析と考察		
第 1節 遺跡の時期と地形の相関からみた本遺跡における環境推移について		123
第 2節 第 群土器について		124
第 3節 第 群土器について		127
まとめ		129
引用・参考文献		
写真図版		

図 版 目 次

第 1 図	遺構配置図・調査対象区域図・遺構配置図	7 8	第 35 図	第 1 号遺物集中ブロック出土土器	69
第 2 図	周辺の遺跡位置図	10	第 36 図	第 1 号遺物集中ブロック出土土器	70
第 3 図	基本層序	12	第 37 図	第 1 号遺物集中ブロック出土土器	71
第 4 図	S I - 01	14	第 38 図	第 1 号遺物集中ブロック出土土器	72
第 5 図	S I - 01 内 Pit セクション・出土遺物	15	第 39 図	第 1 号遺物集中ブロック出土土器	73
第 6 図	S N - 01・S K - 01・S K - 02	16	第 40 図	第 1 号遺物集中ブロック出土土器	74
第 7 図	S P - 01~18	29	第 41 図	第 1 号遺物集中ブロック出土土器	75
第 8 図	S P - 19~35	30	第 42 図	第 1 号遺物集中ブロック出土土器	76
第 9 図	S P - 36~47	31	第 43 図	第 1 号遺物集中ブロック出土土器	77
第 10 図	A 地区遺構外出土土器	35	第 44 図	第 1 号遺物集中ブロック出土土器	78
第 11 図	A 地区遺構外出土土器	36	第 45 図	第 1 号遺物集中ブロック出土土器	79
第 12 図	A 地区遺構外出土土器	37	第 46 図	第 1 号遺物集中ブロック出土土器	80
第 13 図	A 地区遺構外出土土器	38	第 47 図	第 1 号遺物集中ブロック出土土器	84
第 14 図	A 地区遺構外出土土器	39	第 48 図	第 1 号遺物集中ブロック出土土器	85
第 15 図	A 地区遺構外出土土器	40	第 49 図	第 1 号遺物集中ブロック出土土器	86
第 16 図	A 地区遺構外出土土器	41	第 50 図	第 1 号遺物集中ブロック出土土器	87
第 17 図	A 地区遺構外出土土器	42	第 51 図	第 1 号遺物集中ブロック出土土器	88
第 18 図	A 地区遺構外出土土器	43	第 52 図	第 1 号遺物集中ブロック出土土器	89
第 19 図	A 地区遺構外出土土器	44	第 53 図	第 1 号遺物集中ブロック出土土器	90
第 20 図	A 地区遺構外出土土器	47	第 54 図	第 1 号遺物集中ブロック出土土器	91
第 21 図	A 地区遺構外出土土器	48	第 55 図	第 1 号遺物集中ブロック出土土器	92
第 22 図	A 地区遺構外出土土器	49	第 56 図	第 1 号遺物集中ブロック出土土器	93
第 23 図	A 地区遺構外出土土器	50	第 57 図	第 1 号遺物集中ブロック出土土器	94
第 24 図	A 地区遺構外出土土器	51	第 58 図	第 1 号遺物集中ブロック出土土器	95
第 25 図	A 地区遺構外出土土器	52	第 59 図	第 1 号遺物集中ブロック出土土器	96
第 26 図	A 地区遺構外出土土器	53	第 60 図	第 1 号遺物集中ブロック出土土器	97
第 27 図	第 1 号遺物集中ブロックセクション	58	第 61 図	第 1 号遺物集中ブロック出土土器	98
第 28 図	第 1 号遺物集中ブロック出土土器	62	第 62 図	第 1 号遺物集中ブロック出土土器製品・石製品	99
第 29 図	第 1 号遺物集中ブロック出土土器	63	第 63 図	S K - 03・S K - 03 出土遺物	107
第 30 図	第 1 号遺物集中ブロック出土土器	64	第 64 図	S K - 04	108
第 31 図	第 1 号遺物集中ブロック出土土器	65	第 65 図	C 地区遺構外出土遺物	109
第 32 図	第 1 号遺物集中ブロック出土土器	66	第 66 図	環境変遷模式図	123
第 33 図	第 1 号遺物集中ブロック出土土器	67	第 67 図	第 1 号遺物各類型における層位ごとの出土量比	124
第 34 図	第 1 号遺物集中ブロック出土土器	68	第 68 図	3・4 層における第 1 号遺物出土量比	128

表 目 次

第 1 表	周辺の遺跡	9	第 7 表	第 1 号遺物集中ブロック出土土器観察表	103
第 2 表	S I - 0 出土土器観察表	54	第 8 表	第 1 号遺物集中ブロック出土土器製品観察表	106
第 3 表	S I - 0 出土土器観察表	54	第 9 表	第 1 号遺物集中ブロック出土土器製品観察表	106
第 4 表	A 地区遺構外出土土器観察表	54	第 10 表	S K - 03 出土土器観察表	107
第 5 表	A 地区遺構外出土土器観察表	56	第 11 表	C 地区遺構外出土土器観察表	107
第 6 表	第 1 号遺物集中ブロック出土土器観察表	100	第 12 表	C 地区遺構外出土土器観察表	107

第 章 調査の概要

第 1 節 調査に至る経過

本遺跡は、青森市大字大矢沢字野田に所在する遺跡である。当初、本地域において周知の埋蔵文化財包蔵地は登録されていなかったため、青森土木事務所（以下、土木事務所）による堤川広域基幹河川改修事業（以下、河川改修事業）に伴う遊水地建設工事及び青森市建設部道路課（平成 10年度当時。平成 13年度から青森市都市整備部道路建設課、以下市道路建設課）による市道筒井幸畑団地線特殊改良一種（特定）事業（以下、市道改良事業）が計画され、一部工事が進捗していたが、平成 10年 4月 9日付け青土木第 83号で青森土木事務所より遊水地建設工事中に埋蔵文化財包蔵地を発見した旨の届があったので、青森県教育委員会によって大矢沢野田（1）遺跡として新規に登録された（青森県遺跡台帳番号 01292）。平成 10年度には、範囲確認調査、河川改修事業に先立ち発掘調査が青森県教育委員会によって行われ、縄文時代前期中葉の遺物を包含する河川跡、旧石器時代～縄文時代前期に相当する埋没林が検出された他、縄文時代早期の貝殻文土器、縄文時代前期初頭の表館式土器、早稲田 6類土器、当該期の土坑が検出されている。

そして平成 11年度、土木事務所が計画している河川改修事業に伴う遊水地築堤工事及び築堤工事予定地に隣接する工食用道路について市道路建設課が計画している市道改良事業予定地が遺跡範囲と重複することとなったため、その取り扱いについて、土木事務所及び市道路課と当委員会が協議を行った結果、築堤工事予定地については、予定地内における遺構・遺物の有無、発掘調査の必要性を把握するため約 2 000㎡を対象とした確認調査、市道改良事業予定地については記録保存を目的とし約 12 000㎡を対象とした発掘調査を実施するという結論に至った。市道改良事業に伴う発掘調査については、当初、調査対象面積 12 000㎡のうち、既存の工食用道路を含め約 6 000㎡を調査する予定であったが、工事車両及び工食用道路に隣接する農地に入出入りする農耕車が通行するため、当該年度は工食用道路部分の調査は行わず、工食用道路東側脇の調査実施可能な部分について行うこととした。工食用道路の道路敷部分の発掘調査については、当該年度の確認調査と道路脇部分の発掘調査結果を踏まえて必要箇所を絞り込み改めて協議することとした。

平成 12年度は、11年度に実施した築堤工事予定地内の確認調査及び市道改良事業予定地内の発掘調査の結果から、遺構・遺物を確認した部分を絞り込み、2 100㎡について発掘調査を実施した。

平成 13年度は、12年度の発掘調査の結果、調査区北端から遺構が検出されたことから調査区外北側へ向かって遺構が連続する可能性が想定されたため、平成 13年度調査区の北側の隣接地約 600㎡について発掘調査を実施した。

第 2 節 調査要項

1. 調査の目的

堤川広域基幹河川改修事業並びに市道筒井幸畑団地線特殊改良一種（特定）事業に先立ち、予定地内に所在する埋蔵文化財包蔵地の発掘調査を実施し、遺跡の記録保存を図り、地域社会の文化財の活用に資する。

2. 遺跡名及び所在地 大矢沢野田(1)(おおやさわのなかっいち)遺跡
(青森県遺跡台帳番号 01292)青森市大字大矢沢野田
3. 事業年度 平成11～13年度
4. 発掘調査実施期間
第1年次 平成11年 6月14日～平成11年 9月30日
第2年次 平成12年 8月17日～平成12年10月31日
第3年次 平成13年 7月1日～平成13年 8月9日
5. 調査面積 3700㎡
第1年次 1000㎡
第2年次 2100㎡
第3年次 600㎡
6. 調査委託者 青森県青森土木事務所
青森市建設部(平成11～12年度)・青森市都市整備部(平成13年度)
7. 調査受諾者 青森市教育委員会
8. 調査担当機関 青森市教育委員会生涯学習部社会教育課埋蔵文化財対策室(平成11年度)
青森市教育委員会文化財課(平成12～13年度)
9. 調査指導機関 青森県教育庁文化課(平成11～12年度)
青森県教育庁文化財保護課(平成13年度)
10. 予算措置 調査委託者側で措置
11. 調査体制
平成11年度
- | | | | |
|-------|-----------|-------------------|-------|
| 調査指導員 | 村越 潔 | 青森大学教授 | (考古学) |
| 調査員 | 藤沼 邦彦 | 弘前大学人文学部教授 | (考古学) |
| " | 市川 金丸 | 青森県考古学会会長 | (考古学) |
| " | 工藤 一彌 | 青森県総合学校教育センター指導主事 | (地質学) |
| 調査事務局 | 青森市教育委員会 | | |
| | 教 育 長 | 池田 敬 | |
| | 生涯学習部長 | 中西 秀吉 | |
| | 生涯学習部次長 | 小山内 博 | |
| | 社会教育課長 | 間山 義弘 | |
| | 埋蔵文化財対策室長 | 遠藤 正夫 | |
| | 同室長補佐 | 蝦名 淳一 | |
| | 主 査 | 堀谷 久子 | |
| | " | 田澤 淳逸 | |
| | 主 事 | 小野 貴之 | |
| | " | 木村 淳一 | |
| | " | 児玉 大成 | |
| | " | 沼宮内陽一郎(調査担当) | |
| | " | 設楽 政健(調査担当) | |

調査補助員 内田祐子、田中美鈴

平成 12年度

調査指導員	村越 潔	青森大学教授	(考古学)
調査員	藤沼 邦彦	弘前大学人文学部教授	(考古学)
"	市川 金丸	青森県考古学会会長	(考古学)
"	工藤 一彌	青森県総合学校教育センター指導主事(地質学)	
調査事務局	青森市教育委員会		
	教 育 長	池田 敬	
	生涯学習部長	中西 秀吉	
	生涯学習部次長	三浦 賢伍	
	生涯学習部参事		
	文化財課長事務取扱	遠藤 正夫	
	同課長補佐	蝦名 淳一	
	主 査	堀谷 久子	
	主 事	小野 貴之	
	"	木村 淳一	
	"	児玉 大成	
	"	設楽 政健(調査担当)	
調査補助員	柿崎悟、浜田泉、内田祐子、今直子		

平成 13年度

調査指導員	村越 潔	青森大学教授	(考古学)
調査員	藤沼 邦彦	弘前大学人文学部教授	(考古学)
"	市川 金丸	青森県考古学会会長	(考古学)
"	工藤 一彌	青森県総合学校教育センター指導主事(地質学)	
調査事務局	青森市教育委員会事務局		
	教 育 長	角田 詮二郎	
	事 務 局 長	三浦 賢伍(～平成 13年 5月 31日)	
		大柴 正文(平成 13年 6月 1日～)	
	参 事		
	文化財課長事務取扱	遠藤 正夫	
	同課長補佐	工藤 勝則	
	主 査	堀谷 久子	
	文化財主事	小野 貴之	
	"	木村 淳一	
	"	児玉 大成	
	"	設楽 政健(調査担当)	
調査補助員	浜田泉、今直子		

第3節 調査方法

グリッドの設定にあたっては、市道改良事業に係る工事用道路中心杭 0と 1を結ぶ南北方向の直線とそれに直行する東西方向の直線を基本に 4m 4mのグリッドを設定した。グリッドの呼称については、工事用中心杭 0を起点として、南側にむかって 1、2、3 の順に算用数字を、東側に向かって Z、Y、X の順にアルファベットを付し、各呼称についてはその組み合わせで示した。グリッドの南北方向の基準線と磁北のラインとの偏差は西偏 5°である。なお、このグリッドは平成 10年度に実施された青森県教育委員会による発掘調査におけるグリッドとは一致していない。

測量原点については青森土木事務所敷地内に所在する原点 10 498mを基準とし、南北に細長い調査区に対応するため、調査の進捗に応じて適宜追加していった。

調査対象地区は約 600mの延長で南北方向に走る工事用道路と、その道路敷部分に隣接する遊水地築堤工事部分である。当委員会が調査開始した時点で工事用道路の西側即ち遊水地予定地は道路敷の面から約 2mの深さで切土され、工事用道路に隣接して法面が造成されていた。その法面から観察できる土層の堆積状況からグリッドライン 0～99付近においては、泥炭層が厚く堆積している状況が確認できた。特に北側においては法面が落ちきった部分よりもさらに下層へ泥炭層が連続しており、南側に向かうにつれて次第に薄くなっていくという状況である。第 1年次である平成 11年度において、発掘調査と併行して行われた河川改修事業に係る試掘調査により、遺物が出土する層位(第 1層)を把握していたため、それより上位に堆積する無遺物の泥炭層については重機により処理を行い、第 2層から人力による掘り下げを行った。

遺構の精査にあたっては、竪穴式住居跡については長軸方向と直交するセクションベルトを 2～3本、短軸方向と直交するセクションベルトを 1本設けて行い、土坑やそれ以外の遺構については 2分法を採用した。

遺構の平面図作成については、簡易測り方測量・平板測量を併用した。図面の縮尺については基本的に 20分の 1を採用し、必要に応じて 10分の 1、40分の 1を採用した。

写真撮影については、35mmのモノクローム、リバーサルフィルムの各フィルムを併用して行った。

第4節 調査経過

平成 11年度の調査経過については、『大矢沢野田(1)遺跡調査報告書』に掲載しているもので、ここでは平成 12・13年度の調査経過について詳述する。

平成 12年度

平成 11年度の調査成果をもとに AK～AH - 24～42グリッドの範囲、AK～AH - 52～62グリッドの範囲を調査区として設定した。

8月1日 調査開始。これ以前に、AK～AH - 24～42グリッドの範囲については、第 1層付近まで重機により表土処理を完了していた。

8月下旬

AK～AH - 24～42グリッドの粗掘りを行った。周辺が水田であり、なおかつ水分を吸収しやすい泥

炭層が堆積しているため、水がたまりやすいという調査区的地質的な特徴から、やや標高の高い南側から低い北側に向かって粗掘りを進めていった。第 層より、縄文時代前期初頭の遺物が出土し、南側から北に向かうにつれて粗 密になっていく傾向がみられた。遺構は、A I - 39グリッドよりピット 1基、A J - 37グリッドより土坑 1基、A I - 36よりピット 1基、A I - 3より焼土遺構 1基、土坑 1基を検出した。いずれも第 層より掘り込まれていた。

9・10月

大矢沢農事振興会の代表者から、稲刈り時に農耕車が入り出すための通路を車一台分でも確保してほしいとの要望があり、既に精査終了した水田側のA K - A I - 24-42グリッドについて部分的に埋め戻しを行った。A I - 24グリッドにおいて、昨年度の試掘調査で部分的に検出した縄文時代前期初頭の竪穴式住居跡を確認し、精査を行った。竪穴式住居跡の精査終了をもって、A K - A H - 24-42グリッドの調査を終了し、A K - A H - 52-62グリッドの粗掘りを行った。この地区においても、A K - A H - 24-42グリッドと同様に南側から北側へ粗掘りを進めていった。遺物は、A K - A I - 58-66において縄文時代前期中葉の遺物、A K - A J - 52-54において前期初頭の遺物が微量出土する程度であった。遺構はA K - A I - 58-66においてピットを4基検出した。また、A K - A I - 52-56において、谷と考えられる落ち込みを検出した。

10月26日 発掘調査会議を開催。当初、当該年度で調査を終了する予定であったが、竪穴式住居跡の北側に遺構・遺物が広がっている可能性が高いのではないかという意見をもとに、13年度において当該部分を調査することを決定した。

10月31日 調査終了。

平成13年度

平成12年度の調査成果をもとに、竪穴式住居跡を検出した部分より北側を調査区として設定した。

7月1日 調査開始。これ以前に重機により表土処理を完了していた。

7月中旬～8月上旬

粗掘りを開始した。やや標高の高い南側から北側に向かって粗掘りを進めていった。雨天の日が多く、また前年よりも標高が微妙に低くなっていることも影響して水分の湧出が激しかったことから、調査は必ずしも順調には進捗しなかったが、遺構を全く検出できず、出土遺物も極めて散発的であり、予定通り8月9日をもって調査を終了した。

第5節 本書の編集方針と整理作業

1. 本書の編集方針

本遺跡の範囲は地形的にみると北側から南側に向かって平野部、丘陵縁辺部、丘陵部に3区分することができる。当委員会が実施した本遺跡の発掘調査は、遺跡範囲を南北に走る工事用道路とそれに隣接する遊水地築堤工事予定地を対象範囲としており、調査の結果、平野部、丘陵縁辺部、丘陵部から確認した遺構及び出土遺物の主体となる時期がそれぞれ異なっていたことから、本書では便宜的に平野部の調査区(グリッドライン0-66)をA地区、丘陵縁辺部の調査区(グリッドライン70-92)をB地区、丘陵部の調査区(グリッドライン125-139)をC地区として分けて取り扱った。

2. 資料の提示方法

本遺跡においてA地区の遺構外から出土した縄文時代前期初頭の土器及びB地区の第1号遺物集中ブロックから出土した縄文時代前期中葉の土器については、当該期の土器型式の新旧関係を明らかにするため、分類した土器を更に層位ごとに下層の土器から一括して掲載している。ただし石器については、定形石器の各器種は縄文時代各時期を通じて基本的に土器ほど形態的な規格格の変化が顕著でないと考えられるため、層位ごとの区別はせず、器種ごと一括している。

3. 整理作業

本遺跡の発掘調査に係る整理作業は、平成1年度の調査終了時点から開始している。以下、整理作業の概要を示す。

a. 遺構図面

発掘調査時に作成した平面図、セクション図、エレベーション図に関して修正を行い、原則として1/10、1/20の原図を作成し、トレースを行った。

b. 土器

出土した土器は、平成1年度はダンボール40箱、平成2年度はダンボール5箱、平成3年度はダンボール1箱分である。

洗浄・注記

出土した土器のほとんどが第1号遺物集中ブロック及びA地区遺構外の土器であった。ハケ・ブラシによる手洗いによる洗浄の後、乾燥させ、注記を行った。記入事項として調査年度、遺跡名、グリッド名、出土層位、取り上げ番号を記入した。

接合・復元

前述したように出土した土器のほとんどが遺物集中ブロック及び遺構外の土器であり、まずグリッド毎の接合から行い、さらにグリッド間の接合を実施した。復元には樹脂の充填材を用いた。

分類

復元土器、口縁部破片資料については、既存の型式に照射しそのメルクマールとされている文様モチーフ・施文技法の有無及びその組み合わせから分類した。型式を判別し得る決定的な文様の特徴をもたない胴部・底部破片資料についても施文された文様によって分類している。

c. 石器

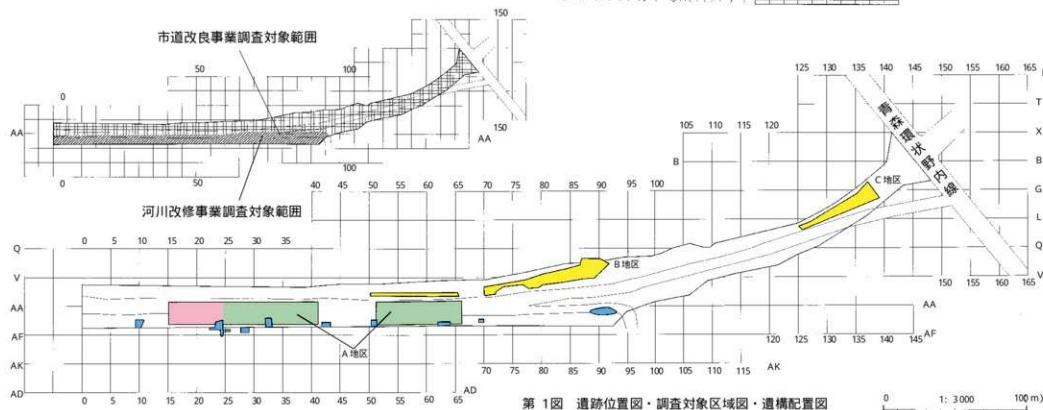
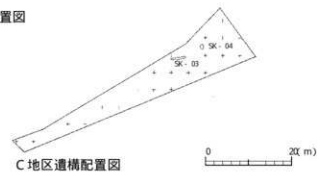
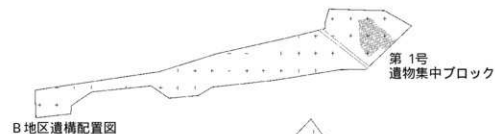
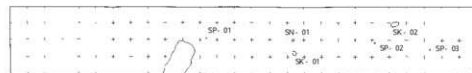
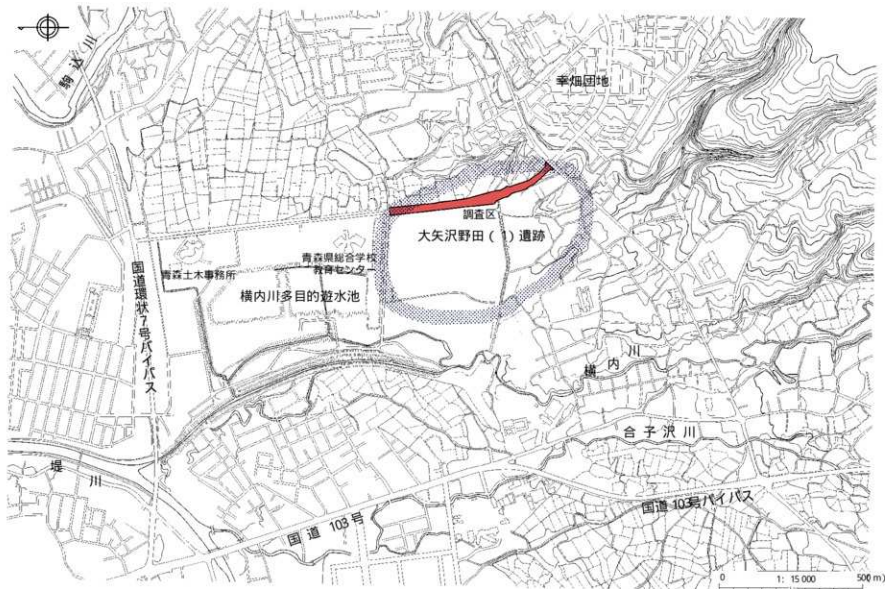
出土した石器は、平成1年度はダンボール8箱、平成2年度はダンボール2箱、平成3年度はダンボール1箱分未満である。

洗浄・注記

土器と同様、出土した石器のほとんどが遺物集中ブロック及び遺構外からの出土であった。ハケ・ブラシによる手洗いによる洗浄、乾燥の後、土器と同じ要領で注記を行った。

分類

まず剥片石器・礫石器の2つに大別し、それらを器種ごとに分類した。さらに必要に応じて、形態・調整等により細分を行った。



第1図 遺跡位置図・調査対象区域図・遺構配置図

第 章 遺跡の環境

第 1 節 遺跡の地理的環境

本遺跡は、青森市街地から直線距離にして約 5 km 南方の青森市大字大矢沢字野田に所在している。青森市の地形は、北を陸奥湾に面して広がる青森平野、平野西側に存在する開析の進んだ丘陵、平野東側の東岳山地、八甲田山から噴出した火砕流堆積物で構成された平野南～南東側の火山性台地から成っている。本遺跡は青森市域北側の青森平野と南～南東側の火山性台地の境界付近にあり、遺跡範囲内は、標高 10m 程の平野部がほぼ大半を占め、南方へ向かうにつれて標高 12m ほどの丘陵縁辺部、標高 28 m 以上の丘陵地が存在し、地形的におよそ 3 つに区分することができる。遺跡範囲の大半を占める平野部は遊水地建設工事によって既に削平された部分を除けば現況は水田であり、丘陵縁辺部～丘陵部はほとんどが原野・畑地で一部宅地化が進んでいる。遺跡から西側約 150m のところには横内川が北流しており、また遺跡周辺には過去に河川によって開析を受けたと考えられる谷地形がいくつか存在している。

第 2 節 周辺の遺跡

本遺跡の周辺の遺跡については平成 17 年度報告で詳述しているため、ここではその概要にとどめる。

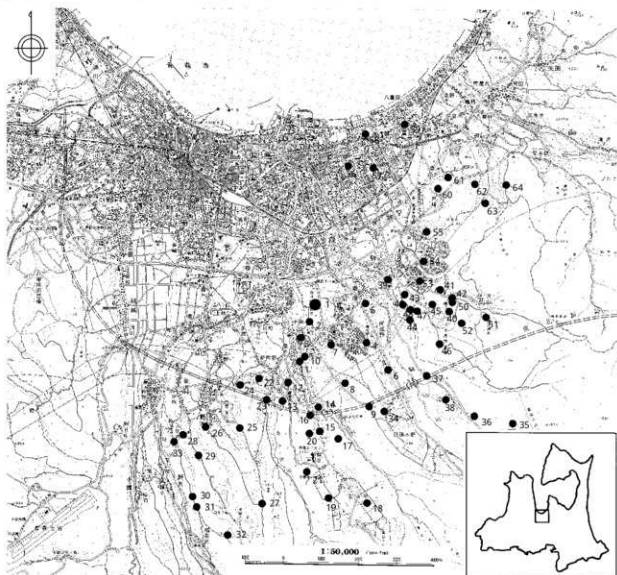
本遺跡の周辺には多くの遺跡が存在しているが、それらの立地をみると、遺跡範囲の大半を平野部が占める本遺跡のように平野部に存在する遺跡は極めて少なく、丘陵縁辺部及び丘陵地上に存在している遺跡がほとんどである。これらの遺跡の時期は縄文時代～平安時代までと多岐にわたるが、縄文時代前期末葉～後期初頭、平安時代に帰属する遺跡が多く、代表的な遺跡として、縄文時代前期末葉～中期中葉までを主体とする横内(1)・(2)遺跡、桜峯(1)・(2)遺跡、縄文時代前期末葉、平安時代を主体とする新町野遺跡、野木遺跡、縄文時代後期初頭を主体とする四ツ石遺跡が挙げられる。

本遺跡が立地する平野部では、過去にいわゆる「谷地」であった可能性が高い場所が多く、これまで確認されている遺跡は極めて少数である。しかし、本遺跡ではこれまで本市において出土例が少ない縄文時代前期初頭の遺物包含層が、かなりの層厚で堆積する泥炭層の下から確認されていることから、これまで遺跡があまり確認されていなかった平野部から新たに遺跡が確認される可能性がある。

第 1 表 周辺の遺跡

番号	遺跡名	時代	種別	遺跡番号	番号	遺跡名	時代	種別	遺跡番号
1	大矢沢野田(1)遺跡	縄文	集落跡	01292	14	横内須沢(1)遺跡	平安	散布地	01284
2	野尻野田(1)遺跡	平安	散布地	01283	15	桜峯(1)遺跡	縄文	散布地	01207
3	野尻館遺跡	中世	館跡	01173	16	桜峯(2)遺跡	縄文	散布地	01208
4	阿部野遺跡	縄文・平安	集落跡	01050	17	鏡山遺跡	縄文	散布地	01209
5	阿部野(2)遺跡	平安	散布地	01219	18	雲谷山吹(1)遺跡	縄文	散布地	01199
6	阿部野(3)遺跡	平安	散布地	01220	19	雲谷山吹(2)遺跡	縄文	散布地	01263
7	大矢沢里見(1)遺跡	縄文	散布地	01236	20	雲谷山吹(3)遺跡	縄文	散布地	01285
8	四ツ石遺跡	縄文(中・後)	散布地	01028	21	雲谷山崎(1)遺跡	縄文・平安	散布地	01247
9	四ツ石(2)遺跡	縄文(中・後)	散布地	01194	22	合子沢松森(1)遺跡	縄文	散布地	01261
10	四ツ石(3)遺跡	縄文	散布地	01215	23	合子沢松森(2)遺跡	平安	散布地	01262
11	横内城跡	中世	館跡	01174	24	新町野遺跡	縄文・平安	散布地	01161
12	横内(1)遺跡	縄文(前)	散布地	01164	25	野木遺跡	縄文・平安	集落跡	01210
13	横内(2)遺跡	縄文	散布地	01206	26	野木沢田遺跡	平安	散布地	01215

番号	遺跡名	時代	種別	遺跡番号	番号	遺跡名	時代	種別	遺跡番号
27	山口遺跡	縄文(前・後)	散布地	01271	46	月見野(6)遺跡	縄文(晩)	散布地	01286
28	藪野(1)遺跡	縄文	散布地	01217	47	玉清水(1)遺跡	縄文(晩)	散布地	01006
29	藪野(2)遺跡	縄文・平安	散布地	01218	48	玉清水(2)遺跡	不明	散布地	01007
30	山吹(1)遺跡	縄文	散布地	01186	49	玉清水(3)遺跡	縄文(前)	散布地	01008
31	山吹(2)遺跡	縄文	散布地	01187	50	沢山(1)遺跡	縄文(晩)	散布地	01042
32	山吹(3)遺跡	縄文	散布地	01188	51	沢山(2)遺跡	縄文・平安	散布地	01043
33	山吹(4)遺跡	縄文・平安	散布地	01237	52	沢山(3)遺跡	平安	散布地	01044
34	田茂木野遺跡	縄文(晩)	散布地	01160	53	螢沢遺跡	縄文・弥生・平安	集落跡	01057
35	梨の木平牧場遺跡	縄文(中)	散布地	01068	54	赤坂遺跡	平安	散布地	01053
36	深沢1)遺跡	縄文(後)	散布地	01233	55	戸山遺跡	縄文(前・中)	散布地	01005
37	深沢2)遺跡	縄文(前・後)	散布地	01234	56	佃遺跡	縄文(前)	散布地	01058
38	梨の木平遺跡	縄文	散布地	01054	57	小柳遺跡	平安	散布地	01059
39	駒込館遺跡	平安	館跡	01048	58	沢田遺跡	平安	集落跡	01051
40	月見野雲園遺跡	平安	散布地	01009	59	霧草遺跡	平安	散布地	01061
41	月見野遺跡	縄文(前・後)	散布地	01010	60	戸崎館遺跡	中世	館跡	01022
42	月見野(2)遺跡	不明	散布地	01192	61	桑原遺跡	縄文	散布地	01046
43	月見野(3)遺跡	縄文・平安	散布地	01221	62	稲山遺跡	縄文(前・後)	散布地	01045
44	月見野(4)遺跡	縄文(後)	散布地	01235	63	牛薔畑遺跡	縄文・弥生・平安	散布地	01191
45	月見野(5)遺跡	縄文	散布地	01264	64	諏訪沢山辺(1)遺跡	縄文	散布地	01232



第2図 周辺の遺跡位置図

第 3 節 遺跡の層序

本遺跡の調査区内の基本層序については平成 17 年度報告に準拠するので、ここでは詳述せず、概要を以下に示す。

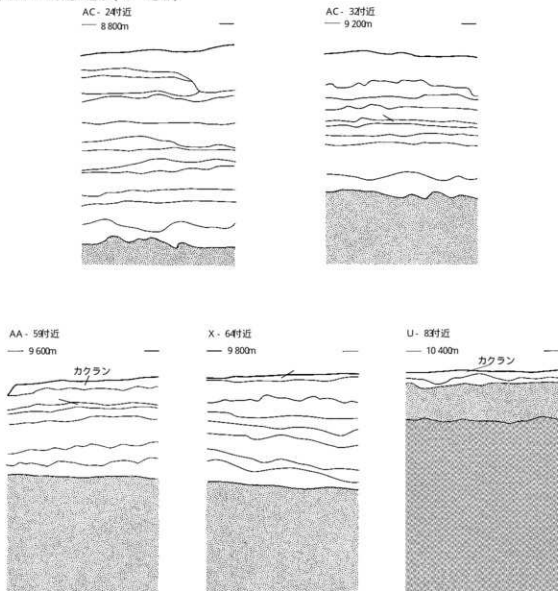
グリッドライン 95 以北の層序 (A・B 地区)

- 第 層 暗褐色を呈する。表土。
- 第 層 黒褐色を呈する。泥炭層 (木本泥炭)。
- 第 層 黒色を呈する。泥炭層 (草本泥炭)。
- 第 層 黒褐色を呈する。泥炭層 (木本泥炭)。
- 第 層 黒色を呈する。泥炭層 (草本泥炭)。
- 第 層 黒褐色を呈する。泥炭層 (木本泥炭)。
- 第 層 黒色を呈する。泥炭層 (草本泥炭)。
- 第 層 黒褐色を呈する。泥炭層 (木本泥炭)。
- 第 層 黒色を呈する。泥炭層 (草本泥炭)。
- 第 層 黒褐色を呈する。泥炭層 (木本泥炭)。
- 第 層 黒褐色を呈する。泥炭層 (木本泥炭)。
- 第 層 黒色 (10Y R 17/ 1) を呈する。泥炭層 (分解質泥炭)。上位で中微浮石を確認できる。
下位に縄文時代前期初頭の遺物を包含する。
- 第 X 層 黒色 (10Y R 2/ 1) を呈する。粗砂が少量混入。1mm～1cm 大の浮石粒が微量混入。
上位に縄文時代前期初頭の遺物を包含する。
- 第 X 層 黒褐色 (10Y R 3/ 2) を呈する。粗砂を主体とする土。
- 第 X 層 明黄褐色 (10Y R 6/ 6) を呈する。細砂と粗砂が混じった土。
- 第 X 層 にぶい橙色 (7.5Y R 6/ 4) を呈する。八戸浮石流凝灰岩と思われる。
- 第 X 層 にぶい橙色 (5Y R 7/ 4) を呈する。八甲田溶結凝灰岩の風化帯と思われる。

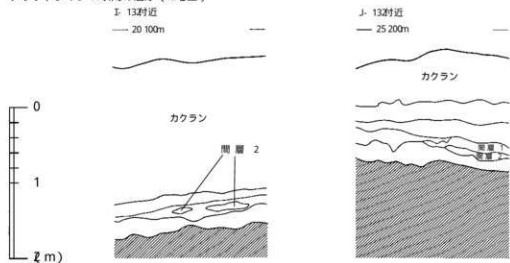
グリッドライン 95 以南の層序 (C 地区)

- 第 層 黒褐色 (10Y R 2/ 3) を呈する。炭化粒、焼土粒、ローム粒極微量。
- 第 層 黒褐色 (10Y R 2/ 2) を呈する。炭化粒、ローム粒極微量。
- 第 層 黒褐色 (10Y R 2/ 2) を呈する。ローム粒極微量。縄文時代の遺物を包含。
- 間層 1 黒褐色 (10Y R 2/ 3) を呈する。ローム粒極微量。
- 間層 2 黒褐色 (10Y R 2/ 2) を呈する。ローム粒、炭化粒微量。
- 第 層 暗褐色 (10Y R 3/ 3) を呈する。ローム粒多量。漸移層。
- 第 層 褐色 (10Y R 4/ 4) を呈する。ローム。

グリッドライン95以北の層序 (A・B地区)



グリッドライン95以南の層序 (C地区)



第3図 基本層序

第 章 調査成果

第 1 節 A 地区の調査

A 地区はグリッドライン 15～66の遺跡範囲内における平野部にあたり、標高は 10m前後である。地形的に起伏は見られず、本地区における北端と南端の比高差は 1mである。この地区一帯においては泥炭層が厚く堆積しており、北側から南側の丘陵地へ向かって次第に薄くなっていく状況が確認できた。泥炭層の下層は、目の粗い砂層（基本層序第 層）である。A 地区からは、竪穴式住居跡 1軒（注 1）土坑 3基、焼土遺構 1基、ピット 4基の遺構を検出した。これらの遺構は全て泥炭層下位の基本層序第 層から検出した。また遺物は、縄文時代前期初頭を主体とする遺物が基本層序第 層からダンボール箱換算で 7箱（土器 5箱、石器 2箱）分出土した。

注 1 竪穴式住居跡は平成 1年度の試掘調査報告において西側部分を報告済みであるが、全容を提示するために当該部分の原図を合成して図版を作成している。

1. 検出遺構と出土遺物

1) 竪穴式住居跡

S I - 01(第 4・ 5図)

位置 グリッド A C - A E - 24・ 29に位置しており、基本層序第 層上面において確認した。

重複 なし。

平面形・規模 北西～南東方向を長軸、北東～南西方向を短軸とする隅丸長方形を呈し、832 486cmを測る。床面積は 104 54㎡を測る。

壁 壁の高さは、東壁 34cm、西壁 34cm、南壁 28cm、北壁 40cmを測る。いずれの壁も緩やかに立ち上がる。

床 基本層序第 層を床面としており、ほぼ平坦である。

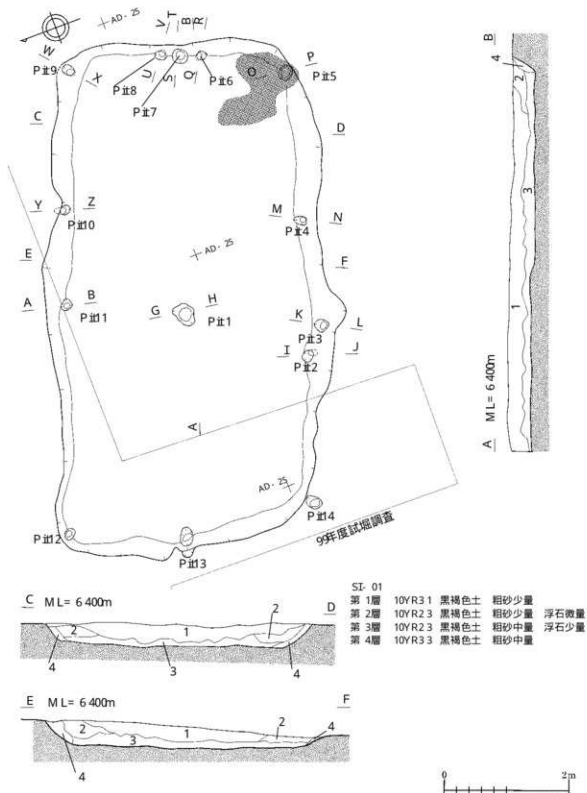
ピット 4基検出した。各ピットの規模は、Pit1= 40 28 44cm、Pit2= 18 16 12cm、Pit3= 24 20 12cm、Pit4= 20 14 14cm、Pit5= 28 20 26cm、Pit6= 16 15 17cm、Pit7= 24 22 29cm、Pit8= 18 14 22cm、Pit9= 20 15 25cm、Pit10= 16 13 30cm、Pit11= 20 18 9cm、Pit12= 20 15cm、Pit13= 31 20cm、Pit14= 25 18cmを測る。床面中央部に位置する Pit1は主柱穴、その他の PIT 2～14は壁柱穴と考えられる。

炉 検出しなかった。

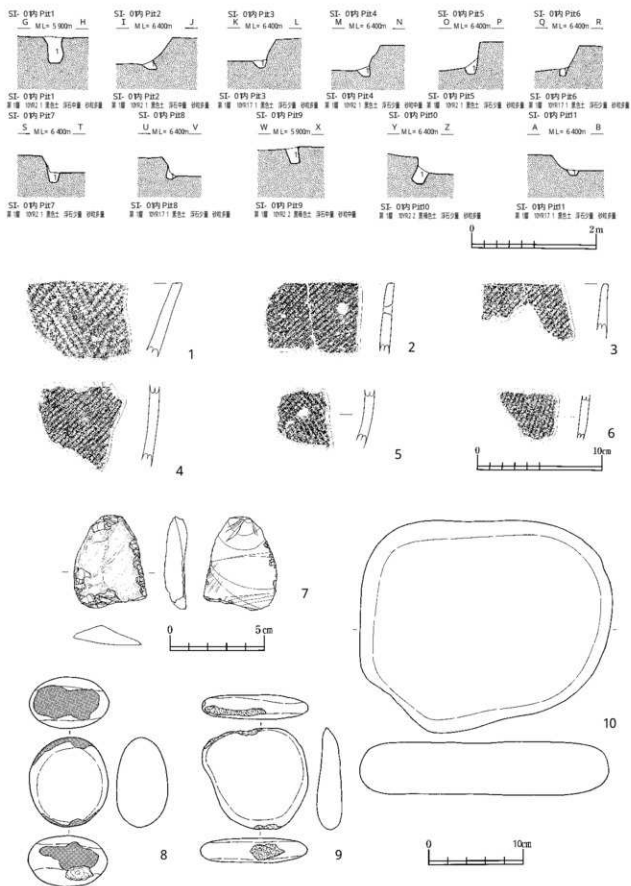
堆積土 4層に分層した。黒褐色を主体とする土層が堆積している。いずれの土層においても目の粗い砂粒が混入しており、下層にいくにしたがってその混入量が多い。 2層においては微量であるが浮石が確認できる。また、住居南東隅において炭化物を比較的多く含む土層が確認できた。土層堆積状況からみて自然堆積と考えられる。

出土遺物 覆土から第 群土器が 6片、剥片石器 1点、磨り石 1点、敲石 1点、台石 1点が出土した。土器は同一個体と考えられる。外面の文様は L R 縄文 (0段多条) の回転によって施文され、胴下半部において羽状を構成する。内面は丁寧な磨かれており、部分的に付着物がみられる。胎土には繊維が混入する。磨り石と敲石は平面形がそれぞれ円形、不整形を呈し、相対する側面に磨りの痕跡、敲打痕が

みられる。台石は平面が隅丸台形を呈し、平坦面を2面有するが、磨り及び敷きの明瞭な痕跡は認められない。



第4図 SI01



第 5 図 SI0内p並クシヨシ・出シ遺物

2) 焼土遺構

SN - 01(第6図)

位置 AC - 30グリッドに位置しており、基本層序第 層上面において確認した。

重複 なし。

平面形・規模 ほぼ円形を呈し、直径84cmを測る。

土層 被熱の具合によって3層に分層できた。黒褐色を主体とする土層である。

出土遺物 出土しなかった。

3) 土坑

SK - 01(第6図)

位置 AC - 31グリッドに位置しており、基本層序第 層上面において確認した。

重複 なし。

平面形・規模 楕円形を呈し、長軸101 短軸82 深さ32mを呈する。

断面形・壁 鍋底状を呈する。壁は緩やかに立ち上がる。

底面 基本層序第 層を掘り込んで底面としている。

堆積土 2層に分層した。壁付近に浮石・砂粒を少量混入する黒色土、中央部に浮石を少量混入する黒色土が堆積している。

出土遺物 出土しなかった。

SK - 02(第6図)

位置 AB - 37グリッドに位置しており、基本層序第 層上面において確認した。

重複 なし。

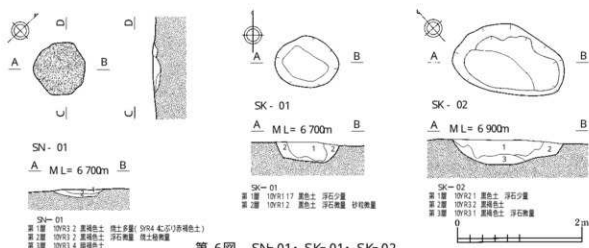
平面形・規模 楕円形を呈し、長軸180 短軸110 深さ40cmを呈する。

断面形・壁 鍋底状を呈する。壁は緩やかに立ち上がる。

底面 基本層序第 層を掘り込んで底面としている。

堆積土 3層に分層した。壁付近及び下層において黒褐色土を主体とする土層、中央部において浮石を少量混入する黒色土が堆積している。

出土遺物 出土しなかった。



第6図 SN-01・SK-01・SK-02

4) ピット

S P - 01(第 7 図)

位 置 A B - 26グリッドに位置しており、基本層序第 層上面において確認した。

重 複 なし。

平面形・規模 不整形を呈し、長軸 50 短軸 30 深さ 30cmを測る。

断面形・壁 壁はほぼ垂直に立ち上がる。

底 面 基本層序第 層を掘り込んで底面としている。

出土遺物 出土しなかった。

S P - 02(第 7 図)

位 置 A C - 36グリッドに位置しており、基本層序第 層上面において確認した。

重 複 なし。

平面形・規模 楕円形を呈し、長軸 30 短軸 21 深さ 14cmを測る。

断面形・壁 壁は緩やかな傾斜をもって立ち上がる。

底 面 基本層序第 層を掘り込んで底面としている。

堆積土 浮石を極微量に混入する黒色土による単一層である。

出土遺物 出土しなかった。

S P - 03(第 7 図)

位 置 A C - 39グリッドに位置しており、基本層序第 層上面において確認した。

重 複 なし。

平面形・規模 楕円形を呈し、長軸 30 短軸 25 深さ 20cmを測る。

断面形・壁 壁はほぼ垂直に立ち上がる。

底 面 基本層序第 層を掘り込んで底面としている。

堆積土 浮石を極微量に混入する黒色土による単一層である。

出土遺物 出土しなかった。

S P - 04(第 7 図)

位 置 A A - 56グリッドに位置しており、基本層序第 層上面において確認した。

重 複 なし。

平面形・規模 楕円形を呈し、長軸 32 短軸 24 深さ 16cmを測る。

断面形・壁 壁はほぼ垂直に立ち上がる。

底 面 基本層序第 層を掘り込んで底面としている。

堆積土 浮石・砂粒を混入する黒褐色土による単一層である。

出土遺物 出土しなかった。

S P - 05(第7図)

位置 AB - 57グリッドに位置しており、基本層序第 層上面において確認した。

重複 なし。

平面形・規模 楕円形を呈し、長軸30 短軸22 深さ17mを測る。

断面形・壁 壁はほぼ垂直に立ち上がる。

底面 基本層序第 層を掘り込んで底面としている。

堆積土 浮石を少量混入する黒色土による単一層である。

出土遺物 出土しなかった。

S P - 06(第7図)

位置 AA - 58グリッドに位置しており、基本層序第 層上面において確認した。

重複 なし。

平面形・規模 楕円形を呈し、長軸30 短軸22 深さ17mを測る。

断面形・壁 壁はほぼ垂直に立ち上がる。

底面 基本層序第 層を掘り込んで底面としている。

堆積土 浮石を少量混入する黒褐色土による単一層である。

出土遺物 出土しなかった。

S P - 07(第7図)

位置 AB - 58グリッドに位置しており、基本層序第 層上面において確認した。

重複 なし。

平面形・規模 楕円形を呈し、長軸25 短軸24 深さ21mを測る。

断面形・壁 壁はほぼ垂直に立ち上がる。

底面 基本層序第 層を掘り込んで底面としている。

堆積土 浮石を混入する黒色土による単一層である。

出土遺物 出土しなかった。

S P - 08(第7図)

位置 AB - 59グリッドに位置しており、基本層序第 層上面において確認した。

重複 なし。

平面形・規模 楕円形を呈し、長軸31 短軸26 深さ21mを測る。

断面形・壁 壁はほぼ垂直に立ち上がる。

底面 基本層序第 層を掘り込んで底面としている。

堆積土 浮石・砂粒を混入する黒色土による単一層である。

出土遺物 出土しなかった。

S P - 09(第 7 図)

位 置 A A - 59グリッドに位置しており、基本層序第 層上面において確認した。

重 複 なし。

平面形・規模 楕円形を呈し、長軸 48 短軸 24 深さ 19mを測る。

断面形・壁 壁は緩やかな傾斜をもって立ち上がる。

底 面 基本層序第 層を掘り込んで底面としている。

堆積土 浮石を多量に混入する黒褐色土による単一層である。

出土遺物 出土しなかった。

S P - 10(第 7 図)

位 置 A A - 59グリッドに位置しており、基本層序第 層上面において確認した。

重 複 なし。

平面形・規模 楕円形を呈し、長軸 63 短軸 50 深さ 16cmを測る。

断面形・壁 壁は緩やかな傾斜をもって立ち上がる。

底 面 基本層序第 層を掘り込んで底面としている。

堆積土 浮石を多量に混入する黒色土による単一層である。

出土遺物 出土しなかった。

S P - 11(第 7 図)

位 置 A A - 60グリッドに位置しており、基本層序第 層上面において確認した。

重 複 なし。

平面形・規模 楕円形を呈し、長軸 33 短軸 25 深さ 28cmを測る。

断面形・壁 壁はほぼ垂直に立ち上がる。

底 面 基本層序第 層を掘り込んで底面としている。

堆積土 浮石を中量、砂粒を極微量に混入する黒色土による単一層である。

出土遺物 出土しなかった。

S P - 12(第 7 図)

位 置 A A - 60グリッドに位置しており、基本層序第 層上面において確認した。

重 複 なし。

平面形・規模 ほぼ円形を呈し、長軸 40 短軸 39 深さ 12mを測る。

断面形・壁 壁は緩やかな傾斜をもって立ち上がる。

底 面 基本層序第 層を掘り込んで底面としている。

堆積土 浮石を少量混入する黒色土による単一層である。

出土遺物 出土しなかった。

S P - 13(第7図)

位置 AA - 60グリッドに位置しており、基本層序第 層上面において確認した。

重複 なし。

平面形・規模 楕円形を呈し、長軸61 短軸33 深さ23mを測る。

断面形・壁 壁は緩やかな傾斜をもって立ち上がる。

底面 基本層序第 層を掘り込んで底面としている。

堆積土 浮石を中量、砂粒を極微量に混入する黒色土による単一層である。

出土遺物 出土しなかった。

S P - 14(第7図)

位置 AA - 60グリッドに位置しており、基本層序第 層上面において確認した。

重複 なし。

平面形・規模 楕円形を呈し、長軸43 短軸25 深さ42mを測る。

断面形・壁 壁はほぼ垂直に立ち上がる。

底面 基本層序第 層を掘り込んで底面としている。

堆積土 浮石を少量混入する黒色土による単一層である。

出土遺物 出土しなかった。

S P - 15(第7図)

位置 AB - 60グリッドに位置しており、基本層序第 層上面において確認した。

重複 なし。

平面形・規模 楕円形を呈し、長軸36 短軸28 深さ29mを測る。

断面形・壁 壁はほぼ垂直に立ち上がる。

底面 基本層序第 層を掘り込んで底面としている。

堆積土 浮石を中量、砂粒を少量混入する黒褐色土による単一層である。

出土遺物 出土しなかった。

S P - 16(第7図)

位置 AA - 67グリッドに位置しており、基本層序第 層上面において確認した。

重複 なし。

平面形・規模 楕円形を呈し、長軸45 短軸29 深さ16mを測る。

断面形・壁 壁は緩やかな傾斜をもって立ち上がる。

底面 基本層序第 層を掘り込んで底面としている。

堆積土 浮石を少量、砂粒を極微量に混入する黒色土による単一層である。

出土遺物 出土しなかった。

S P - 17(第 7 図)

位 置 A B 60グリッドに位置しており、基本層序第 層上面において確認した。

重 複 なし。

平面形・規模 楕円形を呈し、長軸42 短軸34 深さ3cmを測る。

断面形・壁 壁は緩やかな傾斜をもって立ち上がる。

底 面 基本層序第 層を掘り込んで底面としている。

堆積土 浮石を少量、砂粒を少量混入する黒色土による単一層である。

出土遺物 出土しなかった。

S P - 18(第 7 図)

位 置 A A - 6グリッドに位置しており、基本層序第 層上面において確認した。

重 複 なし。

平面形・規模 ほぼ円形を呈し、長軸23 短軸21 深さ1cmを測る。

断面形・壁 壁は緩やかな傾斜をもって立ち上がる。

底 面 基本層序第 層を掘り込んで底面としている。

堆積土 浮石を中量混入する黒色土による単一層である。

出土遺物 出土しなかった。

S P - 19(第 8 図)

位 置 A A 6グリッドに位置しており、基本層序第 層上面において確認した。

重 複 なし。

平面形・規模 楕円形を呈し、長軸38 短軸33 深さ20cmを測る。

断面形・壁 壁は緩やかな傾斜をもって立ち上がる。

底 面 基本層序第 層を掘り込んで底面としている。

堆積土 浮石を少量混入する黒色土による単一層である。

出土遺物 出土しなかった。

S P - 20(第 8 図)

位 置 A A 6グリッドに位置しており、基本層序第 層上面において確認した。

重 複 なし。

平面形・規模 楕円形を呈し、長軸54 短軸49 深さ15cmを測る。

断面形・壁 壁は緩やかな傾斜をもって立ち上がる。

底 面 基本層序第 層を掘り込んで底面としている。

堆積土 浮石を中量混入する黒色土による単一層である。

出土遺物 出土しなかった。

S P - 21(第 8 図)

位置 AB - 21グリッドに位置しており、基本層序第 1 層上面において確認した。

重複 なし。

平面形・規模 楕円形を呈し、長軸 41 短軸 31 深さ 25cm を測る。

断面形・壁 壁はほぼ垂直に立ち上がる。

底面 基本層序第 1 層を掘り込んで底面としている。

堆積土 3層に分層した。上層は浮石を混入し黒色を呈する土層、下層は砂粒を中量混入する暗褐色を呈する土層が堆積している。

出土遺物 出土しなかった。

S P - 22(第 8 図)

位置 AB - 6グリッドに位置しており、基本層序第 1 層上面において確認した。

重複 なし。

平面形・規模 楕円形を呈し、長軸 34 短軸 26 深さ 29cm を測る。

断面形・壁 壁はほぼ垂直に立ち上がる。

底面 基本層序第 1 層を掘り込んで底面としている。

堆積土 2層に分層した。黒色を主体とする土層が堆積している。

出土遺物 出土しなかった。

S P - 23(第 8 図)

位置 AB - 6グリッドに位置しており、基本層序第 1 層上面において確認した。

重複 なし。

平面形・規模 ほぼ円形を呈し、長軸 33 短軸 28 深さ 19cm を測る。

断面形・壁 壁は緩やかな傾斜をもって立ち上がる。

底面 基本層序第 1 層を掘り込んで底面としている。

堆積土 2層に分層した。黒色を主体とする土層が堆積している。

出土遺物 出土しなかった。

S P - 24(第 8 図)

位置 AA - 62グリッドに位置しており、基本層序第 1 層上面において確認した。

重複 なし。

平面形・規模 楕円形を呈し、長軸 53 短軸 40 深さ 24cm を測る。

断面形・壁 壁はほぼ垂直に立ち上がる。

底面 基本層序第 1 層を掘り込んで底面としている。

堆積土 2層に分層した。黒色を主体とする土層が堆積している。

出土遺物 出土しなかった。

S P - 25(第 8 図)

位 置 A B - 2グリッドに位置しており、基本層序第 層上面において確認した。

重 複 なし。

平面形・規模 楕円形を呈し、長軸 63 短軸 33 深さ 44cmを測る。

断面形・壁 壁はほぼ垂直に立ち上がる部分と緩やかな傾斜をもって立ち上がる部分がみられる。

底 面 基本層序第 層を掘り込んで底面としている。

堆積土 2層に分層した。中央部に浮石を少量混入し黒褐色を呈する土層、その外側に浮石を混入し黒色を呈する土層が堆積している。

出土遺物 出土しなかった。

S P - 26(第 8 図)

位 置 A B - 6グリッドに位置しており、基本層序第 層上面において確認した。

重 複 なし。

平面形・規模 不整形を呈し、長軸 45 短軸 29 深さ 16cmを測る。

断面形・壁 壁は緩やかな傾斜をもって立ち上がる。

底 面 基本層序第 層を掘り込んで底面としている。

堆積土 2層に分層した。上層は浮石を少量混入し黒色を呈する土層で、下層は浮石を中量混入し黒褐色を呈する土層が堆積している。

出土遺物 出土しなかった。

S P - 27(第 8 図)

位 置 A B ・ A C - 6グリッドに位置しており、基本層序第 層上面において確認した。

重 複 なし。

平面形・規模 楕円形を呈し、長軸 36 短軸 22 深さ 27cmを測る。

断面形・壁 壁はほぼ垂直に立ち上がる。

底 面 基本層序第 層を掘り込んで底面としている。

堆積土 浮石・砂粒を少量混入する黒色土による単一層である。

出土遺物 出土しなかった。

S P - 28(第 8 図)

位 置 A A ・ A B - 6グリッドに位置しており、基本層序第 層上面において確認した。

重 複 なし。

平面形・規模 不整形を呈し、長軸 46 短軸 25 深さ 27cmを測る。

断面形・壁 壁は緩やかな傾斜をもって立ち上がる。

底 面 基本層序第 層を掘り込んで底面としている。

堆積土 浮石を中量混入する黒褐色土による単一層である。

出土遺物 出土しなかった。

S P - 29(第 8図)

位置 AB - 63グリッドに位置しており、基本層序第 層上面において確認した。

重複 なし。

平面形・規模 ほぼ円形を呈し、長軸 35 短軸 29 深さ 20cmを測る。

断面形・壁 壁はほぼ垂直に立ち上がる。

底面 基本層序第 層を掘り込んで底面としている。

堆積土 浮石を少量混入する黒色土による単一層である。

出土遺物 出土しなかった。

S P - 30(第 8図)

位置 AA・AB - 63グリッドに位置しており、基本層序第 層上面において確認した。

重複 なし。

平面形・規模 楕円形を呈し、長軸 46 短軸 25 深さ 2cmを測る。

断面形・壁 壁はほぼ垂直に立ち上がる部分と緩やかな傾斜をもって立ち上がる部分がみられる。

底面 基本層序第 層を掘り込んで底面としている。

堆積土 浮石を中量混入する黒色土による単一層である。

出土遺物 出土しなかった。

S P - 31(第 8図)

位置 AB - 63グリッドに位置しており、基本層序第 層上面において確認した。

重複 なし。

平面形・規模 楕円形を呈し、長軸 41 短軸 28 深さ 18cmを測る。

断面形・壁 壁はほぼ垂直に立ち上がる部分と緩やかな傾斜をもって立ち上がる部分がみられる。

底面 基本層序第 層を掘り込んで底面としている。

堆積土 浮石を中量混入する黒色土による単一層である。

出土遺物 出土しなかった。

S P - 32(第 8図)

位置 AB - 63グリッドに位置しており、基本層序第 層上面において確認した。

重複 なし。

平面形・規模 楕円形を呈し、長軸 36 短軸 27 深さ 14cmを測る。

断面形・壁 壁はほぼ垂直に立ち上がる。

底面 基本層序第 層を掘り込んで底面としている。

堆積土 2層に分層した。上層は浮石を中量混入し黒褐色を呈する土層で、下層は浮石・砂粒を極微量に混入しにぶい黄褐色を呈する土層が堆積している。

出土遺物 出土しなかった。

S P - 33(第 8 図)

位 置 A B - 63グリッドに位置しており、基本層序第 層上面において確認した。

重 複 なし。

平面形・規模 ほぼ円形を呈し、長軸 41 短軸 34 深さ 18mを測る。

断面形・壁 壁はほぼ垂直に立ち上がる部分と緩やかな傾斜をもって立ち上がる部分が見られる。

底 面 基本層序第 層を掘り込んで底面としている。

堆積土 2層に分層した。浮石を混入する黒褐色を主体とする土層が堆積している。

出土遺物 出土しなかった。

S P - 34(第 8 図)

位 置 A B - 64グリッドに位置しており、基本層序第 層上面において確認した。

重 複 なし。

平面形・規模 楕円形を呈し、長軸 37 短軸 21 深さ 18mを測る。

断面形・壁 壁はほぼ垂直に立ち上がる。

底 面 基本層序第 層を掘り込んで底面としている。

堆積土 2層に分層した。上層は浮石を多量に混入し黒色を呈する土層で、下層は浮石・砂粒を少量に混入しにぶい黄褐色を呈する土層が堆積している。

出土遺物 出土しなかった。

S P - 35(第 8 図)

位 置 A A - 64グリッドに位置しており、基本層序第 層上面において確認した。

重 複 なし。

平面形・規模 楕円形を呈し、長軸 37 短軸 29 深さ 15mを測る。

断面形・壁 壁はほぼ垂直に立ち上がる。

底 面 基本層序第 層を掘り込んで底面としている。

堆積土 浮石を少量、炭化物を極微量に混入する黒色土による単一層である。

出土遺物 出土しなかった。

S P - 36(第 9 図)

位 置 A B - 64グリッドに位置しており、基本層序第 層上面において確認した。

重 複 なし。

平面形・規模 楕円形を呈し、長軸 37 短軸 23 深さ 28mを測る。

断面形・壁 壁はほぼ垂直に立ち上がる。

底 面 基本層序第 層を掘り込んで底面としている。

堆積土 浮石を中量混入する黒褐色土による単一層である。

出土遺物 出土しなかった。

S P - 37(第 9 図)

位置 A E - 64グリッドに位置しており、基本層序第 層上面において確認した。

重複 なし。

平面形・規模 楕円形を呈し、長軸 49 短軸 40 深さ 15cmを測る。

断面形・壁 壁は緩やかな傾斜をもって立ち上がる。

底面 基本層序第 層を掘り込んで底面としている。

堆積土 浮石を中量混入し黒色を呈する土層による単一層である。

出土遺物 出土しなかった。

S P - 38(第 9 図)

位置 A E - 64グリッドに位置しており、基本層序第 層上面において確認した。

重複 なし。

平面形・規模 楕円形を呈し、長軸 42 短軸 19 深さ 15cmを測る。

断面形・壁 壁は緩やかな傾斜をもって立ち上がる。

底面 基本層序第 層を掘り込んで底面としている。

堆積土 浮石を中量混入する黒色土による単一層である。

出土遺物 出土しなかった。

S P - 39(第 9 図)

位置 A E - 64グリッドに位置しており、基本層序第 層上面において確認した。

重複 なし。

平面形・規模 不整形を呈し、長軸 64 短軸 47 深さ 13cmを測る。

断面形・壁 壁は緩やかな傾斜をもって立ち上がる。

底面 基本層序第 層を掘り込んで底面としている。

堆積土 2層に分層した。浮石を混入し黒色を主体とする土層が堆積している。

出土遺物 出土しなかった。

S P - 40(第 9 図)

位置 A E - 64グリッドに位置しており、基本層序第 層上面において確認した。

重複 なし。

平面形・規模 楕円形を呈し、長軸 47 短軸 36 深さ 22cmを測る。

断面形・壁 壁は緩やかな傾斜をもって立ち上がる。

底面 基本層序第 層を掘り込んで底面としている。

堆積土 2層に分層した。浮石を混入し黒色を主体とする土層が堆積している。

出土遺物 出土しなかった。

S P - 41(第 9 図)

位 置 A B - 64グリッドに位置しており、基本層序第 層上面において確認した。

重 複 なし。

平面形・規模 不整形を呈し、長軸 43 短軸 32 深さ 18mを測る。

断面形・壁 壁は緩やかな傾斜をもって立ち上がる。

底 面 基本層序第 層を掘り込んで底面としている。

堆積土 浮石を中量、炭化物を極微量に混入する黒色土による単一層である。

出土遺物 出土しなかった。

S P - 42(第 9 図)

位 置 A C - 64グリッドに位置しており、基本層序第 層上面において確認した。

重 複 なし。

平面形・規模 楕円形を呈し、長軸 39 短軸 29 深さ 13mを測る。

断面形・壁 壁は緩やかな傾斜をもって立ち上がる。

底 面 基本層序第 層を掘り込んで底面としている。

堆積土 浮石を少量混入する黒色土による単一層である。

出土遺物 出土しなかった。

S P - 43(第 9 図)

位 置 A C - 65グリッドに位置しており、基本層序第 層上面において確認した。

重 複 なし。

平面形・規模 不整形を呈し、長軸 43 短軸 32 深さ 18mを測る。

断面形・壁 壁はほぼ垂直に立ち上がる。

底 面 基本層序第 層を掘り込んで底面としている。

堆積土 浮石を中量、砂粒を少量混入する黒色土による単一層である。

出土遺物 出土しなかった。

S P - 44(第 9 図)

位 置 A A - 65グリッドに位置しており、基本層序第 層上面において確認した。

重 複 なし。

平面形・規模 ほぼ円形を呈し、長軸 38 短軸 34 深さ 15cmを測る。

断面形・壁 壁は緩やかな傾斜をもって立ち上がる。

底 面 基本層序第 層を掘り込んで底面としている。

堆積土 浮石を中量混入する黒色土による単一層である。

出土遺物 出土しなかった。

S P - 45(第 9 図)

位置 A A - 65グリッドに位置しており、基本層序第 層上面において確認した。

重複 なし。

平面形・規模 ほぼ円形を呈し、長軸 38 短軸 34 深さ 15cmを測る。

断面形・壁 壁は緩やかな傾斜をもって立ち上がる。

底面 基本層序第 層を掘り込んで底面としている。

堆積土 浮石を少量混入する黒色土による単一層である。

出土遺物 出土しなかった。

S P - 46(第 9 図)

位置 A A - 65グリッドに位置しており、基本層序第 層上面において確認した。

重複 なし。

平面形・規模 ほぼ円形を呈し、長軸 38 短軸 34 深さ 15cmを測る。

断面形・壁 壁はほぼ垂直に立ち上がる部分と緩やかな傾斜をもって立ち上がる部分がみられる。

底面 基本層序第 層を掘り込んで底面としている。

堆積土 浮石を少量混入する黒褐色土による単一層である。

出土遺物 出土しなかった。

S P - 47(第 9 図)

位置 A B - 65グリッドに位置しており、基本層序第 層上面において確認した。

重複 なし。

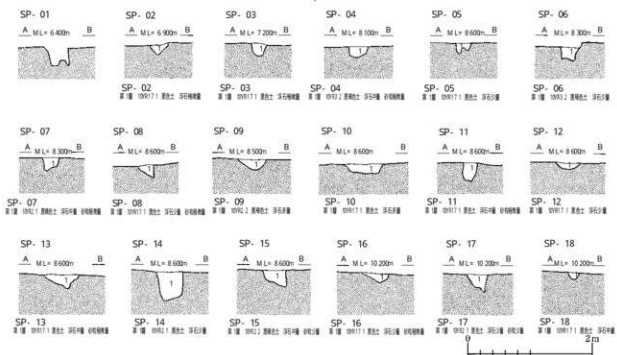
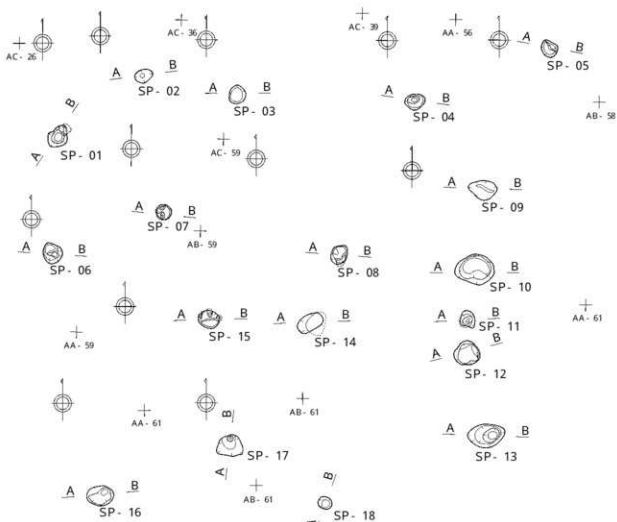
平面形・規模 ほぼ円形を呈し、長軸 38 短軸 34 深さ 15cmを測る。

断面形・壁 壁はほぼ垂直に立ち上がる部分と緩やかな傾斜をもって立ち上がる部分がみられる。

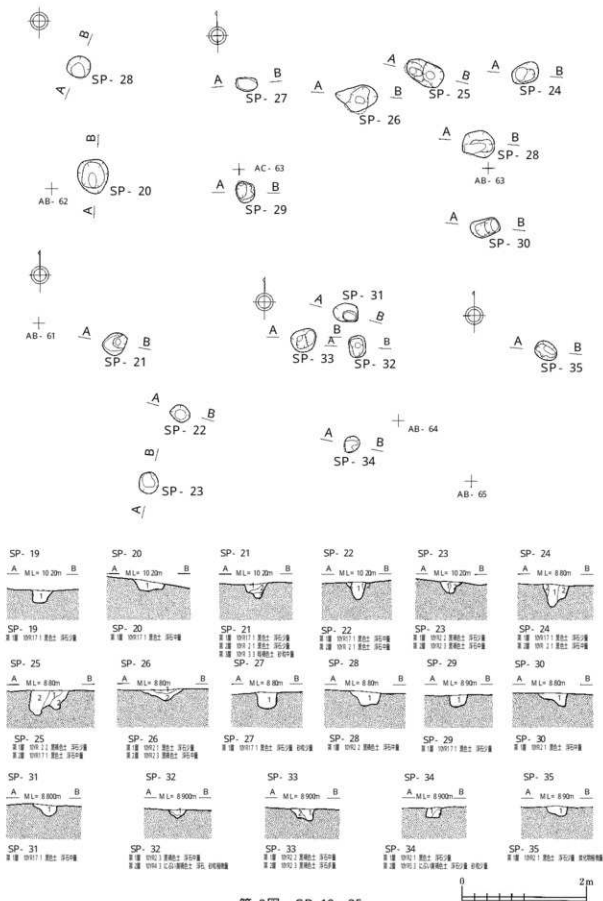
底面 基本層序第 層を掘り込んで底面としている。

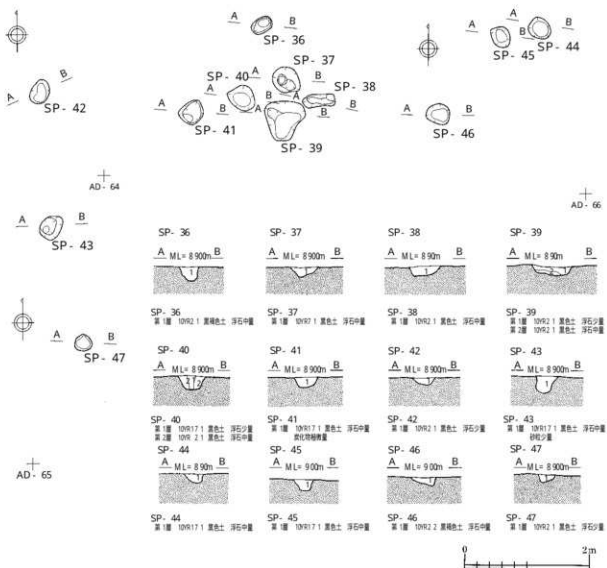
堆積土 浮石を少量混入する黒色土による単一層である。

出土遺物 出土しなかった。



第 7 図 SP-01~18





第 9 図 SP-36~47

5) 遺構外出土遺物

・土器

A地区の遺構外からはダンボール箱換算で5箱分の土器が出土した。その時期をみると、縄文時代早期～後期末までのものがあるが、なかでも基本層序第 層から出土した縄文時代前期初頭に帰属する土器の量が圧倒的に多い。以下、遺構外出土土器について分類ごとに記述する。

第 群 縄文時代早期の土器(第10図 1～3)

第 層から破片で1個体分が出土した。いずれも胴部の破片である。外面には貝殻条痕が横位に施文されており、条痕の幅は概ね4～6mmである。内面には文様は認められないが、3の内面には炭化物が付着している。色調は外面が灰褐色、内面は黒褐色を呈する。器厚は8～10mmで、焼成は堅緻である。ムシリ 式に比定される土器である。

第 群 縄文時代前期初頭の土器(第10図 4～第19図 129)

本地区において最も出土量の多い土器であり、第 層と 層から出土した。施文される文様によって、a. 刺突文・コンパス文が施される土器、b. 押し引き沈線文が施される土器、c. 器面全面に縄文が回転施文される土器に細分した。これらは縄文時代前期初頭の表館式(佐藤・渡辺 1961)、早稲田6類(佐藤他 1957)に比定される土器である。表館式土器と早稲田6類土器の前後関係については未だ統一した見解は得られていないことから、その前後関係を明らかにすることを念頭に置き、各類の土器の図版をそれぞれ層位ごとに分け、下層の第 層のものから掲載している。

a. 刺突文・コンパス文が施されるもの(第10図 4～第19図)

第 層出土資料は4～22 第 層出土資料は23・24である。第 層と第 層から出土しているが、第 層出土資料は極めて少量であり、第 層出土資料が主体を占める。4と5、6と7、9・10・11 15と16 20と21はそれぞれ同一個体である。全体形状が明らかなものはないため、器形については不明な点が多いが、各部位に着目するとある程度推定が可能である。口唇部形状は内削ぎが施されているものがほとんどであり、9・10 12はほぼ平坦である。口縁部形状は平縁が多く、15のみ波状を呈する。口頸部は4～7、9、15のようにややくびれているものが多く、14のみ直線的な器形である。胴部は底部にむかって18 22のように窄まる形状を呈するものと思われる。底部の破片は21・22であり、22は極めて径の小さな底部である。内面にはミガキが認められるものがあり、いずれの胎土にも繊維の混入が認められる。

それぞれの文様要素に着目すると、個体別に見てコンパス文については大きな差異はみとめられないものの、刺突文については使用された施文具の形状によって施された刺突に差異が認められ、断面が長方形の工具によるもの(4、5、15 16 24)、半裁竹管状の工具によるもの(6、7、9、11 12 18)、薄片状の工具によるもの(8、9～11 13 20・21)、断面が円形の工具によるもの(19)、原体の圧痕によるもの(22)がみられる。9～11の個体は断面が長方形の工具による刺突と半裁竹管状の工具による刺突の両者が併存し、特に竹管状の工具による刺突は半裁竹管の内側を押し付けたような「押し引き」に近い文様であり、刺突文とコンパス文はヘラ状工具による沈線で区画されている。12は沈線により前もって区画を設け、半裁竹管による刺突を施している。文様構成に着目すると刺突文及びコンパス文がセットで施文されるものがほとんどである。刺突文及びコンパス文のみ確認でき

る資料も存在するが、破片であるためにセットで確認できなかったものも存在すると思われる。刺突文とコンパス文がセットで施されているものには、刺突文とコンパス文が重層的に施されているもの(4・5、9~11、21・22)、刺突列による三角繋ぎの区画が構成されその内部にコンパス文が充填されるもの(15・16)、口縁上部及び胴部下半に数条の刺突列とコンパス文が1単位ずつ限定的に施されているもの(6・7、18)、口縁上部に刺突列、胴部にコンパス文が施されるもの(14)がみられる。地文をもつものについてはほとんどがループ文であるが、14を除いてややための原体によって施されている。20についてはためのL原体を縦位に押圧している。

本類土器は刺突文とコンパス文をメルクマールとする表館式・芦野群に比定される土器である。

b. 押し引き沈線文が施されるもの(第12図~第13図50)

第 層出土資料は25~31、第 層出土資料は32~50である。a類と同様に第 層・第 層から出土しているが、第 層出土資料は少なく、第 層出土遺物が主体を占める。25と27、29と30、36~38、40~43はそれぞれ同一個体である。全体形状が明らかなのはないが、各部位の形状からある程度の推定が可能である。口唇部形状は平坦に成形されているものが多く、口縁部形状は平縁と波状を呈するものがあり、後者はやや外反するものが多い。頸部においてa類のように若干のくびれを有するものは無くほぼ直線的である。底部は29~31、49・50のように尖底を呈する。いずれの胎土においても繊維の混入が認められる。内面にミガキが認められるものが多い。各資料の器面に施されている押し引き沈線による凹みを破断面から観察するといずれもその断面は半円状を呈し、半截竹管状の工具ないし断面が円形の工具が想定される。その径は3~4mmである。多くは押し引きによって沈線状に落ち込むが、28、45のように押し引きが浅いもの、29・30、48のように「押し」を強く「引き」を弱く施し、一見刺突文状にみえるものもある。文様構成をみると、地文を有し数条の押し引き沈線文が口縁部ないし底部に限定的に施されるもの(25~38、45、47~49)と、器面全面に押し引き沈線文が施されるもの(39~44、46、50)に細分できる。前者の地文にはループ文、縄端回転文、斜縄文がみられる。後者は直線及び曲線状の押し引き沈線文により幾何学的な文様を構成している。

本類土器は押し引き沈線文をメルクマールとする早稲田6類に比定される土器である。

c. 器面全面に縄文が回転施文されるもの(第13図51~第15図)

更に文様によって、1. ループ文が施されるもの、2. 縄端回転文が施されるもの、3. 斜縄文・羽状縄文が施されるものに細分できる。いずれの胎土にも繊維が混入する。

1. ループ文が施されるもの(51~58)

末端にループをもつ原体が回転施文された土器である。第 層出土資料は51、第 層出土資料は52~58である。第 層出土資料が主体を占める。口唇部形状は51においては内削ぎがみられるがそれ以外は平坦に整形されている。口縁部形状は平縁と波状を呈するものがある。胴部形状は54を除いてほとんどがほぼ直線的に口縁部方向に立ち上がる。54を除いて、内面にはミガキが認められる。文様は54を除いて、いずれも全面にループ文が重層的に施されており、56はループをもつ原体によって羽状縄文が施されている。第 層から出土した51に使用されている原体は第 層出土資料に比べてかなり太く、この施文原体の差異以外にも口唇部形状・内面調整においても52~58とは差異が認められる。54はループ文が口縁部に限定され、胴部はLR(0段多条)を回転方向においても52~58とは差異が認められる。54は羽状を構成しており、この文様構成のほか、胴部が張り出し、頸部がくびれ、口縁が外反するという器形上の点においても、他の資料とは異なる土器である。

本類土器について、51は表館式、52・53・55～58は早稲田6類、54は大木 式に比定される。

2. 縄端回転文が施されるもの(第19図59～64)

全て破片資料である。第 層出土資料は59～61、第 層出土資料は62～64である。口縁部形状は平縁のものど波状を呈するものがある。口唇部形状はいずれもほぼ平坦に整形されている。口縁部は61・64はやや外反するが、それ以外は直線的に立ち上がる。いずれの内面においてもミガキが認められる。文様は縄端回転文が重層的に施されている。

本類土器は早稲田6類土器に比定される土器である。

3. 斜縄文・羽状縄文が施されるもの(第19図65～67)

全て口縁部付近の破片資料である。第 層出土資料は65、第 層出土資料は66・67である。口縁部形状はいずれも平縁と考えられ、ほぼ直線的に立ち上がる。口唇部は65・67はやや丸みを帯びるが、66は平坦に整形されている。66・67の内面にはミガキがみとめられる。文様はいずれも単節縄文が施されており、69は羽状を呈する。

本類土器は口唇部形状からみて早稲田6類に比定される可能性が高い。

d. 胴部・底部の資料(第16～第19図131)

a～c類に分類し得ない胴部・底部の破片資料を一括した。いずれも縄文の回転により文様が施されている資料である。第 層出土資料は68～103、第 層出土資料は104～131である。ループ文が施されるものは68～79、104～115、縄端回転文が施されるものは80～92、116～125、斜縄文・羽状縄文が施されるものは93～103、126～131である。各文様要素によって第 層・ 層出土資料を比較すると、ループ文・縄端回転文については細めの原体によって施文される第 層出土資料に比べ第 層出土資料はかなり太い原体によって施文されるものが多い。ループ文が施されているものは内面にミガキが認められるものと認められないものがあるが、縄端回転文と斜縄文・羽状縄文が施されているものについてはほとんどの内面においてミガキが認められる。

a～c類と比較して、太めの原体により文様が施されているものは表館式、細めの原体による縄端回転文が施されるものは早稲田6類に比定されると考えられるが、それ以外については明確に比定できない。

第 群 縄文時代中期前半の土器(第19図132)

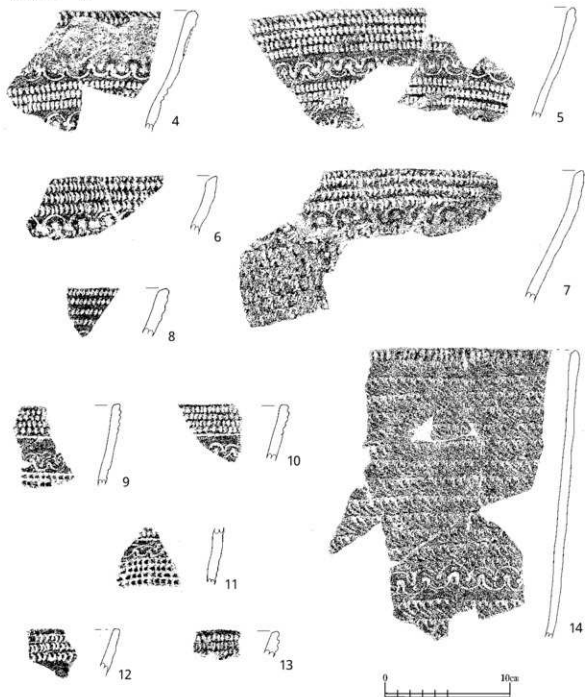
本地区においては第 層から口縁部破片が1点出土した。波状口縁を呈し、隆帯が貼り付けられている。器面にはLR Lの押圧、隆帯上にはLの押圧が施されている。内面はミガキによって調整されている。繊維の混入はみられない。縄文時代中期前半の円筒上層b式土器に比定される。

第 群 縄文時代中期後半～後期初頭の土器(第19図133)

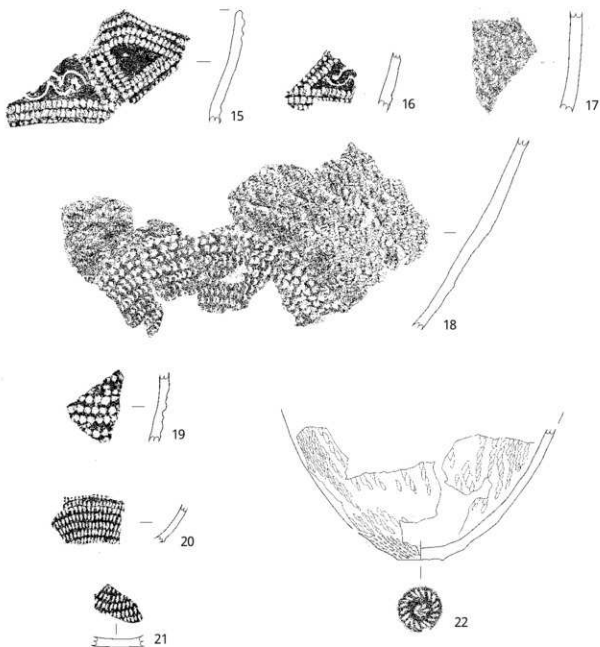
本地区においては第 層から胴部破片が1点出土した。地文としてLR 縄文が施され、4～5mmの太さの沈線により連携三角文・連携渦巻文が施されている。内面はナデによって調整されている。縄文時代後期初頭の弥栄平(2)式(成田 1988)に比定される土器である。



群 a 類 - 層



第 1 圖 A 地区遺構外出土土器

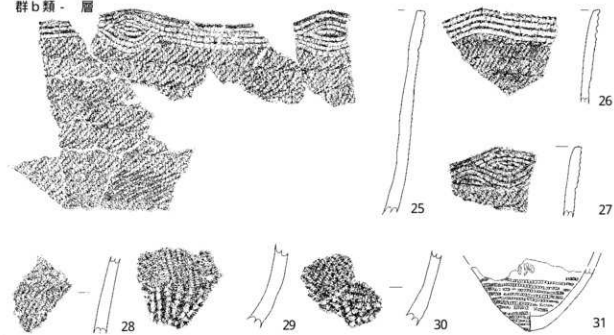


群 a 類 - 層

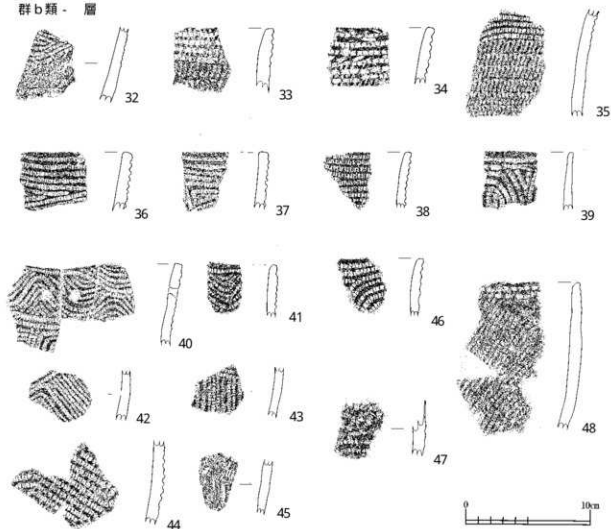


第 1 図 A 地区遺構外出土土器

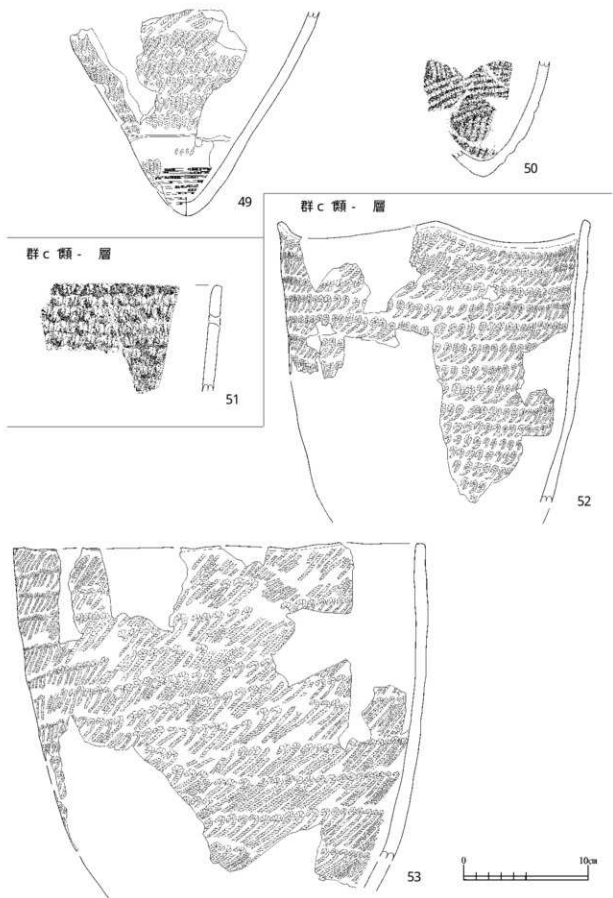
群b類 - 層



群b類 - 層



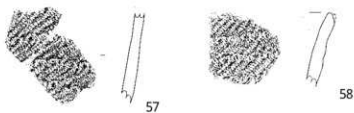
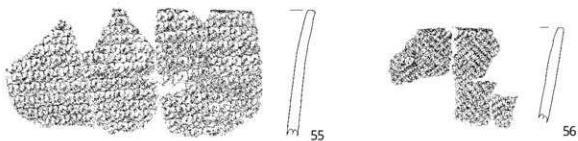
第12図 A地区遺構外出土土器



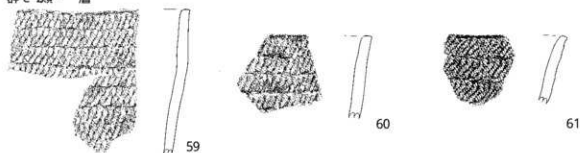
第13図 A地区遺構外出土土器



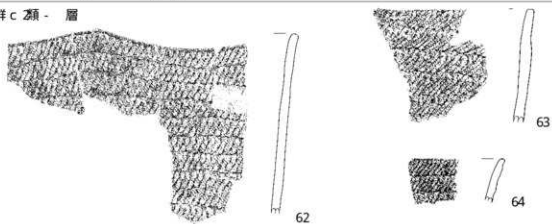
第14図 A地区遺構外出土土器



群 c 2類 - 層



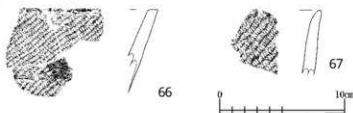
群 c 2類 - 層



群 c 3類 - 層

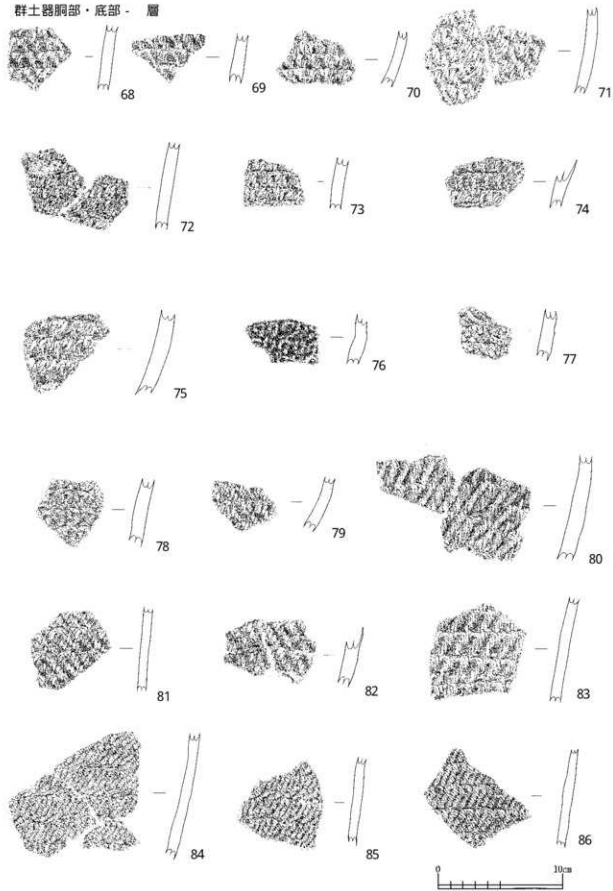


群 c 3類 - 層

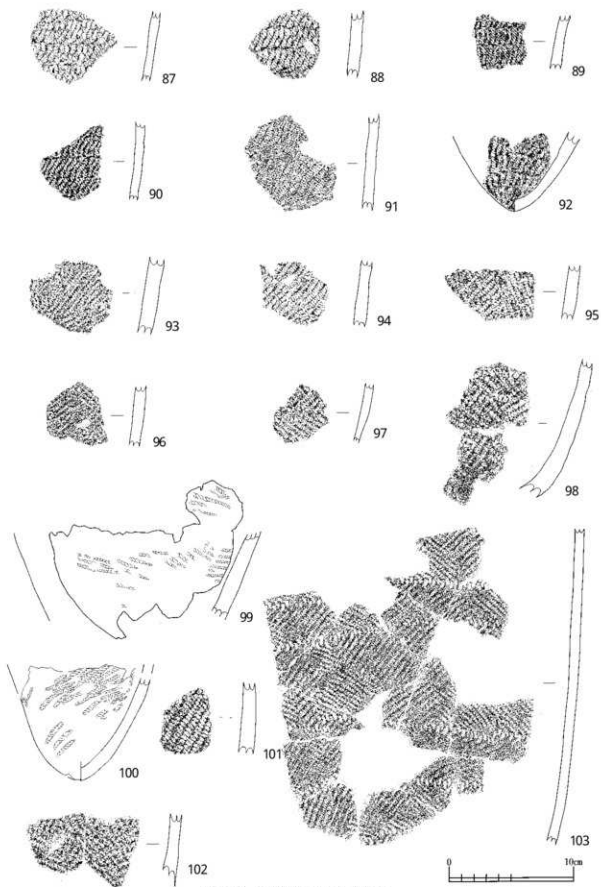


第19図 A地区遺構外出土土器

群土器胴部・底部 - 層

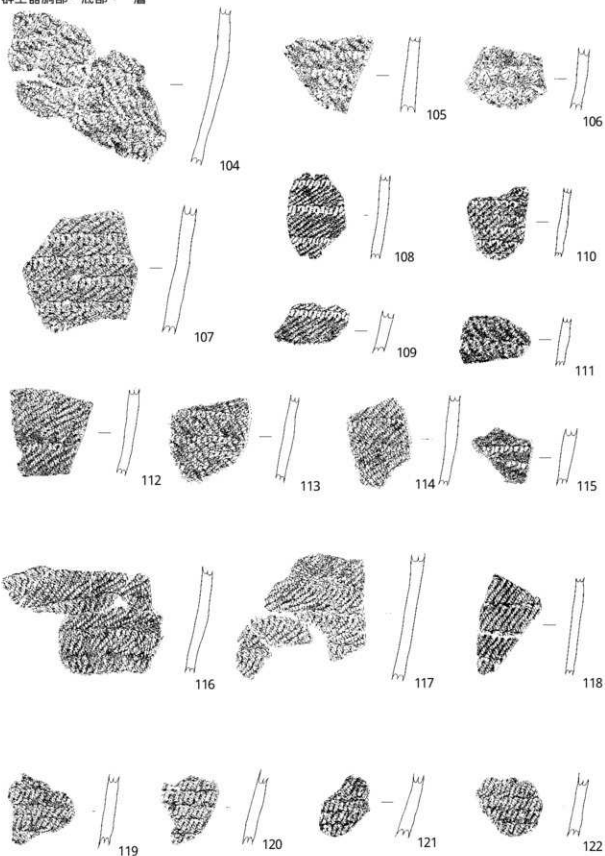


第14図 A地区遺構外出土土器

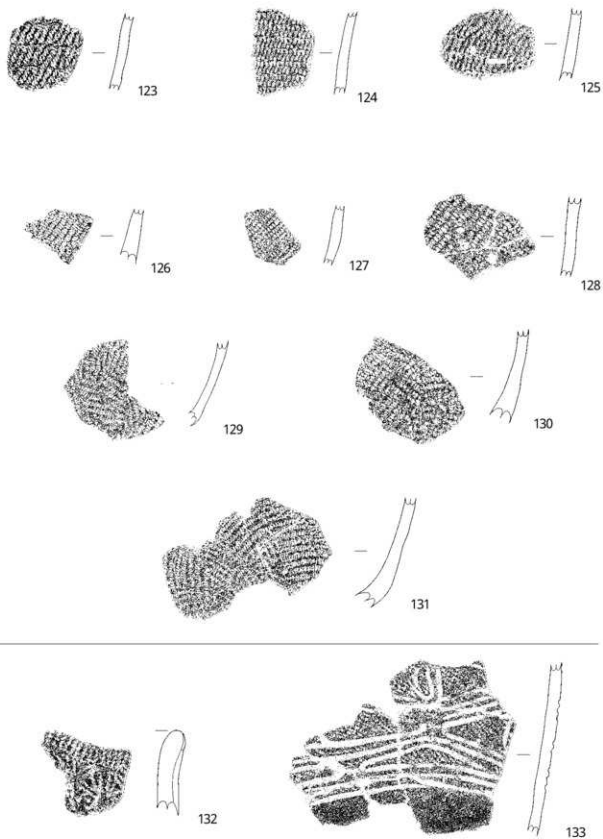


第17図 A地区遺構外出土土器

群土器胴部・底部・ 履



第18図 A地区遺構外出土土器



第19図 A地区遺構外出土土器

・石器

A地区の遺構外からは60点の石器が出土した（フレイク・チップ・使用痕が認められない礫を省く）。うち剥片石器が30点、礫石器が30点である。全て第 層と 層から出土した。以下、A地区の遺構外出土石器について分類ごとに記述する。

A. 石鏃（第2図 1・2）

2点が出土した。いずれも平基鏃である。

2. 平基鏃

いずれも第 層出土資料で、平面的にはほぼ二等辺三角形を呈するが、1は基部においてやや丸みを帯びる。2はほぼ全面に調整が施されているが、1は全面に調整が施されておらず、特に腹面は周縁にのみ調整が施されている。

B. 石槍（第2図 3・4）

2点出土した。2点ともほぼ同様の規模である。3は第 層出土資料であり、両面において押圧剥離により薄い縦長の調整を周縁に施した後、さらに距離の短い調整が再度加えられている。4は第 層出土資料であり、3と同様に両面において押圧剥離により薄い縦長の調整が施されているが、短い調整は3ほど顕著に認められない。

C. 石錐（第2図 5）

第 層から1点が出土した。一側縁に沿って錐部が作出されており、両面における調整も錐部が作出されている側縁のみにみられる。

D. 石匙（第2図 6～9）

4点が出土した。いずれも縦形であり、bが3点、fが1点出土した。

1. 縦形のもの

b. 両側縁ないし一側縁が湾曲するもの（6～8）

6・7は第 層、8は第 層出土資料である。いずれも細身の剥片を素材とし、湾曲がみられ、末端が尖っている。背面には全面的に調整が施されているが、腹面は一側縁においてのみ押圧剥離による調整が施され、ツマミ部から尖端部まで連続している。

f. 下端に向かって幅広になるもの（9）

第 層から出土している。比較的幅の広い剥片を素材としており、平面的には台形状を呈する。背面には全面的に調整が施されているが、腹面はツマミ部にノッチが施されるほかは使用に伴って発生したと考えられる微細剥離が一側縁にのみ認められる。

E. 石筥（第2図 10～第2図）

10点が出土した。1類が8点、2類が2点である。

1. 下端において片面のみ刃部調整されているもの（10～17）

11～13 15～17は第 層、10 14は第 層出土資料である。10・11 13～16は背面に全面的に

調整が施され、腹面における調整は両側縁に限定され、主要剥離面を大きく残している。13・14・16の下端には使用に伴って発生したと考えられる微細剥離を認めることができる。12については、上端が欠損しており、背面には両側縁と下端において調整が施され、腹面には全く調整が施されていない。17は10～16とは逆に腹面に全面的な調整が施され、背面は両側縁のみの調整で原礫面が残されている。

2. 下端において両面が刃部調整されているもの(18・19)

2点とも第 層出土資料である。18は背面において全面的に調整が施され、腹面は上端を除く周縁に調整が施されているが主要剥離面が大きく残されている。19は腹面において全面的な調整が施され、背面は周縁が全周的に調整され、原礫面が大きく残されている。

F. 不定形石器(第22図～第24図31)

12点が出土した。20・24～27・29・31は第 層、21～23・28・30は第 層出土資料である。刃部の形状に着目すると、20・21は直線的な刃部、22～29は曲線的な刃部、30・31は直線的な刃部と曲線的な刃部をもつものに細分することができる。20は折損しているが、本地区から出土した定形石器の調整方法と比較すると、本来、石筈であった可能性が高い。腹面の折損部分縁辺には微細剥離が確認できる。

G. 磨製石斧(第25図32)

第 層から1点が出土した。上半が欠損している。両面ともに欠損部の縁部には剥離がみられる。

I. 敲磨器類(第23図33～第29図)

24点出土した。1類が2点、2類が1点、3類が1点である。磨り、凹み、敲きが併存しているものも存在するがその場合は主体的な痕跡によって抽出した。

1. 磨り石

a. 面的に磨り痕が認められるもの(33～45)

33～36・38・40～42・44は第 層、37・39・43・45は第 層出土資料である。いずれもその礫における平坦面に磨り痕がみられる。33のように側縁部にも磨り痕が認められるものもある。34・38・40・42には凹み、33・43・44には敲きの痕跡が併存する。

b. 側縁に磨り痕が認められるもの(46～56)

48～50・52は第 層、53～56は第 層出土資料である。53～56は剥離が認められる側縁に磨り痕が認められる。46～52には剥離等の調整は認められない。

2. 凹み石(57)

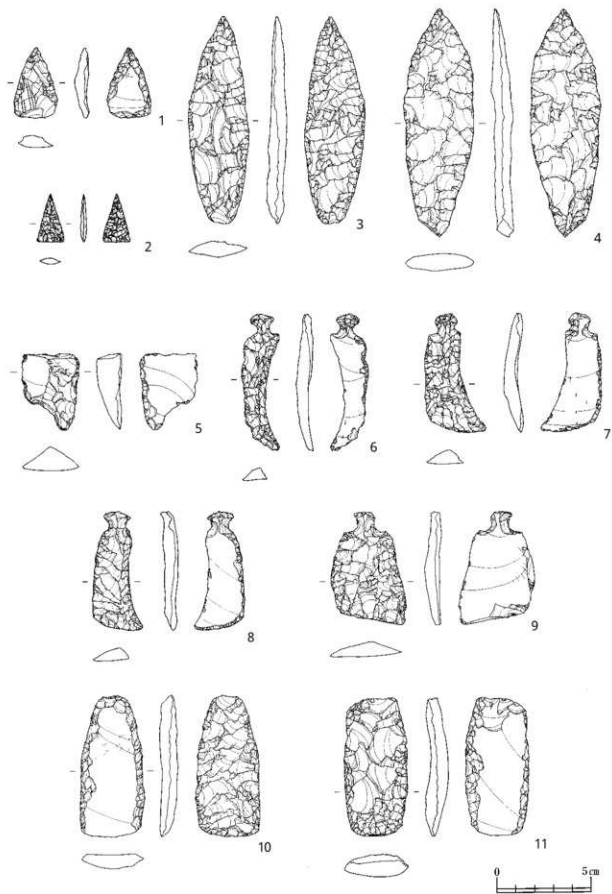
第 層出土資料である。平面楕円形の礫の両面に凹みが認められ、側面には敲き痕が認められる。

3. たたき石(58)

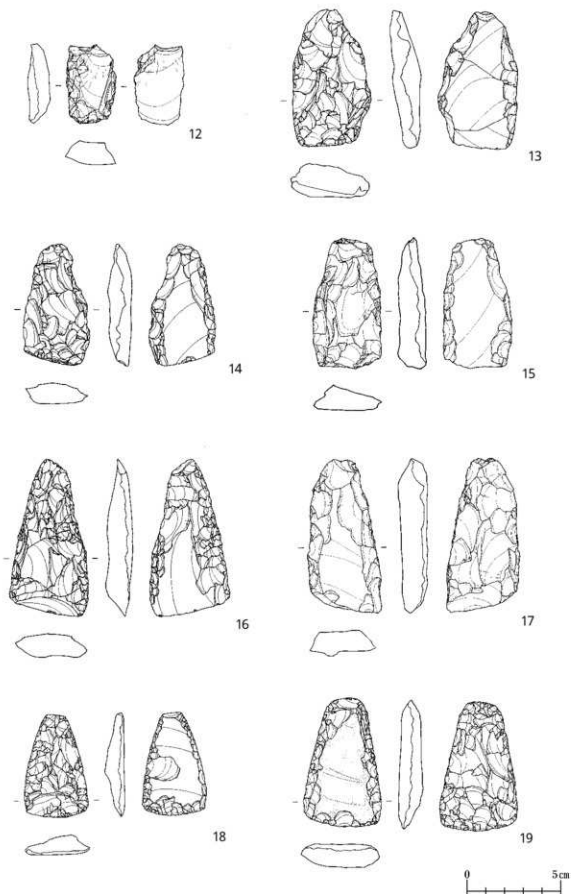
第 層出土資料である。一部欠損しており、一方の平坦面及び側縁に敲き痕が認められる。

J. 石皿・台石(第26図)

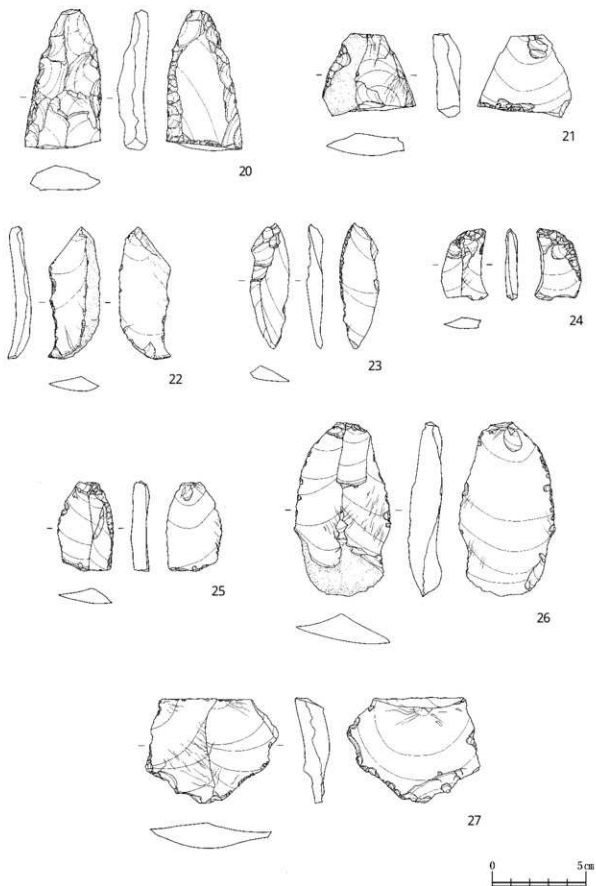
いずれも第 層出土資料である。59は台石、60は石皿の破片である。



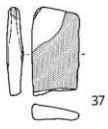
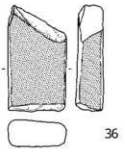
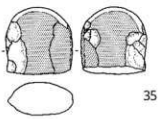
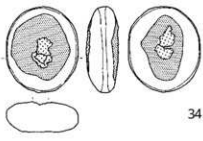
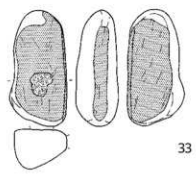
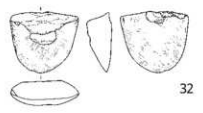
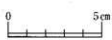
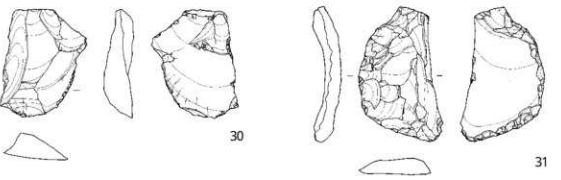
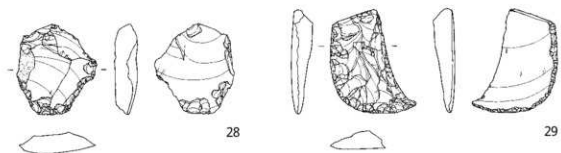
第20图 A地区遺構外出土石器



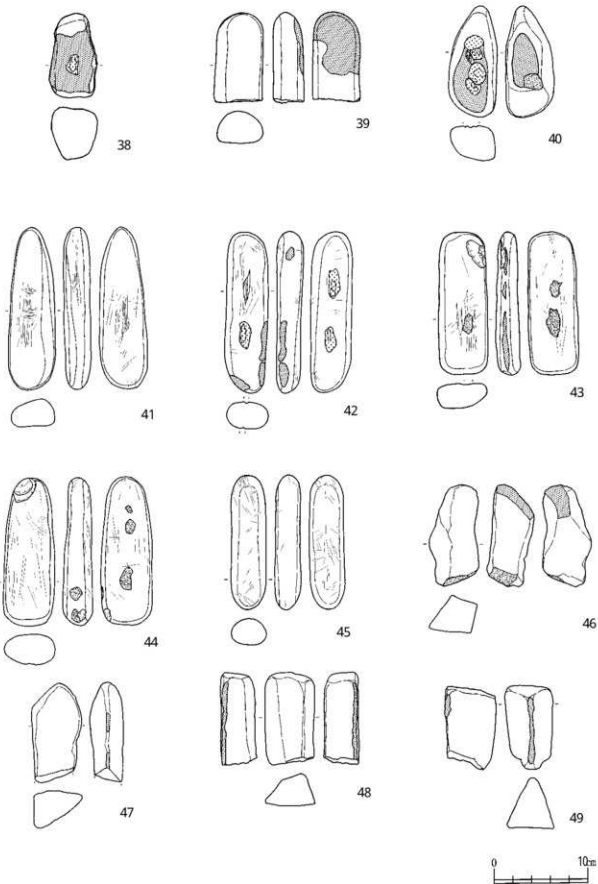
第2図 A地区遺構外出土石器



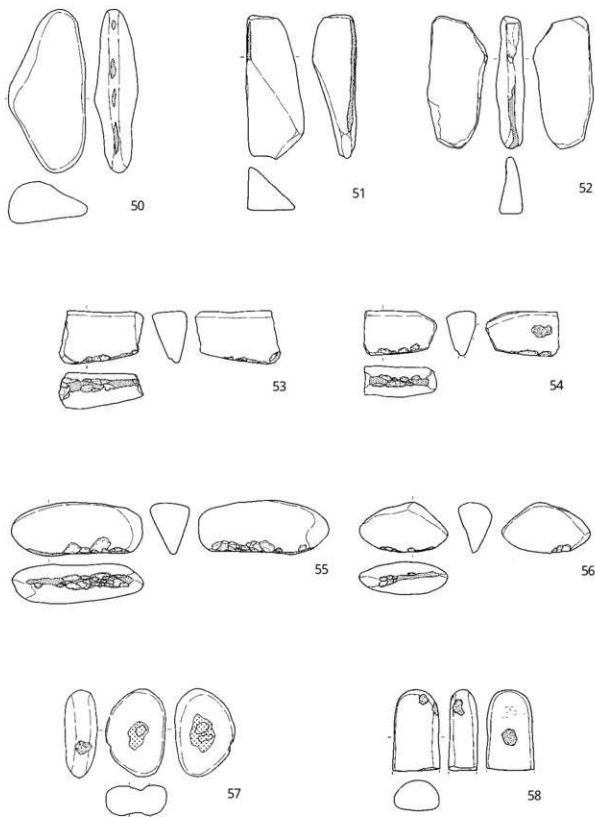
第 22 図 A 地区遺構外出土石器



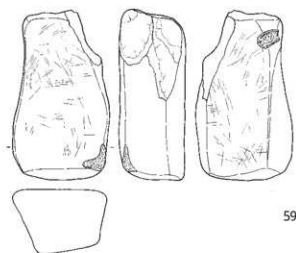
第2図 A地区遺構外出土石器



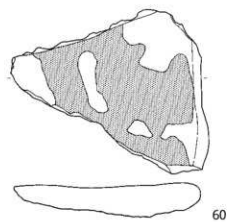
第24図 A地区遺構外出土石器



第 29 図 A 地区遺構外出土石器



59



60



第 24 図 A 地区遺構外出土石器

第2表 SI-0出土土器観察表

番号	年度	遺構名	層位	器種	部位	文 様	内面調整	焼成	分類	備 考
1	00	SI-01	1層	深鉢	口縁部	LR(0段多条)	ミガキ	堅緻	c3	内面に炭化物が付着
2	00	SI-01	1層	深鉢	口縁部	LR(0段多条)	ミガキ	堅緻	c3	内面に炭化物が付着。種別不明、3・4-6同一体
3	00	SI-01	1層	深鉢	胴部	LR(0段多条)	ミガキ	堅緻	c3	内面に炭化物が付着。2・4-6同一体
4	00	SI-01	1層	深鉢	胴部	LR(0段多条)	ミガキ	堅緻	c3	内面に炭化物が付着。2・3-6同一体
5	00	SI-01	1層	深鉢	胴部	LR(0段多条)	ミガキ	堅緻	c3	内面に炭化物が付着
6	00	SI-01	1層	深鉢	胴部	LR(0段多条)	ミガキ	堅緻	c3	内面に炭化物が付着。2・3-4同一体

第3表 SI-0出土土器観察表

番号	年度	出土地点	層位	最大計測値			重量(g)	石質	分類 記号	備 考
				長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)				
7	00	SI-01	3	49	39	12	293	珪	F	
8	00	SI-01	1	86	83	54	6240	安	M1a	
9	00	SI-01	1	106	112.5	27	4080	#	M3	
10	00	SI-01	1	267	225	57	50050	#	N	

第4表 A地区遺構外出土土器観察表

番号	年度	グリッド	層位	器種	部位	文 様	内面調整	焼成	分類	備 考
1	00	AA-28		深鉢	胴部	貝殻条痕文		堅緻		
2	00	AA-28		深鉢	胴部	貝殻条痕文		堅緻		
3	00	AA-28		深鉢	胴部	貝殻条痕文		堅緻		
4	00	AB-34		深鉢	口縁部	刺突文・コンパス文	ミガキ	堅緻	a	外面がやや剥落している。5と同一一体
5	00	AB-31		深鉢	口縁部	刺突文・コンパス文	ミガキ	堅緻	a	4と同一一体
6	00	AB-31		深鉢	口縁部	刺突文・コンパス文	ミガキ	堅緻	a	7と同一一体
7	00	AB-31		深鉢	口縁部	刺突文・コンパス文・RL(ループ文)	ミガキ	堅緻	a	6と同一一体
8	00	AB-25		深鉢	口縁部	刺突文・コンパス文	ミガキ	堅緻	a	
9	00	AA-34		深鉢	口縁部	刺突文・沈線文・コンパス文	ミガキ	堅緻	a	半世紀管状工芸による押し引きに近い。19・17同一体
10	00	AB-27		深鉢	口縁部	刺突文・沈線文・コンパス文	ミガキ	堅緻	a	9・17同一体
11	00	AD-38		深鉢	口縁部	刺突文・沈線文・コンパス文	ミガキ	堅緻	a	半世紀管状工芸による押し引きに近い。9・17同一体
12	00	AA-32		深鉢	口縁部	沈線・刺突文	ミガキ	堅緻	a	
13	00	AA-34		深鉢	口縁部	刺突文	ミガキ	堅緻	a	
14	00	AA-19		深鉢	口縁部-胴	刺突文・RL(ループ文)・コンパス文	堅緻	a		
15	00	AC-30		深鉢	口縁部	刺突文・コンパス文	ナデ	堅緻	a	三角繋ぎの刺突
16	00	AC-31		深鉢	頸部	刺突文・コンパス文	ミガキ	堅緻	a	#
17	00	AA-37		深鉢	胴部	RL(ループ文)・コンパス文	ミガキ	堅緻	a	
18	00	AA-35		深鉢	胴部	RL(ループ文)・コンパス文・刺突文	ミガキ	堅緻	a	
19	00	AA34AB34		深鉢	口縁部?	刺突文	ナデ	堅緻	a	
20	00	AC-34		深鉢	胴-底部	刺突文	ミガキ	堅緻	a	
21	00	AB29AT28 AD28AC29		深鉢	底部	刺突文	ミガキ	堅緻	a	
22	00	AB-AC34		深鉢	胴-底部	RL押圧・R押圧	ミガキ	堅緻	a	
23	00	AC-28		深鉢	頸部	コンパス文・RL(ループ文)	堅緻	a		
24	00	AD-31		深鉢	頸部	刺突文・RL(ループ文)	ミガキ	堅緻	a	
25	00	AB-29		深鉢	口縁部	押し引き沈線文・LR(縞線回転文)		堅緻	b	波状口縁
26	00	AA-27		深鉢	口縁部	押し引き沈線文・LR(縞線回転文)		堅緻	b	波状口縁
27	00	AB29AT28 AD28AC29		深鉢	口縁部	押し引き沈線文・LR(縞線回転文)		堅緻	b	波状口縁
28	00	AB-25		深鉢	口縁部	押し引き沈線文・LR(縞線回転文)		堅緻	b	
29	01	AC-16		深鉢	底部	LR押し引き沈線文		堅緻	b	尖底
30	01	AC-16		深鉢	底部	LR(羽状)・押し引き沈線文	ミガキ	堅緻	b	尖底
31	00	AA-28		深鉢	底部	LR(ループ文)押し引き沈線文	ナデ	堅緻	b	尖底
32	00	AA-25		深鉢	口縁部	押し引き沈線文・LR		堅緻	b	波状口縁
33	00	AC-26		深鉢	口縁部	押し引き沈線文・LR		堅緻	b	
34	01	AB-20		深鉢	口縁部	押し引き沈線文		堅緻	b	
35	01	AA-20		深鉢	口縁部	押し引き沈線文・LR	ミガキ	堅緻	b	
36	00	AC-28		深鉢	口縁部	押し引き沈線文		堅緻	b	3と同一一体
37	00	AB-28		深鉢	口縁部	押し引き沈線文		堅緻	b	3と同一一体
38	01	AA-20		深鉢	口縁部	押し引き沈線文	ミガキ	堅緻	b	
39	00	AC-28		深鉢	口縁部	押し引き沈線文		堅緻	b	

番号	年度	グリッド	層位	器種	部位	文 様	内面調整	焼成	分類	備 考
40	00	AC - 27		深鉢	口縁部	押し引き沈線文		堅緻	b	41・42・43同一器体、穿孔が2箇所みられる
41	00	AC - 27		深鉢	口縁部	押し引き沈線文		堅緻	b	40・42・43と同一器体
42	00	AC - 28		深鉢	口縁部	押し引き沈線文		堅緻	b	40・41・43と同一器体
43	00	AC - 29		深鉢	口縁部	押し引き沈線文		堅緻	b	40・41・42と同一器体
44	01	AB - 20		深鉢	口縁部	押し引き沈線文	ミガキ	堅緻	b	
45	00	AC - 27		深鉢	胴 部	押し引き沈線文		堅緻	b	
46	01	AB - 16		深鉢	口縁部	押し引き沈線文	ナデ	堅緻	b	
47	01	AA - 20		深鉢	胴 部	押し引き沈線文・LR(ループ文)	ナデ	堅緻	b	
48	01	AD - 18		深鉢	口縁部	押し引き沈線文・RL	ナデ	堅緻	b	
49	00	AI - 28		深鉢	胴部・底部	LR(ループ文) 押し引き沈線文	ナデ	堅緻	b	
50	00	AC - 27		深鉢	底 部	押し引き沈線文		堅緻	b	尖底
51	00	AB - 31		深鉢	口縁部	RL(ループ文)		堅緻	c1	穿孔有り、太い器体
52	00	AC - 27		深鉢	口縁部・胴部	RL(ループ文)		堅緻	c1	波状口縁
53	00	AC - 28		深鉢	口縁部・胴部	RL(ループ文)		堅緻	c1	
54	01	AD - 18		深鉢	口縁部・胴部	LR(ループ文)・LR(羽状構成)	ナデ	堅緻	c1	波状口縁、胴部下半に穿孔が数箇所ある
55	01	AB AC 16 18		深鉢	口縁部	LR(ループ文)	ミガキ	堅緻	c1	口唇が平坦に調整されている
56	01	AC - 16		深鉢	口縁部	LR(羽状構成)	ミガキ	堅緻	c1	口唇が平坦に調整されている
57	00	AB - 29		深鉢	口縁部	LR(ループ文)	ミガキ	堅緻	c1	S&C同一器体
58	00	AB - 29		深鉢	口縁部	LR(ループ文)	ミガキ	堅緻	c1	口唇部が平坦、やや割落する、S&C同一器体
59	00	AB - 29		深鉢	口縁部	LR(縞端回転文)	ミガキ	堅緻	c2	波状口縁
60	00	AA - 26		深鉢	口縁部	LR(縞端回転文)	ミガキ	堅緻	c2	
61	00	AA - 26		深鉢	口縁部	LR(縞端回転文)	ミガキ	堅緻	c2	口唇がやや丸みをあびる
62	00	AB - 29		深鉢	口縁部	LR(縞端回転文)	ミガキ	堅緻	c2	波状口縁。
63	01	AB - 15		深鉢	口縁部	LR(縞端回転文)	ミガキ	堅緻	c2	口唇が平坦に調整されている
64	00	AC - 28		深鉢	口縁部	LR(縞端回転文)	ミガキ	堅緻	c2	口唇が平坦に調整されている
65	00	AA - 26		深鉢	口縁部	LR(羽状構成)	ミガキ	堅緻	c3	
66	00	AC - 27		深鉢	口縁部	LR(段多条)	ミガキ	堅緻	c3	口唇部割落
67	00	AC - 27		深鉢	口縁部	LR(段多条)	ミガキ	堅緻	c3	口唇部割落
68	00	AA - 34		深鉢	胴 部	RL(ループ文)	ミガキ	堅緻	d1	6&C同一器体
69	00	AA - 34		深鉢	胴 部	RL(ループ文)		堅緻	d1	器体の幅が太い(4mm)・6&C同一器体
70	00	AB - 28		深鉢	胴 部	RL(ループ文)	ミガキ	堅緻	d1	器体の幅が太い(7mm)
71	00	AA - 35		深鉢	胴 部	RL(ループ文)		堅緻	d1	器体の幅が太い(7mm)
72	00	AB - 31		深鉢	胴 部	RL(ループ文)	ミガキ	堅緻	d1	73・74と同一器体
73	00	AB - 31		深鉢	胴 部	RL(ループ文)	ミガキ	堅緻	d1	72・74と同一器体
74	00	AB - 31		深鉢	胴 部	RL(ループ文)	ミガキ	堅緻	d1	72・73と同一器体
75	00	AA - 34		深鉢	胴 部	RL(ループ文)	ミガキ	堅緻	d1	器体の幅が太い(7mm)
76	01	AA - 18		深鉢	胴 部	LR(ループ文)		堅緻	d1	
77	00	AB - 34		深鉢	胴 部	RL(ループ文)		堅緻	d1	
78	00	AB - 25		深鉢	胴 部	LR(ループ文)		堅緻	d1	
79	00	AA - 35		深鉢	胴 部	RL(ループ文)		堅緻	d1	器体の幅が太い(6mm)
80	00	AB AC 24 25		深鉢	胴 部	LR(縞端回転文)		堅緻	d1	器体の幅が太い(6mm)
81	00	AA - 35		深鉢	胴 部	RL(縞端回転文)	ミガキ	堅緻	d1	器体の幅が太い(6mm)
82	00	AC - 30		深鉢	胴 部	RL(縞端回転文)		堅緻	d1	
83	00	AA - 34		深鉢	胴 部	LR(縞端回転文)	ミガキ	堅緻	d2	器体の幅がかなり太い(8mm)
84	00	AA - 28		深鉢	胴 部	LR(縞端回転文)	ミガキ	堅緻	d2	85&C同一器体
85	00	AD - 28		深鉢	胴 部	LR(縞端回転文)	ミガキ	堅緻	d2	84&C同一器体
86	01	AB - 19		深鉢	胴 部	LR(縞端回転文)	ミガキ	堅緻	d2	
87	00	AB - 29		深鉢	胴 部	LR(縞端回転文)	ミガキ	堅緻	d2	88&C同一器体
88	00	AA - 27		深鉢	胴 部	LR(縞端回転文)	ミガキ	堅緻	d2	87&C同一器体
89	00	AC - 26		深鉢	胴 部	LR(縞端回転文)	ミガキ	堅緻	d2	
90	00	AA - 27		深鉢	胴 部	LR(縞端回転文)	ミガキ	堅緻	d2	
91	00	AA - 37		深鉢	胴 部	LR(縞端回転文)	ミガキ	堅緻	d2	内面に炭化物が付着
92	00	AA - 26		深鉢	底 部	LR(縞端回転文)	ミガキ	堅緻	d2	尖底
93	00	AA - 28		深鉢	胴 部	LR(段多条)	ミガキ	堅緻	d3	
94	00	AA - 37		深鉢	胴 部	RL(段多条)	ミガキ	堅緻	d3	
95	00	AA - 26		深鉢	胴 部	RL(段多条)で羽状構成	ミガキ	堅緻	d3	
96	00	AB - 27		深鉢	胴 部	LR(段多条)で一部羽状を構成	ミガキ	堅緻	d3	
97	00	AA - 37		深鉢	胴 部	LR RL(段多条・羽状構成)	ミガキ	堅緻	d3	

番号	年度	グリッド	層位	器種	部位	文 様	内面調整	焼成	分類	備 考
98	01	AC - 18		深鉢	胴部-底部	RL(羽状構成)		堅緻	c3	尖底
99	00	AB 29- 30		深鉢	胴 部	RL	ナデ	堅緻	c3	
100	00	AA - 27		深鉢	胴部-底部	RL		堅緻	c3	尖底
101	01	AA - 20		深鉢	胴 部	LR	ナデ	堅緻	c3	
102	01	AC - 20		深鉢	胴 部	RL	ナデ	堅緻	c3	
103	01	AA - 28		深鉢	胴 部	LR(結束第 1 條羽状)	ナデ	堅緻	c3	
104	00	AD - 31		深鉢	胴 部	RL(ループ文)	ミガキ	堅緻	d1	
105	00	AC - 33		深鉢	胴 部	RL(ループ文)		堅緻	d1	
106	00	AC - 37		深鉢	胴 部	RL(ループ文)		堅緻	d1	
107	01	AB - 21		深鉢	胴 部	LR(ループ文)	ミガキ	堅緻	d1	
108	00	AC - 27		深鉢	胴 部	LR(ループ文)		堅緻	d1	109と同一個体
109	00	AC - 28		深鉢	胴 部	LR(ループ文)		堅緻	d1	108と同一個体
110	00	AC - 29		深鉢	胴 部	RL(ループ文)	ミガキ	堅緻	d1	
111	00	AD - 31		深鉢	胴 部	RL(ループ文)		堅緻	d1	
112	01	AB - 20		深鉢	胴 部	LR(ループ文)	ミガキ	堅緻	d1	
113	01	AB - 20		深鉢	胴 部	RL(ループ文)	ナデ	堅緻	d1	
114	01	AC - 18		深鉢	胴 部	RL(ループ文)	ナデ	堅緻	d1	
115	01	AC - 18		深鉢	胴 部	RL(ループ文)	ナデ	堅緻	d1	
116	00	AB - 29		深鉢	胴 部	LR(縞端回転文)	ミガキ	堅緻	c2	胴部が欠けたため文様が削れている。胴部、口縁は一部
117	00	AC - 27		深鉢	胴 部	LR(縞端回転文)	ミガキ	堅緻	c2	胴部が欠けたため文様が削れている。胴部、口縁は一部
118	00	AD - 29		深鉢	胴 部	LR(縞端回転文)	ミガキ	堅緻	c2	
119	00	AC - 27		深鉢	胴 部	LR(縞端回転文)	ミガキ	堅緻	c2	文様等の上下幅が kn、120-12と同一個体
120	00	AC - 27		深鉢	底 部	LR(縞端回転文)	ミガキ	堅緻	c3	文様等の上下幅が kn、119-121-122と同一個体
121	00	AC - 27		深鉢	胴 部	LR(縞端回転文)	ミガキ	堅緻	c2	文様等の上下幅が kn、119-120-122と同一個体
122	00	AC - 27		深鉢	胴 部	LR(縞端回転文)	ミガキ	堅緻	c2	文様等の上下幅が kn、119-12と同一個体
123	01	AC - 28		深鉢	胴 部	LR(縞端回転文)	ミガキ	堅緻	c2	
124	01	AA - 20		深鉢	胴 部	LR(縞端回転文)	ナデ	堅緻	c2	
125	01	AA - 22		深鉢	胴 部	LR(縞端回転文)	ナデ	堅緻	c2	
126	00	AC - 29		深鉢	胴 部	LR(段多条)	ミガキ	堅緻	c3	
127	00	AC - 29		深鉢	胴 部	LR(段多条)	ミガキ	堅緻	c3	
128	01	AA - 21		深鉢	胴 部	LR(羽状構成)	ナデ	堅緻	c3	
129	01	AA - 22		深鉢	胴 部	LR(羽状構成)	ナデ	堅緻	c3	尖底
130	01	AC - 17		深鉢	胴部-底部	RL(羽状構成)		堅緻	c3	尖底
131	01	AB - 16		深鉢	胴部-底部	LR(羽状構成)	ミガキ	堅緻	c3	尖底
132	00	AA - 54		深鉢	口縁部	隆帯・L 圧痕	ナデ	堅緻		
133	00	AA - 36		深鉢	胴 部	連続三角文・連続渦巻文・LR	ナデ	堅緻		

第 5 表 A 地区遺構外出土石器観察表

番号	年度	出土地点	層位	最大計測値			重量 g)	石質	分類記号	備 考
				長さ mm)	幅 mm)	厚さ mm)				
1	00	AC - 29		37	23	7	4.8	珪	A 2	
2	00	AC - 27		25	14	3	2.9	珪	A 2	
3	00	AA - 26		110	32	11	32.2	珪	B	
4	01	AB - 20		121	37	12	42.0	珪	B	
5	00	AB - 30		40	31	13	14.3	珪	C	
6	00	AC - 29		73	20	9	8.0	珪	D 1b	
7	00	AC - 27		63	32	8	11.5	珪	D 1b	
8	01	AB - 20		63	26	9	10.7	珪	D 1b	
9	00	AB - 30		60	40	8	16.1	珪	D 1f	
10	00	AC - 27		75	36	9	30.1	珪	E 1	
11	00	AA - 35		74	35	14	29.4	珪	E 1	
12	01	AB - 18		42	26	11	11.1	珪	E 1	
13	00	AA - 28		74	42	18	27.7	珪	E 1	
14	00	AC - 27		64	36	13	17.9	珪	E 1	
15	01	AB - 20		69	36	14	22.6	珪	E 1	
16	00	AA - 55		84	42	15	46.7	珪	E 1	
17	01	AB - 18		81	38	16	28.6	珪	E 1	

番号	年度	出土地点	層位	最大計測値			重量 (g)	石質	分類 記号	備 考
				長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)				
18	00	AA - 37		35	34	10	15 3	#	E 2	
19	00	AB - 28		69	42	12	42.9	珪	E 2	
20	01	AB - 18		74	41	14	42.6	#	F	
21	00	AC - 31		50	44	15	29.3	#	F	
22	01	AC - 18		70	27	8	15.0	#	F	
23	00	AC - 31		66	21	9	7.4	#	F	
24	00	AB - 28		38	25	7	6.3	#	F	
25	00	AA - 32		53	30	10	12.4	#	F	
26	00	AB - 28		93	52	18	63.3	#	F	
27	00	AB - 25		71	56	18	48.2	#	F	
28	00	AC - 34		48	43	13	23.8	#	F	
29	00	AA - 34		55	46	12	19.9	#	F	
30	01	AC - 17		57	46	15	29.6	#	F	
31	01	AB - 20		71	45	14	33.0	#	F	
32	00	AB - 28		62	72	29	163.4	輝	G	
33	01	AA - 20		125	60	45	468.7	安	I 1a	
34	00	AC - 30		90	76	34	326.0	#	I 1a	
35	00	AA - 29		70	69	34	280.0	委	I 1a	
36	00	AA - 26		111	63	30	326.0	石	I 1a	
37	00	AD - 28		93	51	17	114.0	安	I 1a	
38	01	AA - 19		88	48	45	342.3	#	I 1a	
39	01	AC - 18		92	50	34	256.8	石	I 1a	
40	00	AA - 26		118	51	37	300.0	安	I 1a	
41	01	AB - 20		171	49	29	362.9	石	I 1a	
42	01	AC - 18		169	44	27	339.0	#	I 1a	
43	01	AA - 22		151	52	26	295.3	#	I 1a	
44	01	AB - 20		155	54	31	380.5	#	I 1a	
45	00	AC - 31		142	37	28	226.0	#	I 1a	
46	00	AC - 28		108	52	49	246.0	流	I 1b	
47	00	AC - 29		94	35	52	176.0	安	I 1b	
48	01	AA - 20		99	53	36	252.3	#	I 1b	
49	00	AB - 31		98	53	37	286.0	#	I 1b	
50	00	AC - 31		89	51	54	288.0	石	I 1b	
51	01	AC - 18		171	81	43	634.0	安	I 1b	
52	00	AA - 32		152	60	46	414.0	#	I 1b	
53	00	AD - 28		139	30	60	324.0	#	I 1b	
54	00	AC - 27		90	37	56	242.0	石	I 1b	
55	01	AD - 18		86	47	47	161.2	安	I 1b/1a	
56	00	AC - 29		138	42	54	392.0	#	I 1b	
57	01	AA - 18		93	64	33	242.7	燧	I 2	
58	01	AB - 18		85	48	32	208.9	石	I 3	
59	00	AC - 27		180	102	70	1902.0	安	J	
60	00	AA - 37		210	173	34	1202.0	#	J	

第2節 B地区の調査

B地区はグリッドライン70～92の遺跡範囲内における丘陵縁辺部にあたり、標高は11～14mである。丘陵地における急斜面から緩斜面に移行する部分に相当し、A地区に比べるとやや斜度のある地形である。本地区は全域にわたって削平を受けており、本地区南側においては多量の廃材等が出土し、北側においては表土を除去すると直ちに第1層が現れるという状況であったことから、遺構・遺物は残存していないと思われたが、南側の廃材等を混入する表土を除去したところ、多量の土器・石器が出土する範囲(第1号遺物集中ブロック)を検出した。これ以外には遺構・遺物を検出しなかった。

1. 検出遺構と出土遺物

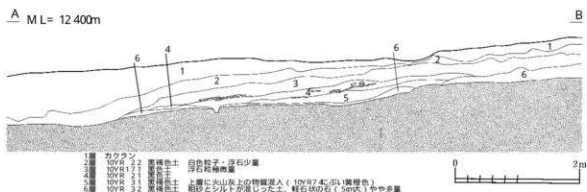
1) 第1号遺物集中ブロック

S-U-88～9グリッドに位置する。地形的には南～北へ下るごく緩やかな斜面地に相当する。

当初、本地域周辺の刈り払いを行った時点で地面からビニール片やプラスチック廃材等が確認でき、かなり削平を受けていることが推定されたが、その攪乱土を除去したところ、土層が残存しており、土器や石器を多量に混入する土層が確認できた。これらの多量の遺物は平面的には範囲をもって広がっており、遺跡内における他の地点と比べて遺物の出土量が突出していたことから、「捨て場」と考えられ、第1号遺物集中ブロック(以下、ブロック)とした。

本ブロックは、東～北側を用水路、西側を工事用道路、南側を農地専用の取り付け道路に囲まれており、これらの築造によって削平を受け範囲が減じられていると考えられ、本来の状態を示すものではないと考えられる。本ブロックに設定したセクションベルトにおける土層観察の結果、6層に分層できたが、周囲がかなり削平を受けていることから周辺の土層との連続性が不明確であり、各土層における混入物も周辺と比べて特異であることから、基本層序との対応関係を明らかにすることができなかった。遺物は第3層及び第4層から出土しており、その出土量はダンボール箱換算で4箱分である。土器は全て縄文時代前期中葉に帰属する土器(第群土器)であり、横転してそのまま土圧により押し潰されたような出土状態を呈するもののほか多くが破片で出土した。復元できた土器は70個体以上にのぼる。石器は定形石器・不定形石器・礫石器等300点以上が出土した。

なお、本ブロックより西側の法面においては、同じく縄文時代前期中葉の遺物を包含する河川跡の断面が検出されている。



第2図 第1号遺物集中ブロックセクション

・出土土器

本ブロックにおいては、第 3・4層からダンボール箱換算で 4箱に及び土器が出土した。うち 7割は第 4層からの出土である。出土土器は全て縄文時代前期中葉の円筒下層 a・b式土器の範疇で捉えられるものである。円筒下層 a式土器、b式土器については、山内清男により型式設定され、以降、発掘調査資料の増加に伴い両型式に関していくつかの分類案が提示されているが、未だ統一的な見解は得られていない。したがって、ここでは本ブロック出土土器を第 群土器として一括して主に口縁部文様から a～h類に細分し、両型式における諸属性の前後関係を明らかにするため、第 1節 5)の第 群土器と同様に各類型をそれぞれ層位ごとに分け下層のものから図版を提示した。以下、本ブロック出土第 群土器について、分類ごとに記述する。

第 群 縄文時代前期中葉の土器 (第 28図～第 46図)

a. 縄文が回転施文されるもの (第 28図 1～第 30図 25)

4層出土資料は 1～17 3層出土資料は 18～25である。口縁部破片から推定すると 4層からは復元資料、破片資料を含めて約 30個体分、3層からは復元個体が 1個体、破片資料が 1個体分出土している。口縁部形状は平縁を呈するものと波状を呈するものがあり、前者が多い。口唇部は丸みを帯びるもの (1～3, 8～14 17 18～25) が多く、4, 5, 6, 7のように先細りの形状を呈するものが少数ある。胴部から口縁部までの形状はほぼ垂直ないしやや傾斜をもって直線的に立ち上がるものが多いが、1, 8, 23のように口縁が外反するもの、5のようにやや傾斜をもって直線的に立ち上がり口縁部付近から垂直に立ち上がるものもある。いずれの胎土においても繊維が混入する。文様は複節縄文を同一方向に回転して施文しているものがほとんどであるが、1～3, 14 18のように単節の回転施文によるものも少数認められる。29は口唇部においても複節縄文が施されている。隆帯をもたないものがほとんどであり、隆帯をもつものは少ない。隆帯をもつものは地文を施した後貼り付けられており、19は無文であるが、16 17は R L R の側面圧痕、29は地文と同様に複節縄文が施された後、指頭圧痕が施されている。また 29は口縁上部と隆帯の上部と下部に R L R の側面圧痕が施されている。

3・4層における隆帯をもたないものともつものとの量比の差は顕著ではない。

b. 縄の側面圧痕が施されるもの (第 30図 26～第 32図 45)

4層出土資料は 26～37 3層出土資料は 38～45である。口縁部破片から推定すると 4層からは復元資料 5個体、破片資料は約 30個体分、3層からは破片資料で 8個体分が出土している。口縁部形状はほとんどが平縁を呈し、波状を呈するものは少数である。口唇部は丸みを帯びるものが多く、平坦に整形されているもの (27 32・33 37 44 45) は少数である。胴部から口縁部までの形状は 32 37 39でやや外反が認められる以外はほとんどが直線的に立ち上がる。文様は地文を施した後、口縁部に縄文原体の側面圧痕を 1～3条施している。側面圧痕に用いられる原体はほとんどが 3段の縄であり、地文も複節縄文が施されるものが多いが、39は地文に R 単軸絡糸条 第 類が回転施文され、口縁部に R L R の側面圧痕が 1条施されている。

c. 結節回転文が施される土器 (第 32図 46～第 42図 105)

本群の土器の中で最も出土量が多く、6割を占める。4層出土資料は 46～85 3層出土資料は 86～100 101～109は出土層位不明のものである。口縁部破片から推定すると、4層からは 100個体以上、3層からは 50個体以上が出土している。いずれの胎土においても繊維の混入が認められる。

隆帯の有無等から 1. 隆帯をもたないもの、2. 隆帯をもつもの、3. 竹管状工具による擬似結節回転文が施されるものに細分した。4層、3層ともに隆帯をもたないものと隆帯をもつものの量比は 6:4程度である。

1. 隆帯をもたないもの(46-72 86-95)

口縁部形状は波状を呈するものが多く、平縁のものは少ない。復元資料をみると、波状を呈するものに比べ、平縁を呈するものの方が大型になる傾向が強い。口唇部形状は丸みを帯びるものが多いが、平縁を呈するものの中には口唇を平坦に調整したものが少数みられる(64 68 89)。胴部-口縁部までの形状はほとんどがほぼ垂直ないしはやや角度をもって直線的に立ち上がるが、51 55 63 67 72 95のように口縁部が外反するものもみられる。とくに63は胴部上半がやや張り出し、頸部がくびれ、口縁部が外反する小型の土器である。文様については、口縁部に施される結節回転文は、54のようにLRで施される1点を除いて、1段の縄によって施されているものが多く、そのほとんどがRである。地文は、複節縄文がほとんどであるが、無節(89)、単節(68)、直前段反照(70-72 94 95)、単軸結条体第 8類(69 93)も少数みられる。結節回転文と地文以外の文様が施されるものは少なく、46のようにRの側面圧痕が施されるものと、93のようにRLRの側面圧痕が2条施されるものがあり、いずれも口縁部に施された結節回転文と地文を区画している。67の口唇部には竹管状工具による刺突が施されている。

2. 隆帯をもつもの(73-85 96-100)

隆帯をもたないものと同様に、口縁部は波状を呈し口唇部は丸みを帯びるものが多いが、概して隆帯をもたないものに比べて大型の器形が多いようである。胴部-口縁部にいたる形状については、隆帯をもたないものと比べると、口縁が外反するものが多く、とくに79は胴部が張り出し、頸部にはくびれが認められる。文様については、結節回転文は、全て1段の縄によって施されており、地文もほとんどが複節縄文である。隆帯に施される文様は縄の側面圧痕が施されるもの(73-77 79-82 96-99)、指頭圧痕が施されるもの(85)、竹管状工具による圧痕が施されるもの(83-84 100)に大きく分けられる。側面圧痕は、隆帯の中央に軸を同じくして横位に1条押圧されるもの(73-77)、隆帯に対して斜位に押圧されるもの(80-82 98-99)、横位・斜位を併用するもの(79 96)、縄端が押圧されるもの(97)に細分できる。ほとんどの資料においては、隆帯によって区画された口縁部文様帯に地文が認められるものが多く、地文が施された後に隆帯が貼り付けられている。ただし、84は例外で、隆帯の上下に施されている複節縄文は隆帯上にも及んでおり、隆帯貼り付け後に複節縄文が施されたと考えられる。77 96のように隆帯と器面の接合部にあたる上下に1条づつ側面圧痕が施されている資料の存在も併せ、これは単に装飾を施すだけでなく、隆帯と器面の接合部を強固にするためのねらいがあったものと推定される。

3. 竹管状工具による擬似結節回転文が施されるもの(101-105)

半裁竹管状の工具により弧状の圧痕が連続的に施された文様をもつものである。縄で施された文様でないため、本類とすることにやや抵抗はあるが、弧が連続する点で結節回転文と類似していることから同様の文様効果をもつものと考えられ、結節回転文の一類型とした。遺物取り上げ時のミスにより、出土層位は不明である。いずれも同一個体である。101の形状からみて、口縁部形状は本来波状を呈すると考えられる。口唇部は丸みを帯びる。胴部にはRLRが回転施文されている。101 105において穿孔がみられる。本資料と類似した資料が三内丸山遺跡第6鉄塔地区から出土している。(青

森県教育委員会 1998)

d. 単軸絡糸体第 1類が回転施文されるもの(第 42図 106~112)

4層出土資料は 106~108 3層出土資料は 109~112である。111と 112は同一個体である。復元資料及び口縁部破片から推定して、4層・3層ともに破片資料で3個体程度である。全体形状を窺い知れる資料が限られているため、細部については不明である。106は波状口縁を呈し、やや外反して立ち上がる。口縁部文様は単軸絡糸体第 1類(R)の回転施文、胴部文様はR L Rの回転施文による。108は全面に単軸絡糸体第 1類(R)が回転施文される。109はつまみ出し隆帯をもち、口縁部には単軸絡糸体第 1類(R)回転施文に加え、L Rの側面圧痕が縦位・横位に施される。胴部文様は単軸絡糸体第 1類(R)が回転施文され、隆帯上にはRの側面圧痕が施されている。111・112は単軸絡糸体第 1類(R)を地文とし、隆帯には竹管状工具による刺突が施されている。

e. 単軸絡糸体第 5類が回転施文されるもの(第 43図~第 44図 125 127~133)

4層出土資料は 113~126 3層出土資料は 127~136である。復元資料及び口縁部破片資料から推定して、4層からは少量の復元個体と破片資料をあわせて2個体分、3層からは破片資料で7個体分が出土した。口縁部形状は波状を呈するものと、平縁のものがあるが、波状を呈するものが多い。平縁のものは口縁が直線的に立ち上がり、波状を呈するものは口縁が外反するものが多い。隆帯をもつもの(124・125 131~133)もみられるが、隆帯上の文様は、側面圧痕(124 125 131 133)によるものと竹管状工具による刺突(132)によるものみられる。胴部文様は複節縄文が多く、直前段反摺(131)、単軸絡糸体第 1類(133)によるものも少数存在する。

f. 単軸絡糸体第 6類が回転施文されるもの(第 44図 126 134~136)

4層出土資料は 130 3層出土資料は 134~136である。134・135は同一個体である。出土量は極めて少量である。微細な破片であるため、形状については不明な点が多いが、口縁部は外反するものが多いようである。いずれの資料も文様については、単軸絡糸体第 6類の回転による文様と縄の側面圧痕が併存する。

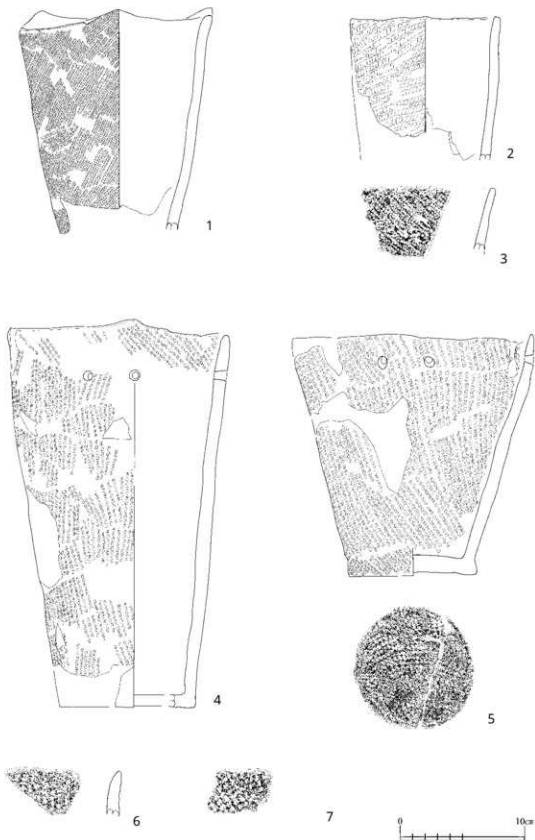
g. 単軸絡糸体第 6A類が回転施文されるもの(第 44図 137~第 46図 165)

4層出土資料は 137~147 3層出土資料は 148~165である。161・162は同一個体である。復元資料及び口縁部破片資料から推定して、4層からは1個体分、3層からは20個体分が出土している。口縁部形状は波状を呈するものがほとんどである。口唇部形状は先細りで丸みを帯びるものが多く、152・164のように平坦に調整されているものも少数みられる。隆帯をもつものともたないものがあるが、頸部を残存する資料が少ないためその量比は不明である。口縁部の文様は単軸絡糸体第 6A類の回転による文様と縄の側面圧痕が併存するものが多く、148~150 160・161 163 165のように地文を認めることができるものもある。胴部文様は複節縄文、直前段反摺、単軸絡糸体第 1類がみられる。胴部まで残存する破片が少ないため不明な点が多いものの、他の類型に比べ単軸絡糸体第 1類の占める割合が多いようである。隆帯上の文様は縄の側面圧痕によるものと竹管状工具による刺突によるものがある。

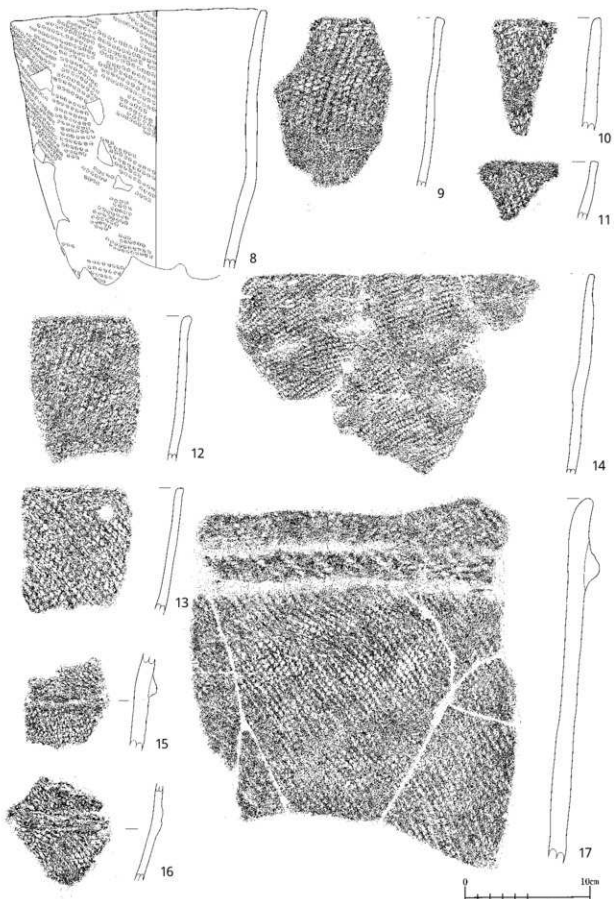
h. 多軸絡糸体が回転施文されるもの(第 46図 166)

3層から1点が出土した。隆帯をもつ口縁部破片である。隆帯はつまみ出しにより作出されており、無文であるが隆帯下部にR L Rの側面圧痕が施されている。口縁部には多軸絡糸体(R)が回転施文されている。胴部の文様は不明である。

群 a 類 - 4 層

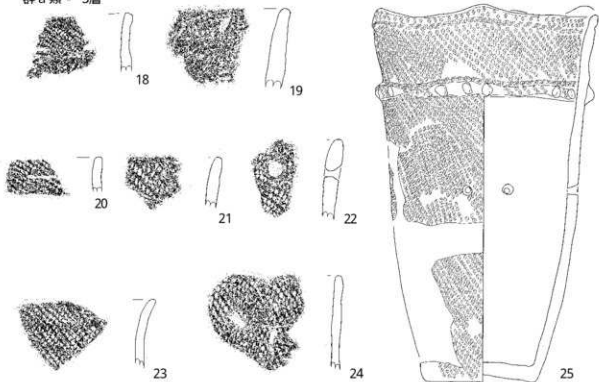


第 2 図 第 1 号遺物集中ブロック出土土器



第29図 第1号遺物集中ブロック出土土器

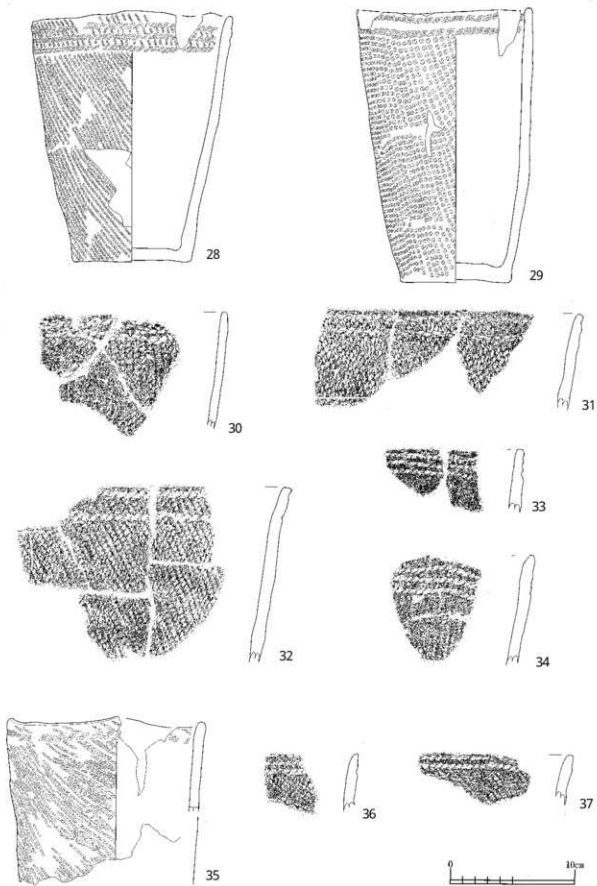
群a類 - 3層



群b類 - 4層

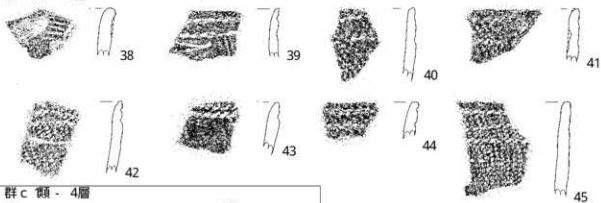


第30図 第1号遺物集中ブロック出土土器

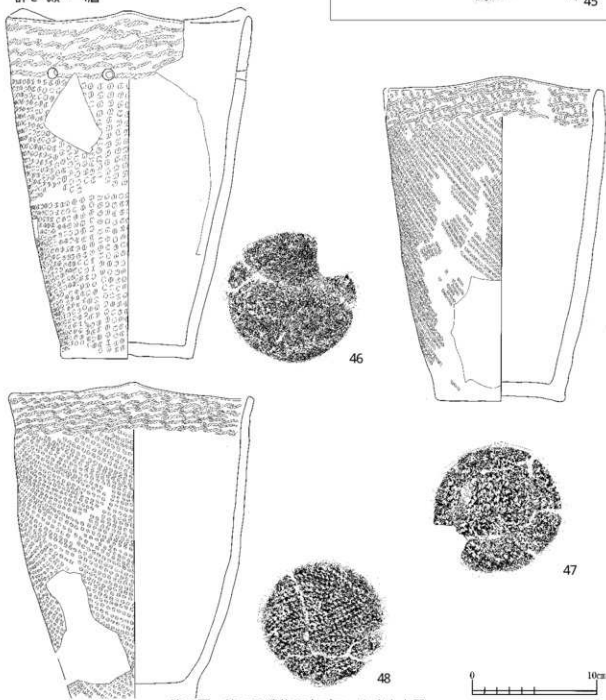


第 3 図 第 1 号遺物集中ブロック出土土器

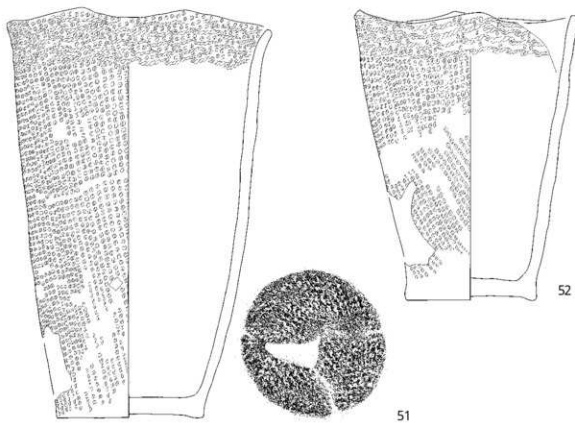
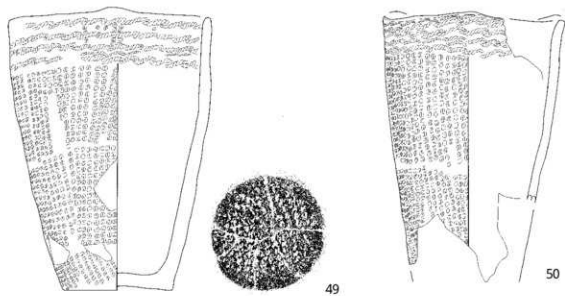
群b類 - 3層



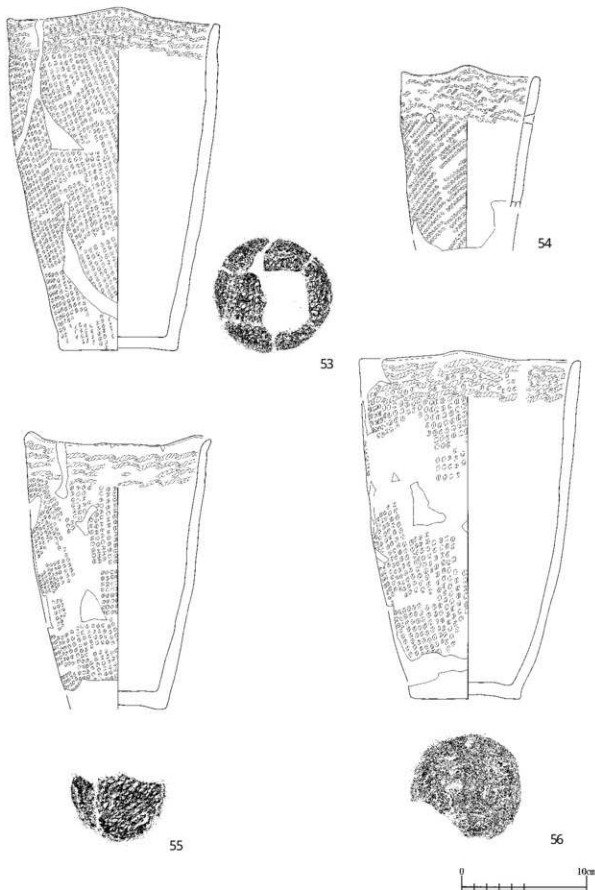
群c類 - 4層



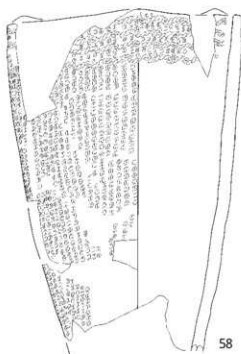
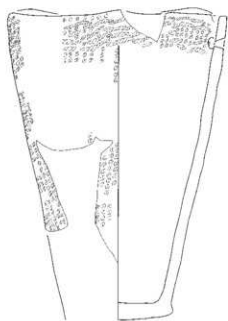
第3図 第1号遺物集中ブロック出土土器



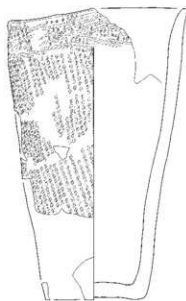
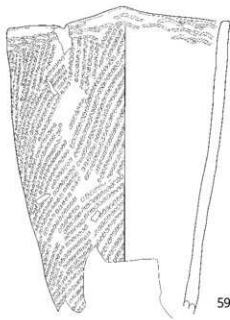
第 3 図 第 1 号 遺 物 集 中 ブ ロ ッ ク 出 土 土 器



第34図 第1号遺物集中ブロック出土土器



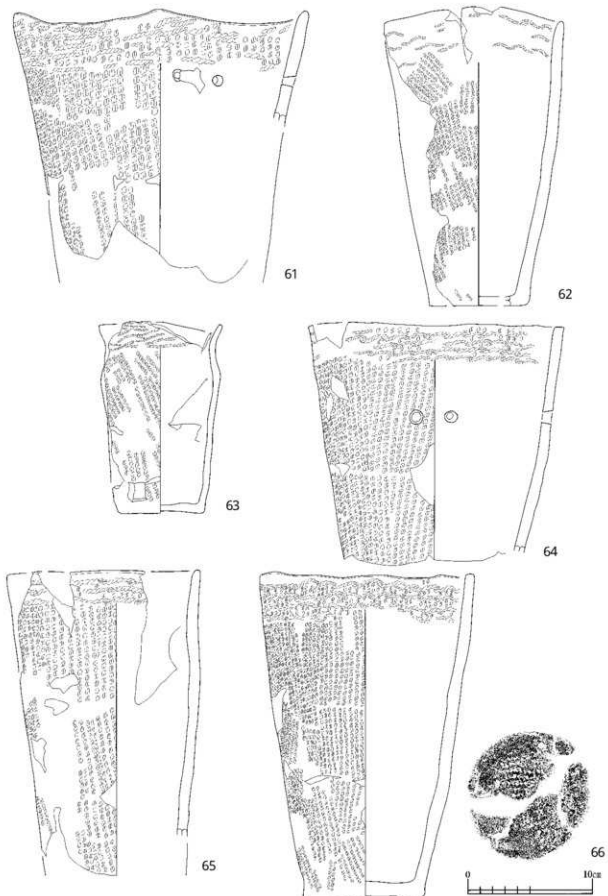
57



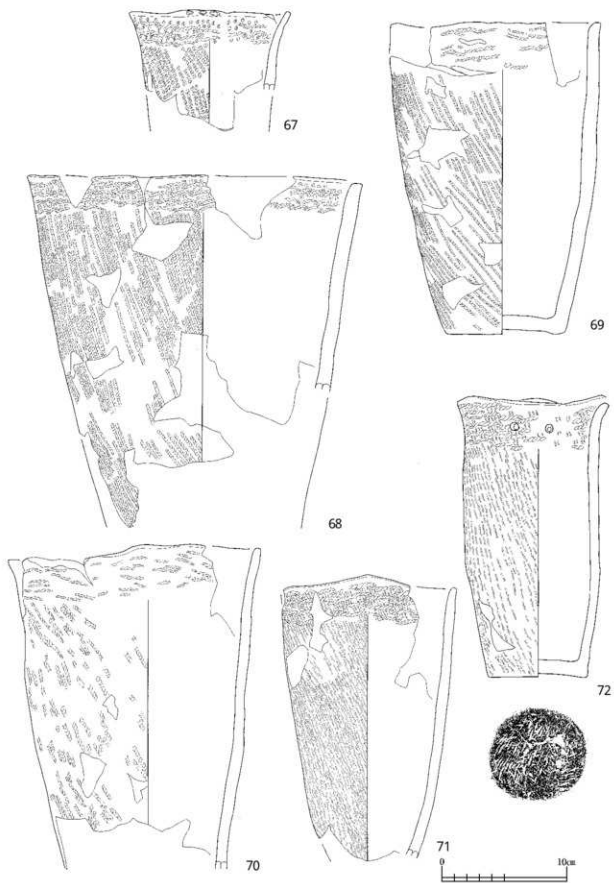
60



第 35 図 第 1 号遺物集中ブロック出土土器

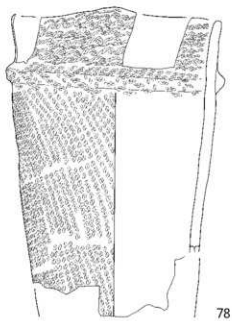
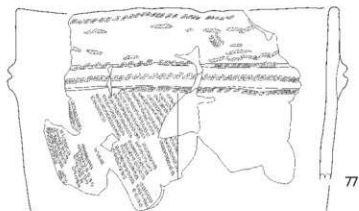
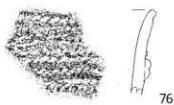
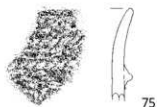
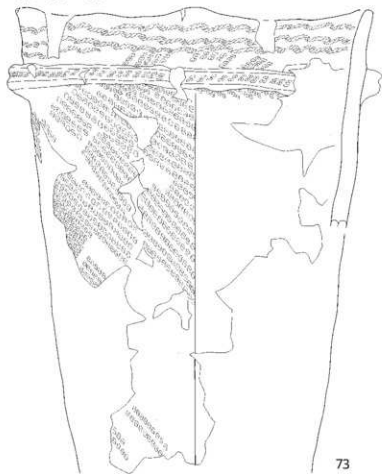


第36図 第1号遺物集中ブロック出土土器

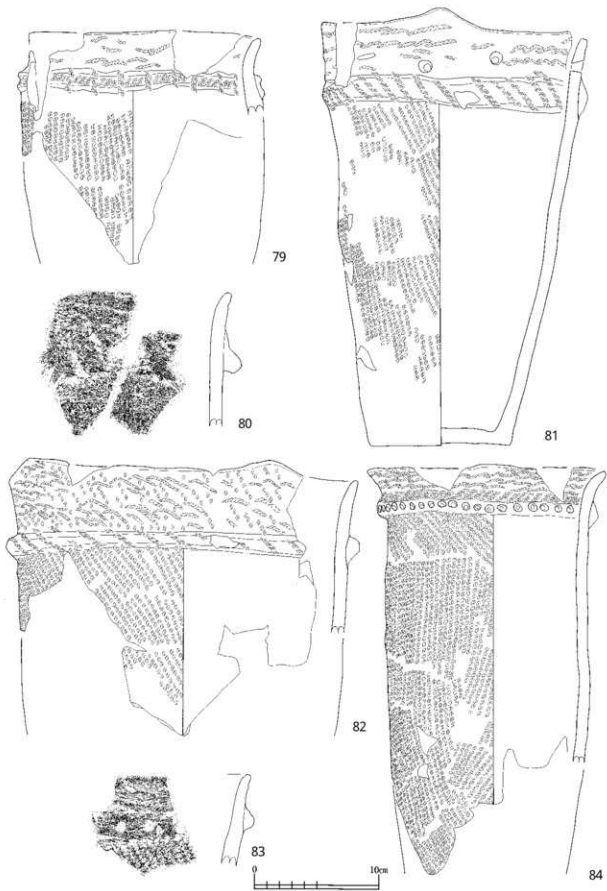


第 3 図 第 1 号 遺 物 集 中 ブ ロ ッ ク 出 土 土 器

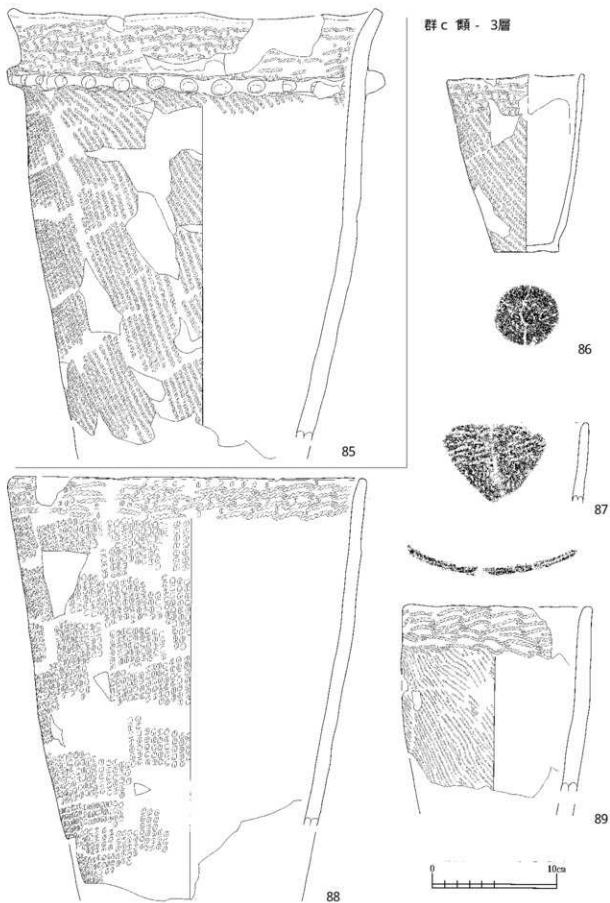
群c 頸 - 4層



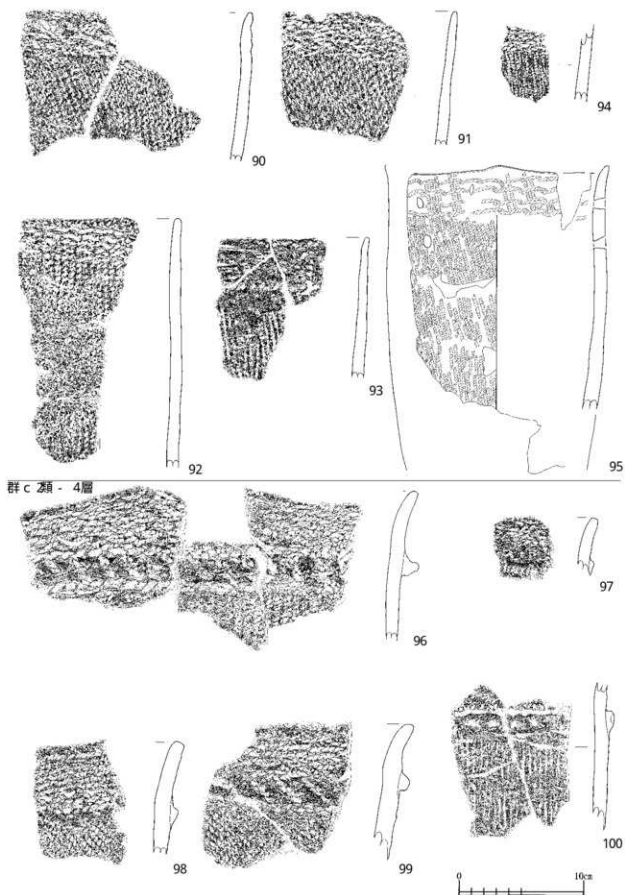
第38図 第1号遺物集中ブロック出土土器



第 35 図 第 1 号 遺 物 集 中 プ ロ ッ ク 出 土 土 器

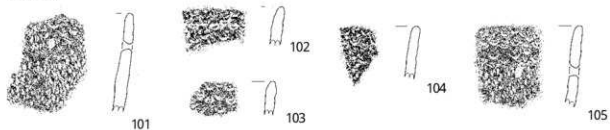


第40図 第1号遺物集中ブロック出土土器

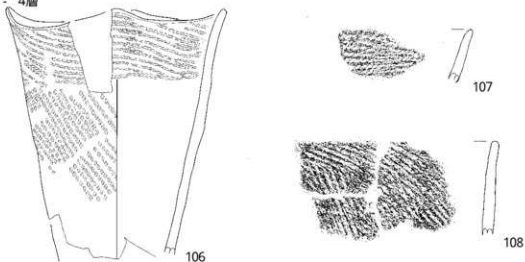


第 4 図 第 1 号 遺 物 集 中 ブ ロ ッ ク 出 土 土 器

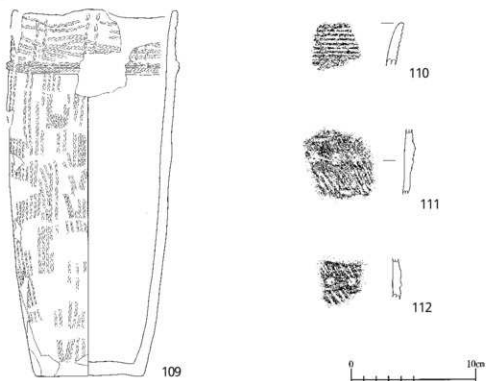
群c 3類



群d類 - 4層

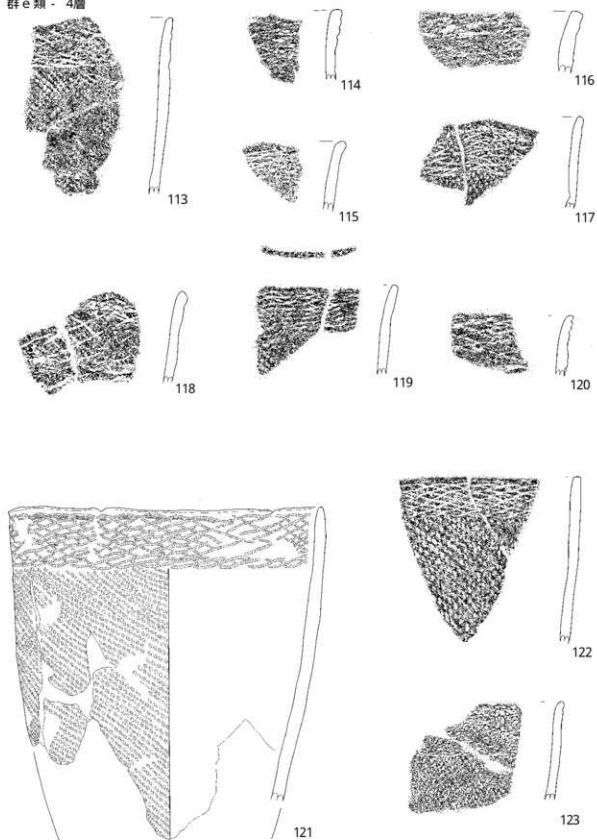


群d類 - 3層

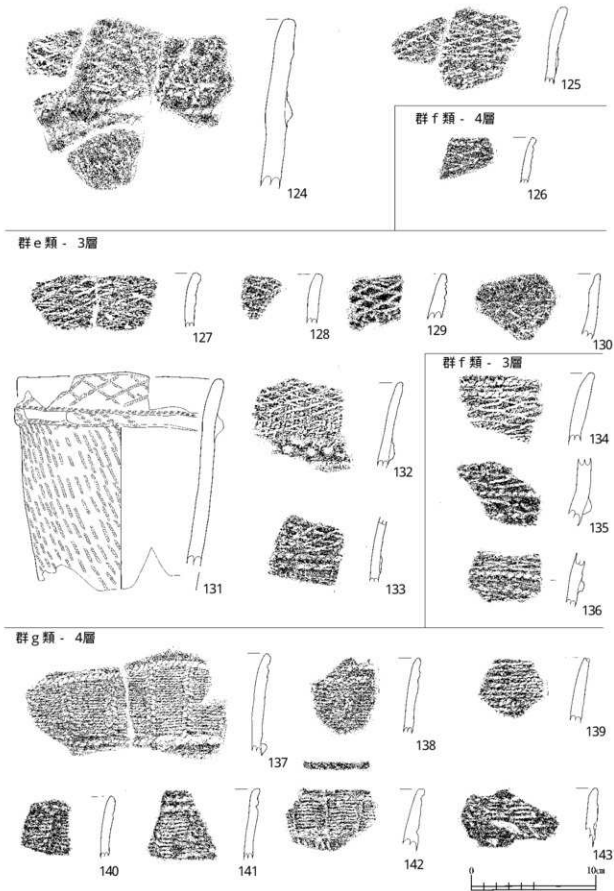


第4図 第1号遺物集中ブロック出土土器

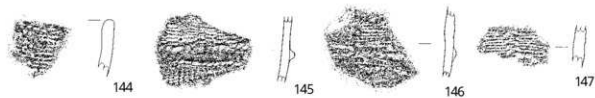
群 e 類 - 4 層



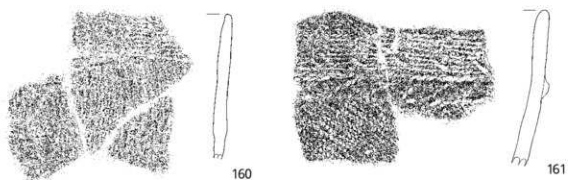
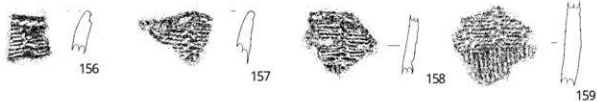
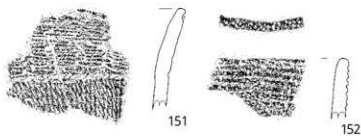
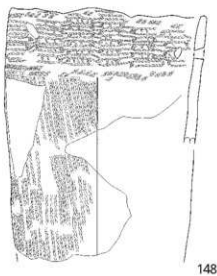
第 4 図 第 1 号遺物集中ブロック出土土器



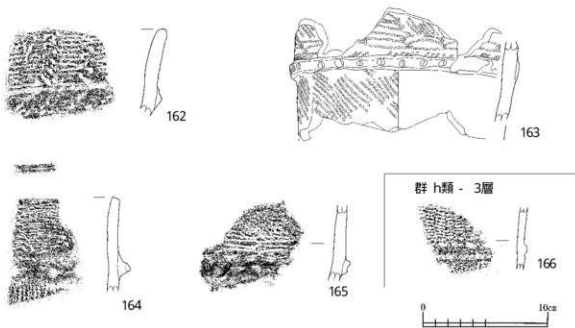
第44図 第1号遺物集中ブロック出土土器



群g類 - 3層



第45図 第1号遺物集中ブロック出土土器



第4図 第1号遺物集中ブロック出土石器

・出土石器

本ブロックからは199点の石器が出土した(フレイク・チップ・使用痕が認められない礫を省く)。うち剥片石器が19点、礫石器が8点である。石器と同様に出土層位は3層と4層である。

以下、本ブロック出土石器について分類ごとに記述する。

A. 石鏃(第4図1~11)

1点が出土した。内訳は円基鏃が3点、平基鏃が7点、尖基鏃が1点である。

1. 円基鏃(1~3)

4層出土資料は1, 3で、3層出土資料は2である。いずれの資料についても周縁部が主体的に調整されている。3はやや幅のある資料である。

2. 平基鏃(4~10)

4層出土資料は6, 8~10で、3層出土資料は4・5, 7である。4~6, 8は平面的にほぼ二等辺三角形を呈する。7は基部がやや丸みを帯び、9・10は平面的にみて軸に対して基部がやや傾斜している。4~6は両面において全面が丁寧に調整されているが、7~9は背面においては全面に調整が施されているが、腹面における調整は周縁に限定されている。10は背面において周縁部にのみ調整が施され、腹面においては調整が全くみられない。

3. 尖基鏃(11)

4層から1点が出土した。基部付近はやや丸みを帯び、欠損している。背面においては基部付近を除いてほぼ全面的に調整が施されているが、腹面における調整は周縁部に限定される。

B. 石槍(第4図12)

4層から1点が出土した。平面的には先端部は二等辺三角形を呈し、長い莖部をもつ。莖の両側縁

の中間部には凸部がみられる。調整は押圧剥離によって施されている。莖部にみられる凸部は獲物の体に刺さった場合に抜けにくくするための機能をもつと考えられ、そのような機能を考慮すると石鈎とすることも可能であるが、現在のところ石鈎と石鈎について形態的に明確な区分がなされていない。本遺跡においては石鈎等の漁労具は出土していないことから、石器の器種構成から判断し、ここでは石鈎として分類した。

C. 石錐 (第4図13~第4図19)

7点が出土した。4層出土資料は15・17~19で、3層出土資料は13・14・16である。14・16・19は錐部が明確に作出されており、それに伴い頭部も平面的には円形ないし方形のツマミ状を呈する。13・15・17・18は不定形を呈する剥片の一端を調整して錐部を作出している。

D. 石匙 (第4図20~第5図98)

79点が出土した。本ブロックから出土した定形石器の中で最も出土量が多い。縦型のものが75点、横型のものは4点であり、縦型のものが圧倒的に多い。

1. 縦型のもの

aが23点、bが19点、cが6点、dが2点、eが3点、fが4点、gが8点、hが10点出土している。

a. 両側縁が直線的なもの (20~42)

23~25・27・31~33・35・38・39は4層、20~22・26・29・30・34・36・37・40~42は3層、28は表土から出土した資料である。縦長を呈する細身の剥片が用いられており、ほぼ直線的な刃部が両側縁に作出されている。基本的に背面において全体に調整が施されているが、腹面にはツマミ部の調整のみが認められるものが多く、22・27・28・32・34のように末端において調整が認められる少数の資料を除けば、使用に伴う微細剥離が認められる程度である。

b. 両側縁ないし一側縁が湾曲するもの (43~61)

43~47・51・54・56・59は4層、48・49・52・53・55・57・58・60・61は3層、50は表土出土資料である。57を除けば、a類と同様に細身の剥片を素材としている。平面的には、両側縁が湾曲し、くの字状ないし逆くの字状を呈するもの(45・58~61)、一側縁は直線的であるがもう一方が曲線的なもの(43・44・46~57)に細分できる。a類と同様に、背面側に主体的に調整が施されるが、腹面側においては側縁に調整が施される45・47・50・52・54・60・6を除いて、ツマミ部の抉りと微細剥離のみ認められる。

c. 側縁の一部に凹凸がみられるもの (62~67)

62・63・66は4層、64・67は3層、65は表土出土資料である。62~64は一側縁に凸部がみられ、65・66・67は一側縁に凹部がみられる。前者はこれまでのa~b類と異なり腹面側においても調整が施されている。62・65~67の背面は、主に周縁に調整が施されている。

d. 下端が鋭く尖るもの (68・69)

68は4層出土資料であり、両面において周縁に調整が施されており、鋭い先端部が作出されている。69は3層出土資料であり、両面において三角形を呈する先端部の周縁に調整が限定されており、ツマミ部をのぞいた部分には目立った調整が施されていない。

e. 下端に向かって細くなるもの (70~72)

いずれも4層出土資料であり、やや幅広の剥片を素材としている。7dは小型で両面ともに周縁に調整が施されている。7i・7jは背面において周縁に調整が施されているが、腹面においてはツマミ部の決り以外に調整は認められない。

f. 丸みを帯びるもの(73-76)

73・74 7dは4層、75は3層出土資料である。いずれもやや幅広の剥片を素材としており、背面においては周縁に丁寧な調整が施されている。腹面においては末端から側縁にかけて微細剥離が認められ、73・75においては末端に調整が施されている。

g. 下端にむかって幅広になるもの(77-84)

79 81 83は4層、78 80 82は3層、77 84は表土出土資料である。背面の調整をみると、79 84は全面的に調整が施されているが、それ以外の資料はツマミ部と周縁に調整が限定されている。腹面の調整については、いずれも明確に認められるものはなく、微細剥離が認められる。77 82は末端方向が欠損しているために不明であるが、末端に微細剥離が認められるものが多い。

h. 欠損により分類不能なもの(85-94)

85 94は4層、86 88-92は3層、87 93は表土出土資料である。ツマミ部が残存しているため、石匙と認定できるものの下半が欠損しているために分類不能なものを一括した。85-89は縦長を呈する細身の剥片、90-94はやや幅広の剥片を素材としていと考えられる。

2. 横型のもの(95-98)

95 97は4層、96 98は3層出土資料である。95は幅広の剥片、96-98は縦長の剥片を横置きにしている。背面側の調整は全面的に調整が施されるものが多い縦型と異なり、周縁部のみ調整が施されている。腹面は95のツマミ部周辺においてやや広めに調整が施されている他は、微細剥離がみられる程度である。

E. 石籠(第54図99-第56図105)

7点が出土した。1類が4点、2類が3点である。

1. 下端において片面のみ刃部調整されているもの(99-102)

100-102は4層、99は3層出土資料である。99-101は上端が欠損している。いずれにおいても背面側においては周縁部が主体的に調整されている。腹面においてはいずれも主要剥離面を大きく残しており、99 101 102において末端及び側縁に剥離が認められる。

2. 両面が刃部調整されているもの(103-105)

いずれも4層から出土しており、両面において丁寧な調整が施されている。

F. 不定形石器(第54図106-第60図148)

100点以上が出土したが、うち刃部が明確なもの3点を図示した。107 109-111 113-115 117-124 128 129 131 133 136 139-142 144-148 150は4層、108 112 116 125-127 130 132 134 135 137 138 143は3層出土資料である。刃部の形状に着目すると、106-115は直線的な刃部、116-128は曲線的な刃部、127-140 147は直線的な刃部と曲線的な刃部、141-146 148は凹凸のある刃部とすることができる。128-131については部分的に欠損しているため推定の域を出ないが、残存部分の形状及び調整方法からみて、本来、定形石器であった可能性が高い。128は

石筥、129～131は石匙の可能性がある。

G．磨製石斧（第6図 149・150）

150は4層、149は3層出土資料である。いずれも刃部が欠損している。149は上端と欠損部の縁辺において剥離が見られ、刃部を欠損した後も使用されていたことが想定される。欠損部の縁辺部付近には擦痕も認められる。150はやや薄手であり、上半部の側縁及び下半が欠損している。

H．半円状扁平打製石器（第6図 151～153）

4層から3点が出土した。いずれにおいても、全体的な形状は磨りによって整えられており、側縁には剥離が認められ、その縁辺部には磨りが認められる。151・152の平坦面においては敲きの痕跡が認められる。

I．敲磨器類（第6図 154～158）

5点出土した。1類が1点、2類が2点、3類が2点である。磨り、凹み、敲きが併存しているものも存在するがその場合は主体的な痕跡によって抽出した。

1．磨り石

b．側縁に磨り痕が認められるもの（154）

4層から出土している。隅丸三角形の扁平な礫の縁辺に磨りが認められる。一側縁において剥離が認められる。

2．凹み石（155・156）

4層から2点出土している。155は不整形円形を呈する扁平な礫であり、2つの平坦面においてそれぞれ2箇所凹みが認められる。156は円形を呈する扁平な礫であり、2つの平坦面においてほぼ中央部に複数の凹みが重複している。両面ともに相対する両側縁において剥離が施されているが、磨りは認められない。

3．たたき石（157・158）

4層から2点出土している。157は縦長の礫における2つの平坦面に敲きが認められ、部分的に磨りが認められる。158は縦長で扁平に近い礫の平坦面と一側縁に敲きが認められる。敲きを有する側縁には剥離が施されている。

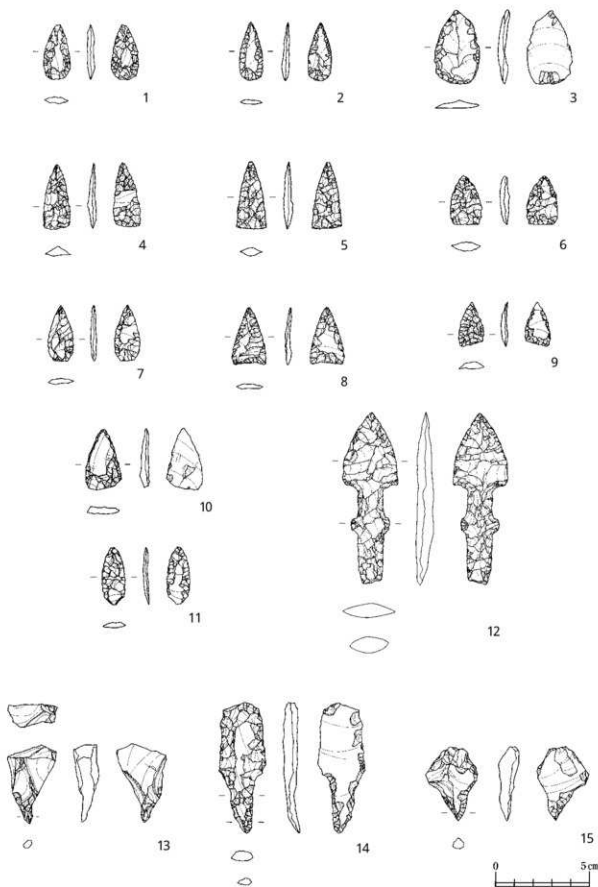
・出土土製品・石製品

ミニチュア土器（第6図 1～4）

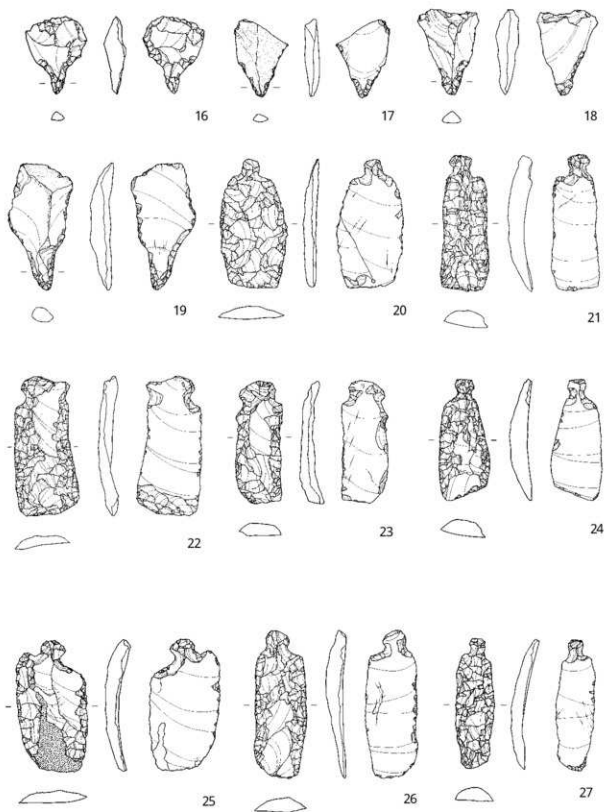
2、4は4層、1、3は3層出土資料である。いずれも欠損している。1はR L Rが回転施文されている。2～4は無文で、3は底部にかなり厚みがあり上底状を呈し、4は口縁部の一部のみが破損しほぼ完形で、胴部がやや張り出している。

用途不明の石製品（第6図 5）

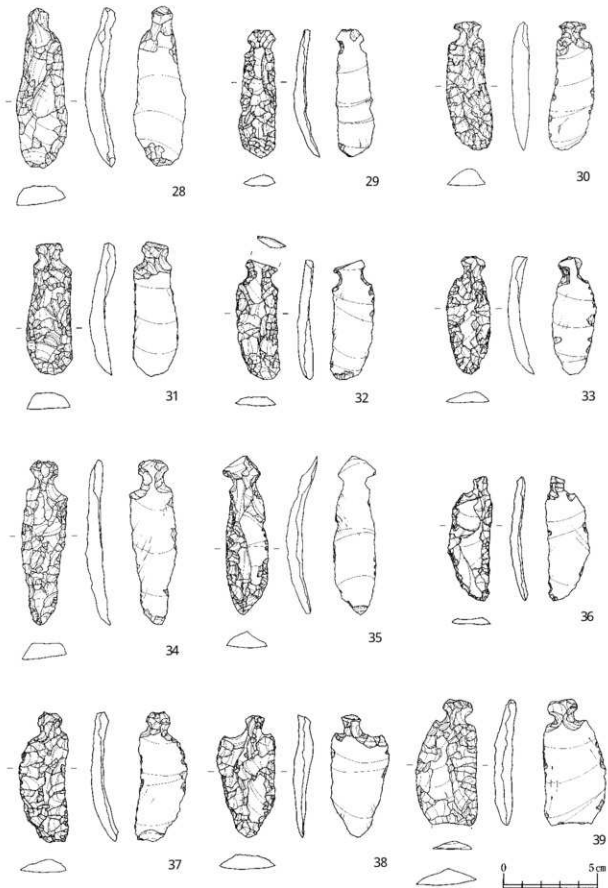
出土層位は不明である。欠損しており、全体形状は不明である。先端が丸みを帯び、棒状を呈する。全体的に同一方向の磨りが施された後、沈線が3条施されている。



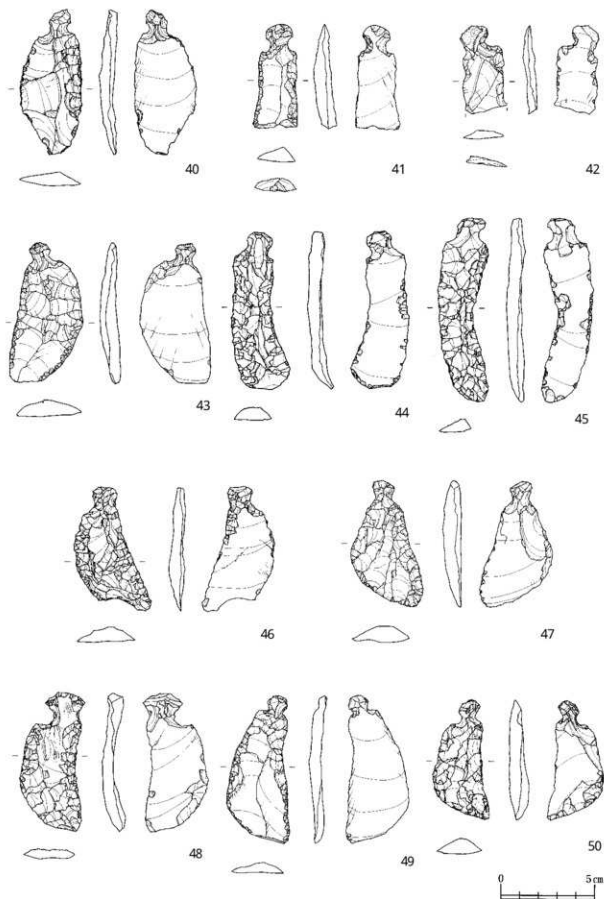
第4図 第1号遺物集中ブロック出土石器



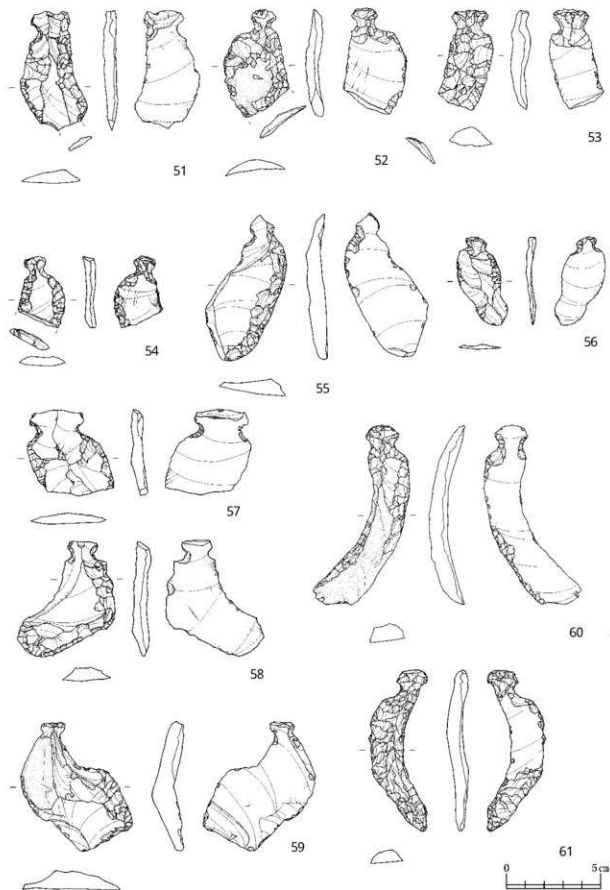
第 48 図 第 1 号遺物集中ブロック出土石器



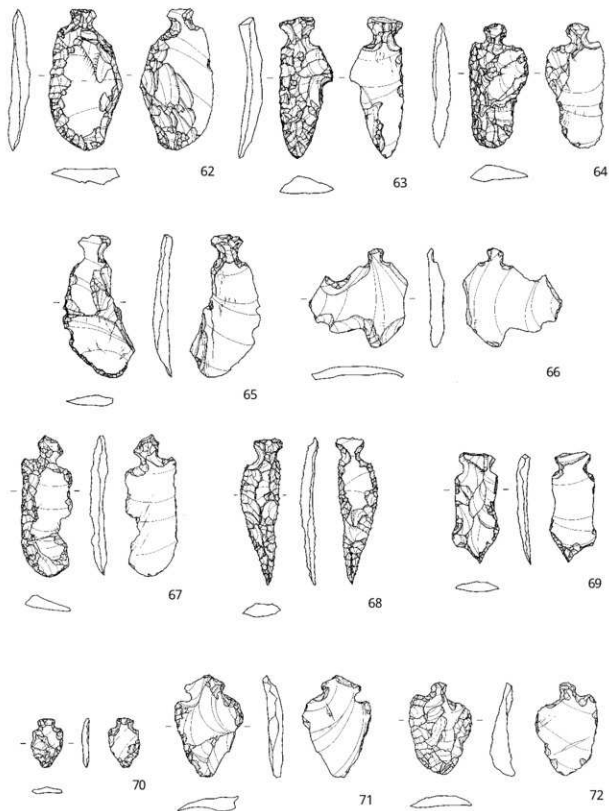
第49図 第1号遺物集中ブロック出土石器



第 50 図 第 1 号遺物集中ブロック出土石器

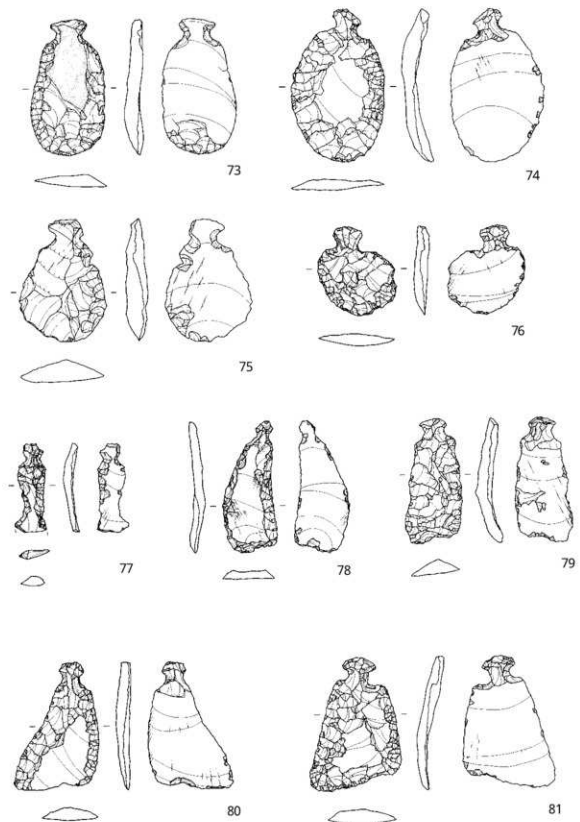


第5図 第1号遺物集中ブロック出土石器

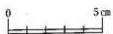
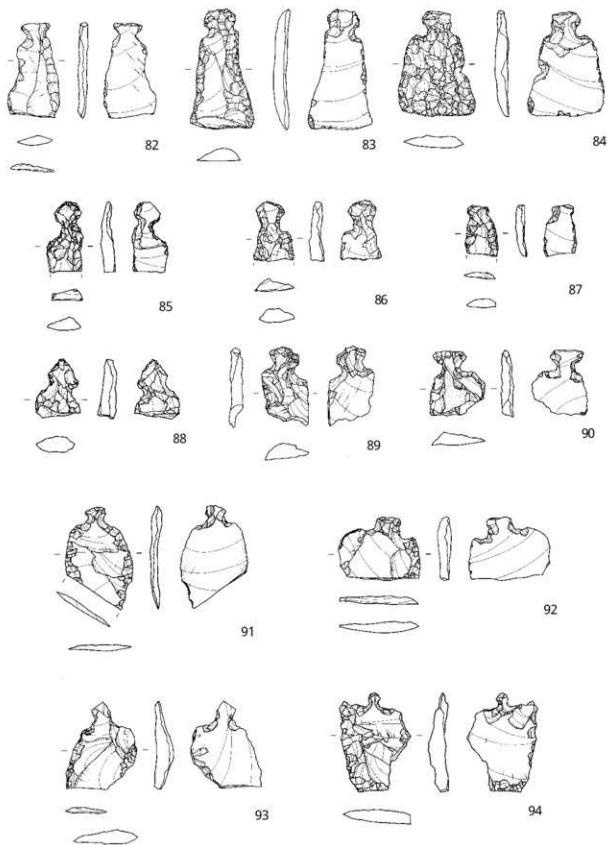


第 5.2 図 第 1 号 遺 物 集 中 プ ロ ッ ク 出 土 石 器

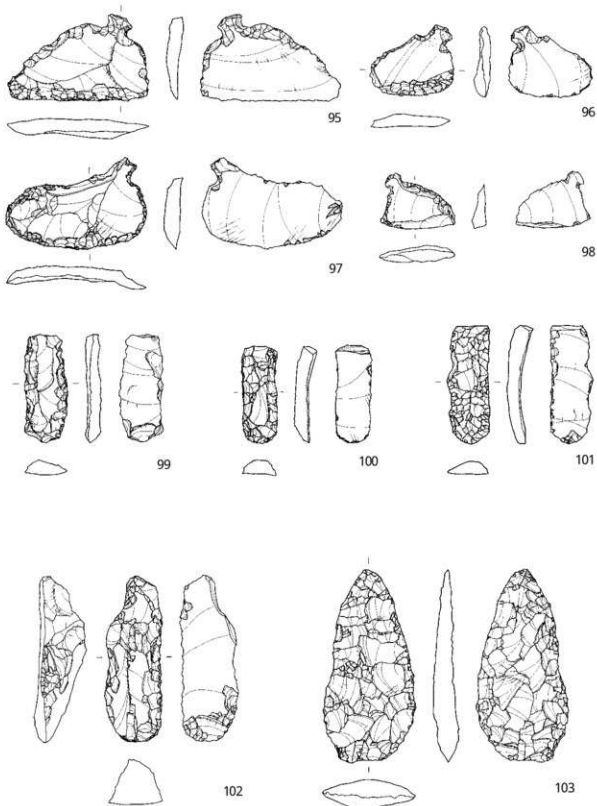




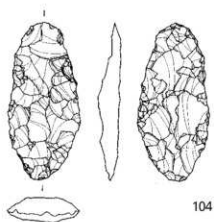
第5図 第1号遺物集中ブロック出土石器



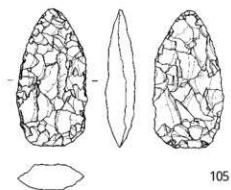
第 54 図 第 1 号遺物集中ブロック出土石器



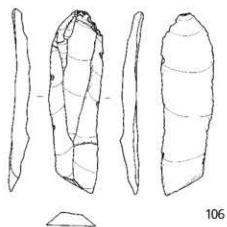
第5図 第1号遺物集中ブロック出土石器



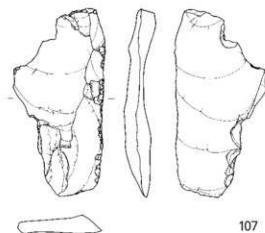
104



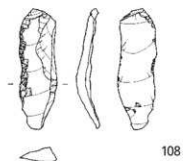
105



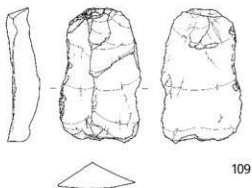
106



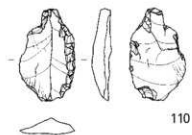
107



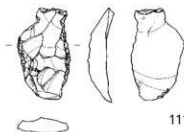
108



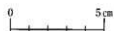
109



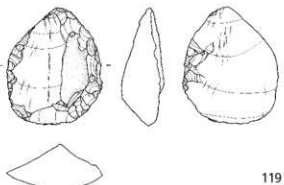
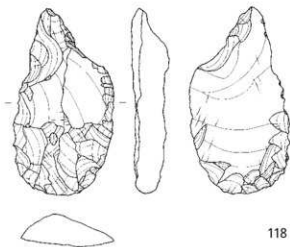
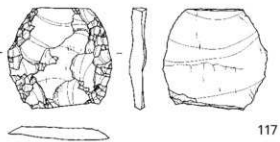
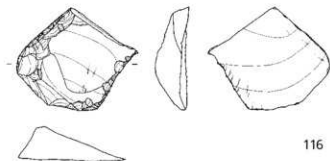
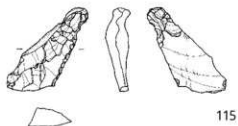
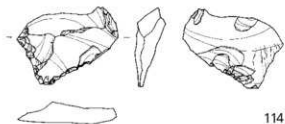
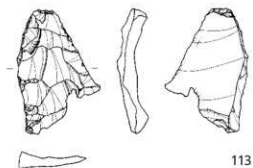
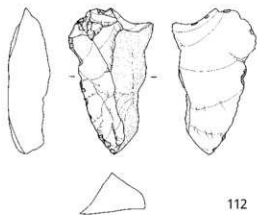
110



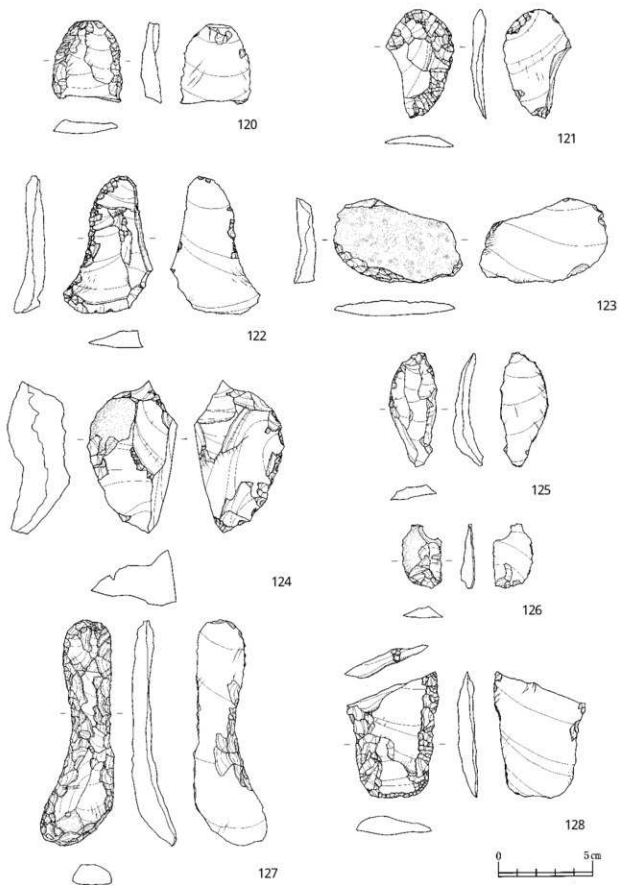
111



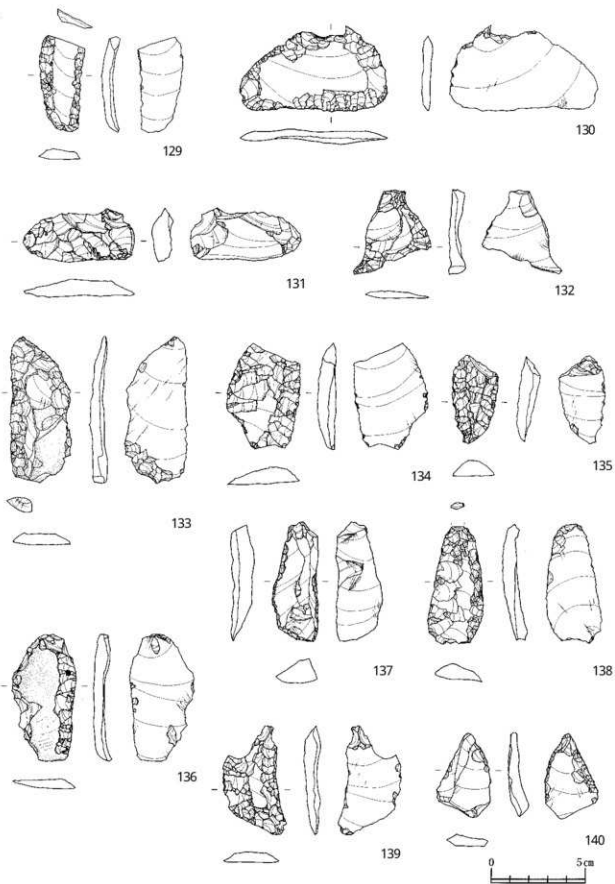
第 56 図 第 1 号遺物集中ブロック出土石器



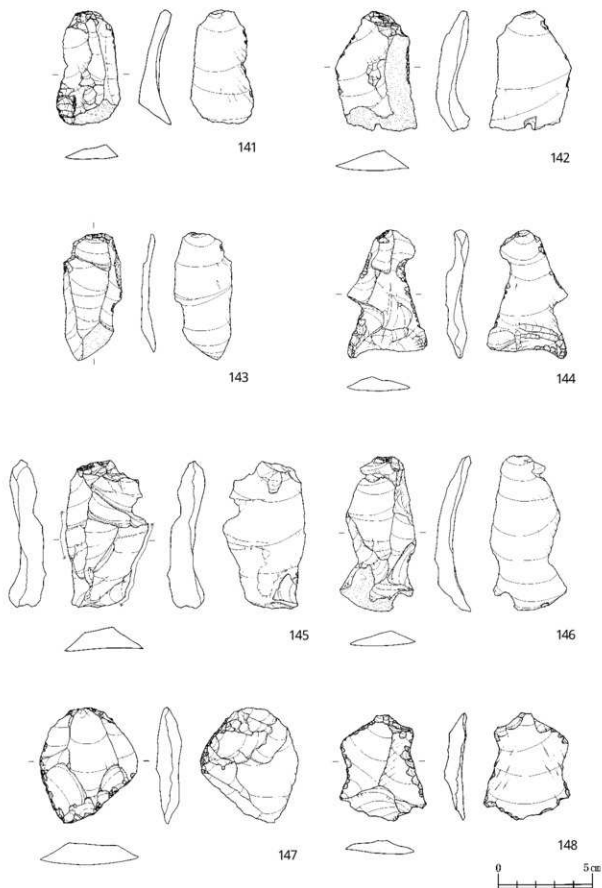
第5図 第1号遺物集中ブロック出土石器



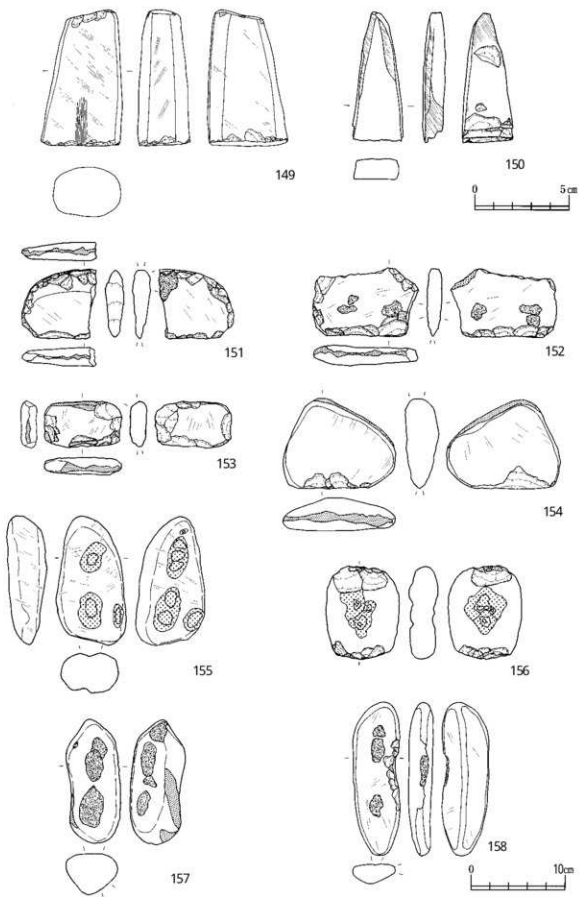
第 58 図 第 1 号遺物集中ブロック出土石器



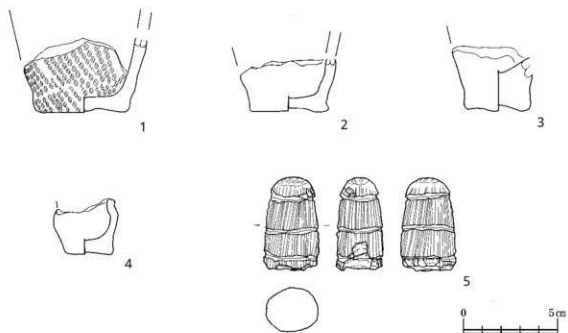
第59図 第1号遺物集中ブロック出土石器



第 60 図 第 1 号遺物集中ブロック出土石器



第6図 第1号遺物集中ブロック出土石器



第 62 図 第 1 号遺物集中ブロック出土土製品・石製品

第6表 第1号遺物集中ブロック出土土器観察表

番号	年度	グッド	層位	器種	部位	文 様			内面調整	焼成	分類	備 考
						口 縁 部	隆 帯	胴 部				
1	99	T 88	4	深鉢	LR回転	隆帯なし	LR胴部回転	ナデ	堅緻	a	波状口縁	
2	99	T 89	4	深鉢	LR回転	隆帯なし	LR回転	ナデ	堅緻	a		
3	99	S 89	4	深鉢	RL回転	隆帯なし	RL回転	ナデ	堅緻	a		
4	99	S 89	4	深鉢	RLR回転	隆帯なし	RLR回転	ナデ	堅緻	a	波状口縁。穿孔あり	
5	99	S 89	4	深鉢	RLR回転	隆帯なし	RLR回転	ナデ	堅緻	a		
6	99	S 89	4	深鉢	RLR回転	隆帯なし	RLR回転	ナデ	堅緻	a	穿孔あり。底部にもRLR回転。口縁がやや先回り。	
7	99	S 89	4	深鉢	RLR回転	隆帯なし	RLR回転	ナデ	堅緻	a		
8	99	T 90	4	深鉢	RLR回転	隆帯なし	RLR回転	ナデ	堅緻	a		
9	99	S 89	4	深鉢	RLR回転	隆帯なし	RLR回転	ナデ	堅緻	a		
10	99	S 89	4	深鉢	RLR回転	隆帯なし	RLR回転	ナデ	堅緻	a		
11	99	S 89	4	深鉢	RLR回転	隆帯なし	RLR回転	ナデ	堅緻	a		
12	99	S 89	4	深鉢	RLR回転	隆帯なし	RLR回転	ナデ	堅緻	a		
13	99	S 89	4	深鉢	RLR回転	隆帯なし	RLR回転	ナデ	堅緻	a		
14	99	T 89	4	深鉢	LR回転	隆帯なし	LR回転	ナデ	堅緻	a		
15	99	S 89	4	深鉢	RLR回転	無文	RLR回転	ナデ	堅緻	a		
16	99	S 89	4	深鉢	RLR回転	RLR側面圧痕	RLR回転	ナデ	堅緻	a		
17	99	T 90	4	深鉢	RLR回転	RLR側面圧痕(部位)	RLR回転	ナデ	堅緻	a		
18	99	S 88	3	深鉢	RL回転		RL回転		堅緻	a		
19	99	S 89	3	深鉢	RLR回転		RLR回転		堅緻	a		
20	99	S 88	3	深鉢	RLR回転		RLR回転		堅緻	a		
21	99	S 89	3	深鉢	RLR回転		RLR回転		堅緻	a		
22	99	S 89	3	深鉢	RLR回転		RLR回転		堅緻	a	穿孔有り	
23	99	S 88	3	深鉢	RLR回転		RLR回転		堅緻	a	口縁がやや外反する	
24	99	S 88	3	深鉢	RLR回転		RLR回転		堅緻	a		
25	99	T 89	3	深鉢	RLR回転・RLR側面圧痕 茶	赤線直線・RLR回転	RLR回転	ナデ	堅緻	a	波状口縁。穿孔あり	
26	99	S 89	4	深鉢	RLR回転・RLR側面圧痕 茶	隆帯なし	RLR回転	ナデ	堅緻	b	底面にもRLR回転	
27	99	T 90	4	深鉢	RLR回転・RLR側面圧痕 茶	隆帯なし	RLR回転	ナデが	堅緻	b	波状口縁	
28	99	S 89	4	深鉢	RLR回転・RLR側面圧痕 茶	隆帯なし	RLR回転	ナデ	堅緻	b	底部にもRLR回転	
29	99	T 89	4	深鉢	RLR側面圧痕 茶	隆帯なし	RLR回転	ナデ	堅緻	b	底部にもRLR回転	
30	99	S 89	4	深鉢	RLR回転・RLR側面圧痕 茶	隆帯なし	RLR回転		堅緻	b		
31	99	T 88	4	深鉢	RLR回転・RLR側面圧痕 茶	隆帯なし	RLR回転		堅緻	b		
32	99	S 89	4	深鉢	RLR回転・RLR側面圧痕 茶	隆帯なし	RLR回転		堅緻	b		
33	99	S 89	4	深鉢	RLR回転・RLR側面圧痕 茶	隆帯なし	RLR回転		堅緻	b		
34	99	S 89	4	深鉢	RLR回転・RLR側面圧痕 茶	隆帯なし	RLR回転		堅緻	b		
35	99	S 89	4	深鉢	深線直線茶條帯・RLR側面圧痕 茶	隆帯なし	RLR回転	ナデ	堅緻	b	波状口縁	
36	99	S 89	4	深鉢	RLR回転・RLR側面圧痕 茶	隆帯なし	RLR回転		堅緻	b		
37	99	S 89	4	深鉢	RLR回転・RLR側面圧痕 茶	隆帯なし	RLR回転		堅緻	b		
38	99	S 89	3	深鉢	RLR回転・RLR側面圧痕 茶	隆帯なし	RLR回転		堅緻	b		
39	99	S 88	3	深鉢	RLR回転・RLR側面圧痕 茶	隆帯なし	RLR回転		堅緻	b		
40	99	S 88	3	深鉢	RLR回転・RLR側面圧痕 茶	隆帯なし	RLR回転		堅緻	b		
41	99	S 88	3	深鉢	RLR回転・RLR側面圧痕 茶	隆帯なし	RLR回転		堅緻	b		
42	99	T 89	3	深鉢	RLR回転・RLR側面圧痕 茶	隆帯なし	RLR回転		堅緻	b		
43	99	T 89	3	深鉢	RLR回転・RLR側面圧痕	隆帯なし	RLR回転		堅緻	b		
44	99	T 89	3	深鉢	RLR回転・RLR側面圧痕	隆帯なし	RLR回転		堅緻	b		
45	99	S 88	3	深鉢	RLR回転・RLR側面圧痕 茶	隆帯なし	RLR回転		堅緻	b		
46	96	S 89	4	深鉢	R結節回転文・R側面圧痕	隆帯なし	RLR回転		堅緻	c1	波状口縁。底部にもRLR回転	
47	97	S 89	4	深鉢	RLR回転・R結節回転文	隆帯なし	RLR回転		堅緻	c1	波状口縁。底部にもRLR回転	
48	98	T 90	4	深鉢	L結節回転文	隆帯なし	RLR回転		堅緻	c1	波状口縁。底部にもRLR回転	
49	99	S 89	4	深鉢	RLR回転・R結節回転文	隆帯なし	RLR回転	ナデ	堅緻	c1	波状口縁。底部にもRLR回転	

番号	年度	グリッド	層位	器種	部位	文 様			内面調整	焼成	分類	備 考
						口 縁 部	隆 帯	胴 部				
50	99	S 89	4	深鉢	R6結節回転文	隆帯なし	RLR回転	ナデ	整飾	c1	波状口縁	
51	99	T 89	4	深鉢	RLR回転・R6結節回転文	隆帯なし	RLR回転	ナデ	整飾	c1	波状口縁。底部にもRLR回転。穿孔あり	
52	99	S 89	4	深鉢	RLR回転・R6結節回転文	隆帯なし	RLR回転	ナデ	整飾	c1	波状口縁。底部にもRLR回転	
53	99	S 89	4	深鉢	RLR回転・R6結節回転文	隆帯なし	RLR回転	ナデ	整飾	c1	波状口縁。底部にもRLR回転	
54	99	T 89	4	深鉢	RLR回転・LR6結節回転文	隆帯なし	RLR回転	ミガキ	整飾	c1	波状口縁。穿孔あり	
55	99	T 89	4	深鉢	R6結節回転文	隆帯なし	RLR回転	ナデ	整飾	c1	波状口縁。底部にもRLR回転	
56	99	T 89	4	深鉢	R6結節回転文	隆帯なし	RLR回転	ナデ	整飾	c1	波状口縁。底部にもRLR回転	
57	99	T 90	4	深鉢	RLR回転・R6結節回転文	隆帯なし	RLR回転	ナデ	整飾	c1	波状口縁。穿孔あり。底部にもRLR回転	
58	99	S 89	4	深鉢	RLR回転・R6結節回転文	隆帯なし	RLR回転	ナデ	整飾	c1	波状口縁	
59	99	T 89	4	深鉢	R6結節回転文	隆帯なし	LRLR回転	ナデ	整飾	c1	波状口縁	
60	99	S 89	4	深鉢	RLR回転・R6結節回転文	隆帯なし	RLR回転	ナデ	整飾	c1	波状口縁。底部にもRLR回転	
61	99	S 89	4	深鉢	RLR回転・R6結節回転文	隆帯なし	RLR回転	ナデ	整飾	c1	波状口縁。穿孔あり。口縁がやや反する。	
62	99	S 89	4	深鉢	R6結節回転文	隆帯なし	RLR回転	ナデ	整飾	c1	波状口縁	
63	99	T 89	4	深鉢	R6結節回転文	隆帯なし	RLR回転	ナデ	整飾	c1	胴部上半がやや湾出し。口縁が外反	
64	99	S 8 7	4	深鉢	RLR回転・R6結節回転文	隆帯なし	RLR回転	ナデ	整飾	c1	穿孔あり	
65	99	T 89	4	深鉢	RLR回転・R6結節回転文	隆帯なし	RLR回転	ナデ	整飾	c1		
66	99	S 89	4	深鉢	RLR回転・R6結節回転文	隆帯なし	RLR回転	ナデ	整飾	c1	底部にもRLR回転	
67	99	S 89	4	深鉢	R6結節回転文	隆帯なし	RLR回転	ナデ	整飾	c1	唇に竹製送り具による圧痕。口縁がやや外反する。	
68	99	T 90	4	深鉢	RLR回転・L6結節回転文	隆帯なし	RLR回転	ナデ	整飾	c1		
69	99	T 89	4	深鉢	R6結節回転文	隆帯なし	LR回転	ナデ	整飾	c1	波状口縁	
70	99	T 89	4	深鉢	R6結節回転文	隆帯なし	RRR回転	ナデ	整飾	c1	波状口縁	
71	99	S 89	4	深鉢	R6結節回転文	隆帯なし	RR回転	ナデ	整飾	c1	波状口縁	
72	99	T 89	4	深鉢	R6結節回転文	隆帯なし	RR回転	ナデ	整飾	c1	波状口縁。口縁外反。穿孔あり。底部にもRLR回転	
73	99	T 90	4	深鉢	RLR回転・R6結節回転文	RLR側面圧痕	RLR回転	ナデ	整飾	c2	波状口縁	
74	99	T 89	4	深鉢	R6結節回転文	RLR側面圧痕	RLR回転		整飾	c2		
75	99	T 89	4	深鉢	R6結節回転文	RLR側面圧痕	RLR回転		整飾	c2		
76	99	T 89	4	深鉢	R6結節回転文・RLR側面圧痕	RLR側面圧痕	RLR回転	ミガキ	整飾	c2		
77	99	S 89	4	深鉢	R6結節回転文・RLR側面圧痕	RLR側面圧痕	RLR回転	ナデ	整飾	c2		
78	99	S 89	4	深鉢	R6結節回転文・RLR側面圧痕	RLR側面圧痕(斜位)	RLR回転	ナデ	整飾	c2	波状口縁	
79	99	T 89	4	深鉢	R6結節回転文	RLR側面圧痕(種位・斜位)	RLR回転	ナデ	整飾	c2	波状口縁。口縁部がくびれる	
80	99	T 89	4	深鉢	R6結節回転文	RLR側面圧痕(斜位)	RLR回転	ミガキ	整飾	c2	波状口縁	
81	99	T 89	4	深鉢	R6結節回転文	RLR側面圧痕(斜位)	RLR回転	ナデ	整飾	c2	波状口縁。穿孔あり	
82	99	T 89	4	深鉢	RLR回転・R6結節回転文	RLR側面圧痕(斜位)	RLR回転	ナデ	整飾	c2	波状口縁	
83	99	T 88	4	深鉢	RLR回転・R6結節回転文	竹置による刺突	RLR回転	ミガキ	整飾	c2		
84	99	S 89	4	深鉢	RLR回転・R6結節回転文	竹置による刺突	RLR回転	ナデ	整飾	c2	口縁がやや外反する	
85	99	T 89	4	深鉢	RLR回転・R6結節回転文	指痕圧痕	RLR回転	ナデ	整飾	c2	波状口縁	
86	99	T 90	3	深鉢	RLR回転・R6結節回転文	隆帯なし	RLR回転	ナデ	整飾	c1	崖状口縁。穿孔あり。底部にもRLR回転	
87	99	T 89	3	深鉢	R6結節回転文	隆帯なし	RLR回転		整飾	c1		
88	99	T 90	3	深鉢	RLR回転・R6結節回転文	隆帯なし	RLR回転	ナデ	整飾	c1		
89	99	T 90	3	深鉢	R6結節回転文	隆帯なし	R回転	ナデ	整飾	c1	口唇にもR回転	
90	99	T 89	3	深鉢	RLR回転・R6結節回転文	隆帯なし	RLR回転	ナデ	整飾	c1		
91	99	T 89	3	深鉢	RLR回転・R6結節回転文	隆帯なし	RLR回転	ナデ	整飾	c1		
92	99	T 89	3	深鉢	RLR回転・R6結節回転文	隆帯なし	RLR回転	ナデ	整飾	c1		
93	99	S 88	3	深鉢	R6結節回転文・RLR側圧痕	隆帯なし	RLR回転	ナデ	整飾	c1		
94	99	S 89	3	深鉢	R6結節回転文	隆帯なし	RRR回転	ナデ	整飾	c1		
95	99	S 89	3	深鉢	RRR回転・R6結節回転文	隆帯なし	RRR回転	ナデ	整飾	c1	波状口縁。穿孔あり	
96	99	T 88	3	深鉢	RLR回転・R6結節回転文	RLR側面圧痕(斜位)	RLR回転		整飾	c2	波状口縁	
97	99	S 88	3	深鉢	R6結節回転文	R側面圧痕		ミガキ	整飾	c2		
98	99	T 89	3	深鉢	R6結節回転文・R側面圧痕	RLR側面圧痕	RLR回転		整飾	c2	波状口縁	
99	99	S 88	3	深鉢	R6結節回転文	RLR側面圧痕	RLR回転		整飾	c2		

番号	年度	グリッド	層位	器種	部位	文 様			内面 調整	焼成	分類	備 考
						口 縁 部	踵 帯	胴 部				
100	99	S 88	3	深鉢	R単軸結糸体第 1 類	竹管の刺突	R単軸結糸体第 1 類		堅緻	c2		
101	99	S 89	3	深鉢	半裁竹管による疑似結糸体回転文	踵帯なし	RLR回転		堅緻	c3	102・103・104・105と同一個体	
102	99	S 89	3	深鉢	半裁竹管による疑似結糸体回転文	踵帯なし	RLR回転		堅緻	c3	101・103・104・105と同一個体	
103	99	S 89	3	深鉢	半裁竹管による疑似結糸体回転文	踵帯なし	RLR回転		堅緻	c3	101・102・104・105と同一個体	
104	99	S 89	3	深鉢	半裁竹管による疑似結糸体回転文	踵帯なし	RLR回転		堅緻	c3	101・102・103・105と同一個体	
105	99	S 89	3	深鉢	半裁竹管による疑似結糸体回転文	踵帯なし	RLR回転		堅緻	c3	101・102・103・104と同一個体	
106	99	S 89	4	深鉢	R単軸結糸体第 1 類 (R)	踵帯なし	RLR回転	ナデ	堅緻	d	波状口縁	
107	99	T 88	4	深鉢	R単軸結糸体第 1 類				堅緻	d		
108	99	T 90	4	深鉢	R単軸結糸体第 1 類	踵帯なし	R単軸結糸体第 1 類		堅緻	d		
109	99	T 89	3	深鉢	R単軸結糸体第 1 類 (R)・L側面圧痕	R側面圧痕		ナデ	堅緻	d		
110	99	S 88	3	深鉢	L単軸結糸体第 1 類回転			ミガキ	堅緻	d		
111	99	T 89	3	深鉢	R単軸結糸体第 1 類 (R) (R側面圧痕)	竹管状の刺突	R単軸結糸体第 1 類		堅緻	d	112と同一個体	
112	99	T 89	3	深鉢	R単軸結糸体第 1 類 (R) (R側面圧痕)	竹管状の刺突	R単軸結糸体第 1 類		堅緻	d	112と同一個体	
113	99	T 88	4	深鉢	R単軸結糸体第 1 類	踵帯なし	RLR回転		堅緻	e		
114	99	T 89	4	深鉢	R単軸結糸体第 1 類	踵帯なし	不明		堅緻	e		
115	99	S 89	4	深鉢	R単軸結糸体第 1 類		不明		堅緻	e	やや口縁が外反する	
116	99	T 89	4	深鉢	R単軸結糸体第 1 類				堅緻	e		
117	99	T 89	4	深鉢	R単軸結糸体第 1 類	踵帯なし	RLR回転		堅緻	e		
118	99	S 89	4	深鉢	R側面圧痕・R単軸結糸体第 1 類	踵帯なし			堅緻	e	波状口縁	
119	99	T 89	4	深鉢	R単軸結糸体第 1 類	踵帯なし	RLR回転		堅緻	e	口唇にRの圧痕	
120	99	T 89	4	深鉢	R単軸結糸体第 1 類	踵帯なし	RLR回転		堅緻	e		
121	99	T 90	4	深鉢	R単軸結糸体第 1 類	踵帯なし	RLR回転	ナデ	堅緻	e		
122	99	T 89	4	深鉢	R単軸結糸体第 1 類	踵帯なし	RLR回転		堅緻	e		
123	99	T 89	4	深鉢	R単軸結糸体第 1 類	踵帯なし	RLR回転		堅緻	e		
124	99	S 89	4	深鉢	R単軸結糸体第 1 類	RLR側面圧痕	RLR回転		堅緻	e	波状口縁	
125	99	S 89	4	深鉢	R単軸結糸体第 1 類	RLR側面圧痕	RLR回転		堅緻	e	波状口縁	
126	99	T 89	4	深鉢	R単軸結糸体第 1 類 (R)・L側面圧痕	踵帯なし	RLR回転		堅緻	f		
127	99	T 89	3	深鉢	R単軸結糸体第 1 類		不明		堅緻	e	波状口縁	
128	99	S 89	3	深鉢	R単軸結糸体第 1 類		不明		堅緻	e		
129	99	T 89	3	深鉢	R単軸結糸体第 1 類		RLR回転		堅緻	e		
130	99	T 88	3	深鉢	R単軸結糸体第 1 類		RLR回転		堅緻	e		
131	99	T 89	3	深鉢	R単軸結糸体第 1 類 (R)・L側面圧痕	RLR側面圧痕 (斜位)	LLR踵部回転	ナデ	堅緻	e		
132	99	S 89	3	深鉢	R単軸結糸体第 1 類 (R) (R側面圧痕)・R単軸結糸体第 1 類 (R)	指頭圧痕	不明		堅緻	e	波状口縁	
133	99	S 88	3	深鉢	R単軸結糸体第 1 類 (R)・L側面圧痕		R単軸結糸体第 1 類		堅緻	e		
134	99	S 89	3	深鉢	RLR側面圧痕 28・R単軸結糸体第 1 類				堅緻	f	135と同一個体	
135	99	S 89	3	深鉢	R単軸結糸体第 1 類	RLR側面圧痕	不明		堅緻	f	134と同一個体	
136	99	S 89	3	深鉢	R単軸結糸体第 1 類 (R)・L側面圧痕	文様なし	不明		堅緻	f		
137	99	T 89	4	深鉢	R単軸結糸体第 6A 類 (R)・L側面圧痕	文様なし			堅緻	g		
138	99	T 89	4	深鉢	R単軸結糸体第 6A 類 (R)・L側面圧痕				堅緻	g		
139	99	T 89	4	深鉢	R単軸結糸体第 6A 類 (R)				堅緻	g		
140	99	T 89	4	深鉢	R単軸結糸体第 6A 類 (R)			ミガキ	堅緻	g		
141	99	T 89	4	深鉢	R単軸結糸体第 6A 類 (R)・L側面圧痕				堅緻	g		
142	99	T 88	4	深鉢	R単軸結糸体第 6A 類・RLR側面圧痕	なし		ミガキ	堅緻	g	口唇にR側圧	
143	99	T 89	4	深鉢	R単軸結糸体第 6A 類 (R)				堅緻	g		
144	99	T 89	4	深鉢	R単軸結糸体第 6A 類 (R)				堅緻	g		
145	99	S 89	4	深鉢	R単軸結糸体第 6A 類 (R)・L側面圧痕	文様なし	RLR回転		堅緻	g		
146	99	T 89	4	深鉢	R単軸結糸体第 6A 類 (R)・L側面圧痕	文様なし		ミガキ	堅緻	g		
147	99	S 89	4	深鉢	R単軸結糸体第 6A 類 (R)	不明		ミガキ	堅緻	g		
148	99	S 89	3	深鉢	R単軸結糸体第 6A 類 (R)・R側面圧痕	踵帯なし	R単軸結糸体第 1 類	ナデ	堅緻	g	波状口縁。穿孔あり	
149	99	S 89	3	深鉢	R単軸結糸体第 6A 類 (R)	踵帯なし	RLR回転		堅緻	g		

番号	年度	グリッド	層位	器種	部位	文 様			内面 調整	焼成	分類	備 考
						口 縁 部	隆 帯	胴 部				
150	99	T 89	3	深鉢	R単軸結糸体第 6A 類回転	隆帯なし				整緻	g	
151	99	T 89	3	深鉢	R単軸結糸体第 6A 類回転	隆帯なし	RRL回転			整緻	g	216と同一個体
152	99	S 88	3	深鉢	R単軸結糸体第 6A 類回転	隆帯なし				整緻	g	口唇にも RLR 回転
153	99	S 88	3	深鉢	R単軸結糸体第 6A 類回転					整緻	g	
154	99	T 89	3	深鉢	R単軸結糸体第 6A 類回転					整緻	g	
155	99	T 89	3	深鉢	単軸結糸体第 6A 類回転・RL側面圧痕					整緻	g	波状口縁
156	99	T 88	3	深鉢	単軸結糸体第 6A 類回転・RL側面圧痕					整緻	g	
157	99	T 89	3	深鉢	単軸結糸体第 6A 類回転・RL側面圧痕					整緻	g	
158	99	T 89	3	深鉢	単軸結糸体第 6A 類回転・RL側面圧痕					整緻	g	
159	99	T 89	3	深鉢	R単軸結糸体第 6A 類回転	隆帯なし	単軸結糸体第 6A 類回転			整緻	g	
160	99	S 88	3	深鉢	R単軸結糸体第 6A 類回転	隆帯なし	RRL回転		ナデ	整緻	g	
161	99	S 89	3	深鉢	単軸結糸体第 6A 類回転・RL側面圧痕	RL側面圧痕(非直)	RL側面		ミガキ	整緻	g	162と同一個体
162	99	S 89	3	深鉢	R単軸結糸体第 6A 類回転	RL側面圧痕	RL側面圧痕		ミガキ	整緻	g	162と同一個体
163	99	S 89	3	深鉢	単軸結糸体第 6A 類回転・RL側面圧痕・RL回転	指頭圧痕	RLR回転		ナデ	整緻	g	
164	99	S 88	3	深鉢	R単軸結糸体第 6A 類回転	指頭圧痕	単軸結糸体第 6A 類回転			整緻	g	口唇に R側面圧痕 2条
165	99	S 88	3	深鉢	R単軸結糸体第 6A 類回転	指頭圧痕				整緻	g	
166	99	S 89	3	深鉢	R単軸結糸体第 6A 類回転・RL側面圧痕		RLR側面圧痕			整緻	h	

第 7 表 第 1号遺物集中ブロック出土石器観察表

番号	年度	出土地点	層位	最大計測値			重量 (g)	石質	分類 記号	備 考
				長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)				
99	1	T 90	4	29	14	5	2.0	珩	A 1	
99	2	T 88	3	31	13	4	1.4	珩	A 1	
99	3	T 89	4	40	24	4	3.6	珩	A 1	
99	4	S 88	3	35	14	5	1.4	珩	A 2	
99	5	S 88	3	36	16	5	2.0	珩	A 2	
99	6	T 89	4	26	22	5	2.0	珩	A 2	
99	7	T 89	3	30	14	4	1.4	珩	A 2	
99	8	T 89	4	31	18	4	1.4	珩	A 2	
99	9	S 89	4	24	13	4	1.0	珩	A 2	
99	10	T 89	4	33	19	5	2.2	珩	A 2	
99	11	T 89	4	31	13	3	1.2	珩	A 3	
99	12	S 89	4	91	29	9	19.3	珩	B	
99	13	T 88	3	42	26	12	9.2	珩	C	
99	14	S 89	3	70	25	8	12.8	珩	C	
99	15	S 89	4	39	28	11	7.7	珩	C	
99	16	T 89	3	43	33	11	10.5	珩	C	
99	17	S 89	4	39	29	9	6.3	珩	C	
99	18	T 90	4	36	45	11	10.1	珩	C	
99	19	S 89	4	66	34	11	17.7	珩	C	
99	20	S 88	3	68	36	7	18.1	珩	D 1a	
99	21	T 88	3	72	26	13	18.3	珩	D 1a	
99	22	T 88	3	74	35	11	22.7	珩	D 1a	
99	23	T 90	4	66	26	9	15.3	珩	D 1a	
99	24	S 89	4	65	28	12	14.9	珩	D 1a	
99	25	T 88	4	71	38	9	23.3	珩	D 1a	
99	26	T 90	3	79	29	11	18.7	珩	D 1a	
99	27	T 89	4	69	21	7	12.0	珩	D 1a	
99	28	U 85・86 纏土		84	27	11	27.4	珩	D 1a	
99	29	T 90	3	67	21	7	9.6	珩	D 1a	
99	30	T 89	3	68	25	10	14.5	珩	D 1a	
99	31	S 89	4	69	24	9	17.8	珩	D 1a	

番号	年度	出土地点	層位	最大計測値			重量 g)	石質	分類 記号	備 考
				長さ mm)	幅 mm)	厚さ mm)				
99 32	T 90	4	(63)	(24)	8	10 3	珪	D 1a		
99 33	T 89	4	62	23	7	10 4	#	D 1a		
99 34	S 89	3	87	25	9	18 8	#	D 1a		
99 35	T 88	4	84	24	8	14 4	#	D 1a		
99 36	T 88	3	66	24	6	8 8	#	D 1a		
99 37	T 90	3	69	27	8	13 2	#	D 1a		
99 38	S 89	4	65	30	9	15 4	#	D 1a		
99 39	T 90	4	(67)	(33)	9	20 0	#	D 1a		
99 40	T 88	3	77	34	9	16 9	#	D 1a		
99 41	T 88	3	(55)	(24)	9	10 1	#	D 1a		
99 42	T 88	3	47	25	6	6 0	#	D 1a		
99 43	T 89	4	74	39	9	21 0	#	D 1b		
99 44	U 89	4	84	31	7		#	D 1b		
99 45	T 89	4	97	28	8	19 4	#	D 1b		
99 46	T 88	4	66	41	8	14 8	#	D 1b		
99 47	T 90	4	67	39	10	17 9	#	D 1b		
99 48	T 88	3	73	35	8	19 3	#	D 1b		
99 49	T 90	3	78	33	9	13 8	#	D 1b		
99 50	U 87	盛土	64	31	6	14 7	#	D 1b		
99 51	T 89	4	(63)	(36)	7	13 6	#	D 1b		
99 52	T 89	3	57	35	7	11 4	#	D 1b		
99 53	S 89	3	53	29	10	12 2	#	D 1b		
99 54	T 89	4	(26)	(38)	5	5 7	#	D 1b		
99 55	T 90	3	77	44	11	14 4	#	D 1b		
99 56	T 90	4	47	27	5	3 2	#	D 1b		
99 57	S 89	3	46	46	7	13 2	#	D 1b		
99 58	T 90	3	61	52	7	18 8	#	D 1b		
99 59	T 89	4	69	60	17	31 9	#	D 1b		
99 60	T 89	3	95	52	19	30 6	#	D 1b		
99 61	T 90	3	86	31	12	14 7	#	D 1b		
99 62	S 89	4	75	40	10	26 5	#	D 1c		
99 63	S 89	4	75	30	9	18 0	#	D 1c		
99 64	T 88	3	66	32	9	16 5	#	D 1c		
99 65	T 89	盛土	76	39	8	16 4	#	D 1c		
99 66	T 89	4	53	53	9	10 7	#	D 1c		
99 67	S 88	3	75	28	9	15 1	#	D 1c		
99 68	T 89	4	80	23	8	8 9	#	D 1d		
99 69	T 88	3	59	25	6	7 9	#	D 1d		
99 70	T 90	4	26	17	4	1 5	#	D 1d		
99 71	S 89	4	54	37	11	10 6	#	D 1d		
99 72	T 89	4	49	34	9	11 1	#	D 1d		
99 73	S 89	4	72	40	10	25 2	#	D 1e		
99 74	T 89	4	81	50	9	35 3	#	D 1e		
99 75	T 88	3	66	47	12	25 6	#	D 1e		
99 76	T 89	4	48	42	7	14 1	#	D 1e		
99 77	T 88	盛土	(47)	(17)	6	3 6	#	D 1f		
99 78	T 88	3	70	29	5	11 6	#	D 1f		
99 79	U 89	4	67	31	8	16 7	#	D 1f		
99 80	S 89	3	68	45	7	16 5	#	D 1f		
99 81	T 89	4	71	49	8	21 8	#	D 1f		
99 82	T 88	3	50	28	5	6 7	#	D 1f		
99 83	T 89	4	64	34	9	13 9	#	D 1f		
99 84	U 87		51	41	8	15 4	#	D 1f		
99 85	S 89	4	38	20	7	4 6	#	D 1g		
99 86	T 88	3	(32)	(22)	7	4 2	#	D 1g		
99 87	U 87	盛土	(28)	(18)	5	2 4	#	D 1g		

番号	年度	出土地点	層位	最大計測値			重量 (g)	石質	分類 記号	備 考
				長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)				
99 88	T 88	3	34	25	10	5 7	珪	D 1g		
99 89	S 89	3	52	25	8	7 8	#	D 1g		
99 90	T 88	3	35	29	6	6 2	#	D 1g		
99 91	T 90	3	55	36	6	7 7	#	D 1g		
99 92	T 88	3	33	43	7	10 1	#	D 1g		
99 93	T 89	盛土	(47)	(38)	9	10 3	#	D 1g		
99 94	T 89	4	63	38	10	12 2	#	D 1g		
99 95	S 89	4	44	60	9	26 4	#	D 2		
99 96	S 88	3	38	44	8	11 5	#	D 2		
99 97	T 89	4	49	75	8	25 9	#	D 2		
99 98	S 89	3	30	40	8	6 3	#	D 2		
99 99	T 88	3	57	23	8	13 0	#	E 1		
99 100	S 89	4	(53)	(20)	9	11 9	#	E 1		
99 101	T 89	4	64	24	10	14 4	#	E 1		
99 102	T 89	4	89	34	25	63 3	#	E 1		
99 103	T 89	4	120	50	16	67 2	#	E 2		
99 104	T 89	4	84	39	12	38 2	#	E 2		
99 105	T 89	4	73	38	16	41 5	石	E 2		
99 106	T 89	3	97	28	11	22 2	珪	F		
99 107	S 89	4	100	49	16	41 9	#	F		
99 108	T 90	3	63	19	7	7 7	#	F		
99 109	T 89	4	71	44	18	43 9	石	F		
99 110	S 89	4	49	29	11	10 7	珪	F		
99 111	T 90	4	41	46	17	15 2	#	F		
99 112	T 90	3	76	44	22	56 4	#	F		
99 113	S 89	4	66	44	11	21 1	#	F		
99 114	U 89	4	42	53	15	21 1	#	F		
99 115	T 90	4	45	43	12	11 8	#	F		
99 116	T 90	3	53	64	16	41 9	#	F		
99 117	S 89	4	53	54	9	28 5	#	F		
99 118	T 90	4	98	53	19	82 0	#	F		
99 119	T 90	4	61	51	23	51 8	#	F		
99 120	S 89	4	40	37	9	10 7	#	F		
99 121	S 89	4	56	36	7	10 7	#	F		
99 122	S 89	4	73	48	13	30 9	#	F		
99 123	T 90	4	45	67	11	31 8	#	F		
99 124	T 89	4	81	46	33	94 7	#	F		
99 125	T 90	3	60	26	11	10 4	#	F		
99 126	T 88	3	35	21	8	3 9	#	F		
99 127	T 88	3	120	39	23	52 1	#	F		
99 128	T 88	4	(67)	(49)	9	27 1	#	F		
99 129	S 89	4	(51)	(24)	6	8 4	#	F		
99 130	T 89	3	(45)	79	(7)	22 1	#	F		
99 131	T 89	4	27	59	12	14 6	#	F		
99 132	T 89	3	45	41	10	7 6	#	F		
99 133	T 90	4	33	77	10	21 1	#	F		
99 134	T 89	3	56	38	10	20 0	#	F		
99 135	T 88	3	47	25	(10)	9 1	#	F		
99 136	T 89	4	67	34	8	17 8	#	F		
99 137	T 88	3	64	25	12	17 3	#	F		
99 138	T 90	3	(63)	(30)	8	14 8	#	F		
99 139	S 89	4	58	34	9	11 5	#	F		
99 140	T 90	4	44	28	11	8 4	#	F		
99 141	T 90	4	61	34	17	21 3	#	F		
99 142	S 89	4	63	44	18	28 9	#	F		
99 143	T 90	3	67	31	8	14 3	#	F		

番号	年度	出土地点	層位	最大計測値			重量 (g)	石質	分類 記号	備 考
				長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)				
99 144	T 89	4	68	42	12	20 3	珪	F		
99 145	T 89	4	78	44	19	40 2	＃	F		
99 146	T 90	4	82	40	19	29 3	＃	F		
99 147	T 90	4	61	52	14	34 5	＃	F		
99 148	T 90	4	57	44	10	15 7	＃	F		
99 149	S 88	3	(73)	(44)	28	148 9	輝	G		
99 150	T 89	4	(68)	(22)	12	31 4	泥	G		
99 151	T 89	4	(82)	(79)	20	145 5	安	H		
99 152	T 89	4	71	(112)	(20)	189 8	凝	H		
99 153	T 89	4	50	80	18	88 9	＃	H		
99 154	S 89	4	95	120	35	418 6	＃	IIb		
99 155	T 89	4	138	74	40	496 7	＃	I2		
99 156	T 90	4	99	78	31	266 9	＃	I2		
99 157	T 89	4	131	58	45	522 1	変	I3		
99 158	T 89	4	163	50	25	230 2	石	I3		

第 8表 第 1号遺物集中ブロック出土土製品観察表

番号	年度	グリッド	層位	器種	文様 外面	内面 調整	焼成	備 考
2	99	T 8 9		ミニチュア土器	無文	ナデ	堅緻	
3	99	T 8 9		ミニチュア土器	無文	ナデ	堅緻	
4	99	T 8 9		ミニチュア土器	無文	ナデ	堅緻	

第 9表 第 1号遺物集中ブロック出土石製品観察表

番号	年度	出土地点	層位	最大計測値			重量 (g)	石質	分類 記号	備 考
				長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)				
99 201	T 90	一括	49	30	25	35 9		石製品	擦痕が顕著に認められる	

第 3 節 C 地区の調査

C 地区はグリッドライン 125～139の遺跡範囲内における丘陵地部分にあたり、標高は 22～24m である。本地区においては現地表面から 1～3m 以上の深さまで砕石や廃材が埋められていたことから、重機によってこれらを除去した結果、かろうじてわずかな土層の残存が確認できた。地形的にみると、南側から北側に向かって緩やかに下る、緩傾斜の平坦な地形である。

検出した遺構は、フラスコ状土坑 1 基、溝状ピット 1 基であり、これらは基本層序第 1 層からの検出である。遺物についてはこれらの遺構内及び遺構外において縄文時代中期～後期の土器が 4 個体、石器が 1 点出土している。遺構外の遺物は基本層序第 1 層からの出土である。

1. 検出遺構と出土遺物

1) 土坑・溝状ピット

SK - 03(第 6 図)

位置 G - 135グリッドに位置しており、基本層序第 1 層上面において確認した。

重複 なし。

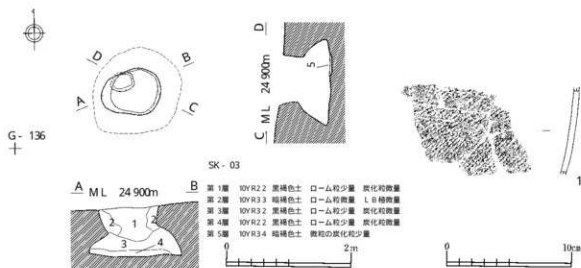
平面形・規模 開口部は楕円形を呈し長軸 96 短軸 74m を測り、底部は楕円形を呈し長軸 156 短軸 140m を測る。確認面から底面までの深さは 78m である。

断面形・壁 頸部がやや幅広い袋状を呈する。基本層序第 1 層を壁面としており、堅緻である。

底面 基本層序第 1 層を掘り込んで底面としている。底面の北側に長軸 41 短軸 32 深さ 5cm の平面楕円形を呈する落ち込みが存在する。

堆積土 4 層に分層した。壁付近にローム粒・ロームブロックを混入する暗褐色土、それ以外の部分はローム粒・炭化物を混入する黒褐色を主体とする土層が堆積している。

出土遺物 覆土及び底面から第 1 群土器が破片で出土した。外面の文様は LR が回転施文され、内面はナデにより調整されている。



第 6 図 SK - 03・SK - 03出土遺物

SK - 04(第64図)

位置 H・I - 135グリッドに位置しており、基本層序第 層上面において確認した。

重複 なし。

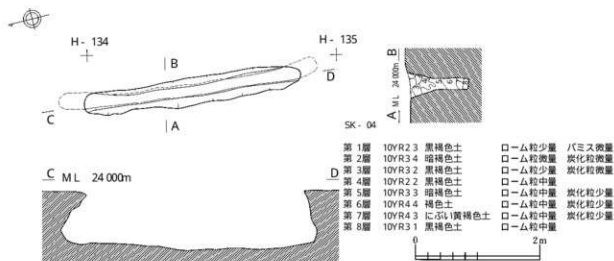
平面形・規模 溝状を呈し、開口部は長軸348 短軸48mを測り、底部は長軸416 短軸20mを測る。確認面から底面までの深さは93mである。

断面形・壁 長軸方向の壁は内傾して立ち上がり、短軸方向の壁はほぼ垂直であるが開口部付近で外傾して立ち上がる。基本層序第 層を壁面としており、やや脆い。

底面 基本層序第 層を掘り込んで底面としている。壁に比べて堅緻である。

堆積土 8層に分層した。ローム粒・炭化物を混入する黒褐色・暗褐色を主体とする土層が堆積している。

出土遺物 出土しなかった。



第64図 SK - 04

2) 遺構外出土遺物

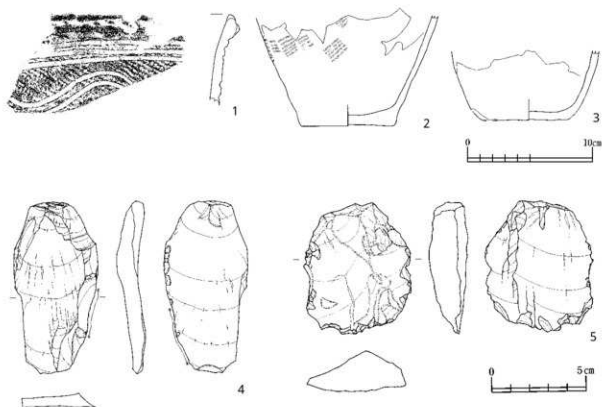
1. 土器(第65図 1~3)

第 群土器 縄文時代中期後半~後期初頭の土器

3個体分が出土した。第65図 1は口縁部の資料である。口縁はやや外反し、外面の文様はRLを回転施文した後、直線状ないし波状の沈線が施されている。口唇部はRL縄文を斜位に押し出した上に、その両端に2条の粘土紐を貼り付けた後、ナデ・ミガキが丁寧に施されている。内面にもミガキが施されている。第65図 2・3は胴部~底部の資料である。2はRが回転施文され、3は無文である。

2. 石器(第65図 4・5)

不定形石器が2点出土した。4は縦長で背面右側縁に微細な剥離がみられる。5は平面円形を呈し、弧状を呈する縁辺に刃部調整が施されている。



第 6 図 C 地区遺構外出土遺物

第 10 表 SK - 03 出土土器観察表

番号	年度	グリッド	層位	器種	部位	文 様	内面調整	焼成	分類	備 考
1	99	SK - 03	底面	深鉢	胴部	LR回転		ナデミガキ 堅緻	▽	

第 11 表 C 地区遺構外出土土器観察表

番号	年度	グリッド	層位	遺跡名	器種	部位	文 様	内面調整	焼成	分類	備 考
1	99	I - 134	-	22	深鉢	口縁	粘土紐貼付・沈線・RL	ナデ	堅緻	▽	
2	99	H - 135	-	K 1	深鉢	胴-底部	L	ナデミガキ	堅緻	▽	
3	99	H - 135	-	K 2	深鉢	胴-底部	なし	ナデ	堅緻	▽	

第 12 表 C 地区遺構外出土土器観察表

番号	年度	出土地点	層位	最大計測値			重量 (g)	石質	分類	備 考
				長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)				
1	99	E - 135	-	91	44	18	50.1		F	
2	99	E - 135	-	69	57	21	79.5		F	

第 章 自然科学的分析

大矢沢野田(1)遺跡の古環境について

バリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

大矢沢野田(1)遺跡(青森市大矢沢字野田所在)は、青森平野と後背に広がる丘陵地との境界付近に位置する縄文時代前期初頭～後期の遺跡である。遺跡は平野部から丘陵部にかけて広がるが、今回分析調査を実施するのは平野部である。平野部には縄文時代前期初頭の遺構や遺物が検出されているが、その上位には泥炭層が厚く堆積している。このような層相より、当初平野部にて生活が営まれていたが、その後低地部が湿地化したため、生活の中心が丘陵部へと移ったものと考えられる。そこで今回は、低地部での環境変遷をとらえるために、珪藻分析、花粉分析、植物珪酸体分析、種実同定、樹種同定を行う。

1. 試料

試料は、低地部(トレンチ2東壁)で採取された5点である。層は腐植を含む砂質シルト、層は分解が進んだ泥炭質シルトである。これらは縄文時代前期初頭の遺物を包含し、層が遺構掘り込み面になっている。層～層は無遺物の泥炭層質シルト層で、ヨシの地下茎を多量に含むが、下位ほど分解が進んでいる。これら5試料に関して、珪藻分析、花粉分析、植物珪酸体分析、種実同定を行う。なお、種実の分類・同定過程で木材を検出し樹種同定を行う予定であったが、同定可能な木材が検出されなかったため、分析を行わなかった。

2. 分析方法

(1) 珪藻分析

試料を湿重で7g前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法の順に物理化学処理を施して、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、ブリュワックスで封入して、永久プレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1000倍で行い、メカニカルステージで任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に200個体以上同定・計数する。種の同定は、Krammer K Lange Bertalot H(1986 1988 1991a 1991b)、Krammer K(1992)、Reichardt E(1995)、Lange Bertalot H Metzeltin D(1996)、Lange Bertalot H et al(1996)、Metzeltin D Wikowski A(1996)などを用いる。

同定結果は、汽水生種、淡水～汽水生種、淡水生種順に並べ、その中の各種類はアルファベット順に並べた一覧表で示す。なお、淡水生種についてはさらに細かく生態区分し、塩分・水素イオン濃度(pH)・流水に対する適応能についても示す。また、環境指標種についてはその内容を示す。そして、産出個体数200個体以上の試料については、産出率3%以上の主要な種類について、主要珪藻化石群集の分布図を作成する。また、産出した化石が現地性の化石か異地性の化石か判断する目安として完形殻の出現率を求める。堆積環境の解析にあたっては、淡水生種については安藤(1990)、陸生珪藻については伊藤・堀内(1991)、汚濁耐性については、Asai K Watanabe T(1995)の環境指標種を参考とする。

(2) 花粉分析

試料を湿重で約 10g 秤量し、水酸化カリウム処理、篩別、重液分離（臭化亜鉛、比重 2.3）、フッ化水素酸処理、アセトリシス処理（無水酢酸：濃硫酸 = 9 : 1）の順に物理・化学的な処理を施して花粉・胞子化石を分離・濃集する。処理後の残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製した後、光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数を行う。

(3) 植物珪酸体分析

試料を湿重約 5g 秤量し、過酸化水素水・塩酸処理、超音波処理（70W, 250KHz 1分間）、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム、比重 2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これを検鏡し易い濃度に希釈して、カバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、ブリュウラックスで封入し、プレパラートを作製する。これを 400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、近藤・佐瀬（1986）の分類に基づいて同定・計数する。

結果は、検出される種類とその個数の一覧表と植物珪酸体群集の変遷図で表示する。各種類の出現率は、短細胞珪酸体・機動細胞珪酸体とも珪酸体毎に、それぞれの総数を基数とする百分率で求める。

(4) 種実同定

土壌試料約 150g を瓶に入れ、数%の水酸化ナトリウム水溶液に浸して放置し、試料を泥化させる。0.5mmの篩を通して水洗させたあと、残渣を集める。双眼実体顕微鏡で観察し、その中から同定可能な種実遺体を抽出・同定する。

3. 結 果

(1) 珪藻分析

結果を表 1・図 1に示す。珪藻化石は 層・ 層を除いて 100個体以上産出する。産出種は淡水生種が優占する。産出分類群数は 20属 6種、完形種の産出率は約 50~69%である。以下、珪藻化石群集の特徴を、下位から述べる。

・ 層

珪藻化石の産出数が 2個体と少ないが、陸生珪藻 A 群の *Navicula mutica* が 10個体産出する。陸生珪藻とは、多少の湿り気のある乾いた環境に生育する珪藻であり、中でも、乾燥に耐性のある種が A 群とされる。

・ 層

全体の約 70%を、陸生珪藻が占めることが特徴である。中でも、陸生珪藻 A 群の *Hantzschia amphioxys* が約 40%産出する。流水不定性種（止水域にも流水域にも普通に出現する種）・沼沢湿地付着性種の *Navicula elginensis* が約 20%産出する。沼沢湿地付着性種とは、沼よりも浅く水深が 1m前後で、一面に水生植物が繁茂するような沼沢や、さらに水深の浅い湿地に生育する種とされる。

・ 層

全体的には、真塩不定性種（少量の塩分があってもこれによく耐えることができる種）・流水不定性種（止水域にも流水域にも普通に出現する種）が多産する。また、好+真酸性種（酸性水域に生育する種）と pH不定性種（pH7付近の中性水域で最もよく生育する種）が、それぞれ約 35~40%を占める。中でも、流水不定性種・沼沢湿地付着性種の *Pinnularia viridis* が約 30%産出する。その他は流水不定性

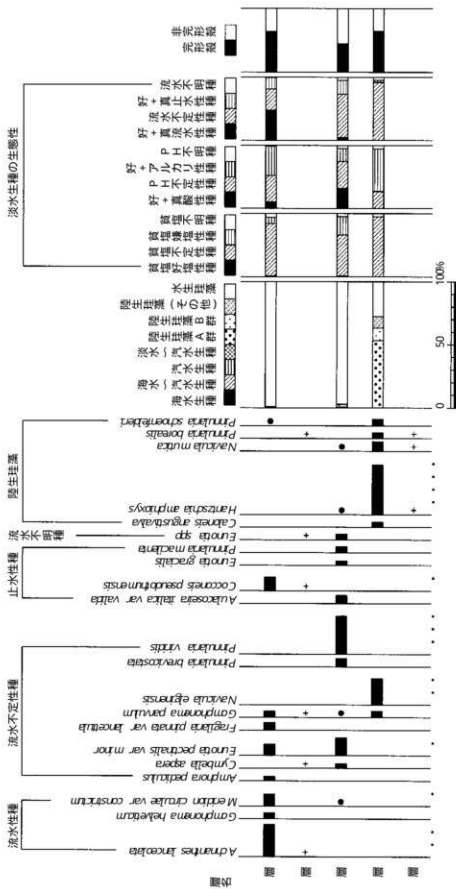


図1 主要な珪化石群の割合分布
 淡水性種抽出率・珪藻抽出率・完形殻抽出率は全体数、淡水性種の生物性の比率は淡水性種の合計を基として百分率で算出した。
 いずれも100個体以上抽出された試料について示す。なお、*は3%未満、+は100個体未満の試料について抽出した種類を示す。

表 1 硅藻分析結果

種 類	生態性			環境指標種	層 層 層 層 層
	塩分	pH	流水		
Rhopalodia gibberula Ehr. O Müller	Ogh Mdh	al.ii	ind		1 1 2
Adiantum clavatum Grunow	Ogh ind	al.ii	lph	Y	4
Adiantum lanceolatum Bireb Grunow	Ogh ind	ind	rph	K T	52 1
Adiantum rossii Oestrup	Ogh ind	al.ii	rph	U	1
Adiantum subfrutescens Hustedt	Ogh ind	ind	rph		1
Amphora petiolulus Kuetz Grunow	Ogh ind	al.ii	ind	T	7
Aulacoseira italica var. valida Grun. Simonson	Ogh ind	al.ii	lph		7
Caloneis angustivalva Pettit	Ogh unk	unk	unk	RI	
Caloneis lapponica Kammerer Lange Bertalot	Ogh ind	ind	ind	RB	8 6
Caloneis arcus var. necta Cl. Kraske	Ogh ind	ind	r.bl.	T	3
Coconeis plicentula Ehr. Clave	Ogh ind	al.ii	ind	U	4 1 1
Coconeis plicentula var. lineata Ehr. Clave	Ogh ind	al.ii	rph	T	1
Coconeis pseudofumens Reichardt	Ogh ind	al.ii	lph		22 2
Cymbella aspera Ehr. Clave	Ogh ind	al.ii	ind	O T	8 4
Cymbella cuspata Kuetzing	Ogh ind	ind	ind		1
Cymbella striata Gregory	Ogh ind	ind	rph	K T	4
Diatom aliyemab var. mesodon Ehr. K. Itzhner	Ogh ind	al.ii	r.bl.	K T	3
Diatom elliptica Kuetz. Clave	Ogh ind	al.ii	lph	RA T	1
Eunotia arcus Ehrenberg	Ogh hob	ac.ii	lph		1
Eunotia gracialis M. ester	Ogh hob	ind	l.bl.		2 4 4
Eunotia implicata Noepel Lange Bertalot	Ogh hob	ac.ii	ind	O	18 15
Eunotia pectinula var. minor Kuetz. Rabenhorst	Ogh hob	ac.ii	ind		3
Eunotia pectinata Ehrenberg	Ogh hob	ac.ii	lph	RB O T	1
Eunotia spp.	Ogh unk	unk	unk		2 5
Fragilaria costans var. veneta Ehr. Hustedt	Ogh ind	al.ii	lph	S	2 2
Fragilaria pinnata Ehrenberg	Ogh ind	al.ii	lph	S	3
Fragilaria pinnata var. lanceolata Schum. Hustedt	Ogh ind	al.ii	ind	S	12
Fragilaria ulna N. Jozsi Lange Bertalot	Ogh ind	al.ii	ind		1
Fragilaria vaucheriae Kuetz. Petersen	Ogh ind	al.ii	rph	K T	1
Gomphonema acuminatum Ehrenberg	Ogh ind	ind	lph	O	5 1 1
Gomphonema angustum Kuetz. Rabenhorst	Ogh hob	ac.ii	ind	U	2
Gomphonema angustum A. Gresh	Ogh ind	al.ii	ind	U	1
Gomphonema clavatum Ehrenberg	Ogh ind	al.ii	ind	1	1
Gomphonema gracile Ehrenberg	Ogh ind	al.ii	lph	O U	1 1 1
Gomphonema helicticum Brun	Ogh unk	ind	rph	T	10
Gomphonema implexum Kuetzing	Ogh ind	al.ii	ind		1
Gomphonema obtusum Lyngb. Kuetzing	Ogh ind	al.ii	ind	U	3
Gomphonema parvulum Kuetzing	Ogh ind	ind	ind	U	10 1 2 10
Gomphonema pulchrum Grun. Reichardt Lange Bertalot	Ogh ind	al.ii	ind	U	6
Gomphonema subabundans Fracke	Ogh ind	al.ii	ind	J	1
Gomphonema spp.	Ogh unk	unk	unk	1	1 1
Hantzschia amphioxys Ehr. Grunow	Ogh ind	al.ii	ind	RA U	1 79 4
Medionella circulae var. constrictum Raife V. Heurck	Ogh ind	al.ii	r.bl.	K T	19 3
Navicula elgheensis Greg. Raife	Ogh ind	al.ii	ind	O U	1
Navicula elgheensis var. neglecta Kras. Patrick	Ogh ind	al.ii	rph		42
Navicula ignota Kraske	Ogh ind	ind	ind	RB	0 1 5
Navicula ignota var. palustris Hest. Lund	Ogh ind	ind	ind	RB	1
Navicula mollensis var. minor Patrick	Ogh ind	al.ii	ind		1
Navicula murica Kuetzing	Ogh ind	al.ii	ind	RA S	1 15 10
Navicula saxophila Bock	Ogh ind	ind	ind	RB	1
Navicula seminulum Grunow	Ogh ind	ind	ind	RB S	1 1 1
Navicula spp.	Ogh unk	unk	unk		1
Nedidium indus Ehr. Clave	Ogh hob	ac.ii	l.bl.	O	1 1
Pinularia borealis Ehrenberg	Ogh ind	ind	ind	RA	2 9 3
Pinularia borealis var. scalaris Ehr. Rabenhorst	Ogh ind	ind	ind	RA	3 1
Pinularia brevicostata Clave	Ogh ind	ac.ii	ind		7
Pinularia acuminata Ehr. Clave	Ogh hob	ac.ii	lph		5
Pinularia adonunk Kraske	Ogh hob	ac.ii	ind	RA	2 2
Pinularia schenfelderii Kammerer	Ogh ind	ind	ind	RI	1 10 1
Pinularia strobilata Hustedt	Ogh ind	ind	ind		1
Pinularia submarginata Hustedt	Ogh hob	ac.ii	lph		1
Pinularia viridis Nitz. Ehrenberg	Ogh ind	ind	ind	O	32 1
Pinularia spp.	Ogh unk	unk	unk		1
Rhizosolenia abbreviata Ag. Lange B	Ogh hul	al.ii	rph	K T	3
Stauroneis oblonga Lagerstedt	Ogh ind	ind	ind	RB	6
Stauroneis phoenicenteron Nitz. Ehrenberg	Ogh ind	ind	lph	O	2
Stauroneis phoenicenteron var. signata M. ester	Ogh ind	ind	ind		3
海水生種合計					0 0 0 0 0
海水—汽水生種合計					0 0 0 0 0
汽水生種合計					0 0 0 0 0
淡水—汽水生種合計					0 1 1 0 2
淡水生種合計					205 22 106 202 19
陸生化石種合計					205 23 107 202 21

凡例

H R : 塩分濃度に対する適応性

pH : 水素イオン濃度に対する適応性

C R : 流水に対する適応性

Ogh Mdh : 淡水 汽水生種

al.bl. : 真アルカリ性種

l.bl. : 真止水性種

Ogh hul : 貧塩好塩性種

al.ii : 好アルカリ性種

lph : 好止水性種

Ogh ind : 貧塩不定性種

ind : pH不定性種

ind : 流水不定性種

Ogh hob : 貧塩嫌塩性種

ac.ii : 好酸中性種

rph : 好流水性種

Ogh unk : 貧塩不明種

unk : pH不明種

r.bl. : 真流水性種

unk : 流水不明種

環境指標種群

J : 上流性河川指標種, K : 中—下流性河川指標種, O : 沼沢湿地付着生種 (以上は安藤, 1990)

S : 好汚濁性種, U : 広域適応性種, T : 好清水性種 (以上は Asa. K. Watanabe T. 1986)

R : 陸生陸藻 (RA : A群, RB : B群, R群, I群, 伊藤・堀内, 1991)

種・沼沢湿地付着性種の *Eunotia pectinalis* var *minor* が約 19% 産出し、*Eunotia gracilis*、*Pinnularia macilenta* などの止水性種も若干産出する。

・ 層

珪藻化石の産出数が 23 個体と少ないが、流水不定性種・沼沢湿地付着性種の *Cymbella aspera* が 8 個体産出する。

・ 層

全体的には、貧塩不定性種・好+真流水性種（流水域で生育する種）が多産する。また、pH 不定性種・好+真アルカリ性種（アルカリ性水域で生育する種）が、それぞれ約 40～50% を占める。中でも、好流水性種の *Achnanthes lanceolata* が約 29% 産出する。その他に、流水不定性種・沼沢湿地付着性種の *Eunotia pectinalis* var *minor*、好止水性種の *Cocconeis pseudobuthumensis* などが約 10% 産出する。

(2) 花粉分析

結果を表 2・図 2 に示す。層、層は、花粉化石がほとんど検出されず、わずかにみられる花粉化石も保存状態が悪い。層一層は花粉化石が多く検出されるが、木本花粉の割合が高くなっている。木本花粉ではハンノキ属、ブナ属、コナラ亜属が多産するが、ハンノキ属は上位で減少する。その他、クルミ属、クリ属、トチノキ属、トネリコ属などを伴う。草本花粉は、産出する割合が低いが、イネ科が多くみられ、コウホネ属、ミツガシワ属などの水生植物も若干みられる。

(3) 植物珪酸体分析

結果を表 3、図 3 に示す。各試料からは植物珪酸体が検出され、保存状態は比較的良好である。

層ではクマザサ属を含むタケ亜科の産出が目立ち、ヨシ属やススキ属などが認められる。層や層、層ではタケ亜科が減少し、ヨシ属の産出が目立つ。層では再びタケ亜科の産出が目立ち、ヨシ属やススキ属などが認められる。

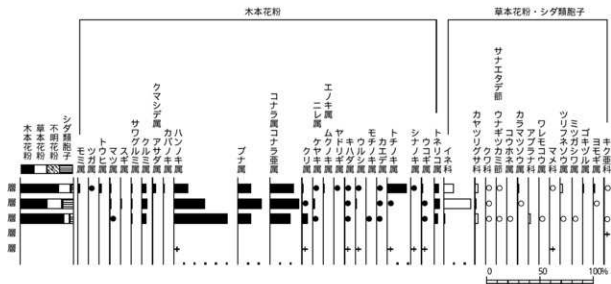


図 2 花粉化石群集の層位分布

出現率は、木本花粉は木本花粉化石総数、草本花粉・シダ類孢子は総数より不明花粉を除く数を基数として百分率で算出した。なお、○は 1% 未満、+ は木本花粉 100 個体未満の試料について検出した種類を示す。

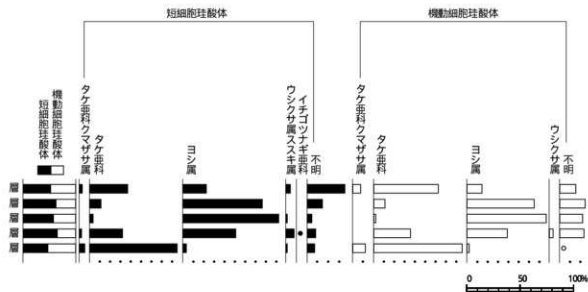


図 3 植物珪酸体群集の層位分布

出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数を基数として百分率で算出した。

なお、は 1%未満の種類を示す。

(4) 種実同定

結果を表 4 に示す。層、層からは、種実遺体がほとんどみられず、主に層～層で検出される。木本類はほとんどみられず、大部分が草本類である。以下に、検出された種類の形態的特徴を示す。

・キハダ (*Phellodendron amurense* Ruprecht) ミカン科キハダ属

核が検出された。黒褐色。大きさは 5 mm 程度。半円形。表面には細かい亀甲状の浅い網目模様が見られる。表面は薄くて堅く、やや光沢がある。

・タラノキ (*Aralia elata* Miq. Seemann) ウコギ科

核が検出された。茶褐色で側面観は半円形、上面観は卵形。長さ 2 mm 程度。核はやや厚く硬い。核の表面には、不規則な瘤状突起がある。

・ヒルムシロ属 (*Potamogeton*) ヒルムシロ科

果実が検出された。褐色、広卵形で、大きさ 4 mm 程度。背面の皮ははずれやすい。表面は暑くてやや堅く、ざらつく。

・スゲ属 (*Carex*) カヤツリグサ科

果実が検出された。大きさは 2 mm 程度。褐色で 3 稜がある。先端部は急に細くなる。表面は薄くて柔らかく、弾力がある。

・ホタルイ属 (*Scipus*) カヤツリグサ科

果実が検出された。黒色。堅く光沢がある。大きさは 2 mm 程度。偏平で背面が高く稜になっている。腹面は平らである。片凸レンズ状の広倒卵形。先端部はとがり、基部はせばまって「へそ」がある。表面には細かい凹凸があり、横軸方向に平行な横しわがあるように見える。数本の針状の花被がみられ、先端には逆刺がある。

・タデ属 (*Polygonum*) タデ科

果実が検出された。大きさは 2 mm 程度。3 稜形で表面は薄くて堅く、ざらつく。

・アカザ科 (Chenopodiaceae)

種子が検出された。黒色。側面観は円形で、上面観は凸レンズ形を呈している。大きさは 1 mm程度。側面に「へそ」がある。表面は、細胞が亀甲状に配列している構造がみられる。

・タガラシ (Ranunculus sceleratus L. キンボウゲ科キンボウゲ属)

種子が検出された。円盤状で、直径は 1 mm程度。周辺部は白色で厚く、中央部が黄色でやや凹む。表面はざらつく。

・オトギリソウ属 (Hypericum) オトギリソウ科

種子が検出された。長楕円形で大きさは 1 mm程度。種皮は黒色で薄く、柔らかい。表面は亀甲状の様相がある。

・セリ科 (Umbelliferae)

果実が検出された。半球状で淡褐色。大きさは 2 mm程度。球面側では数本の縦方向に大きく裂けた溝があり、内部が露出している。果実が分離した面では、中央に縦軸方向に延びた紡錘形のくぼみがあり、内部が露出している。

・ミツガシワ (Menyanthes trifoliata L. リンドウ科ミツガシワ属)

種子が検出された。側面観はややつぶれた円形で、上面観は扁平である。褐色で、種皮は厚くて堅く、光沢がある。表皮には、細長い形状の細胞が全面を覆っている。

・キク科 (Compositae sp.)

果実が検出された。黒褐色。大きさは 2 mm程度。楕円錐形で、上面観はひし形。

4. 考 察

(1) 低地の水域環境と植生

層は珪藻化石の産出数が少ないことから、基本的には堆積環境の詳細が不明である。しかし、陸生珪藻A群の *Navicula mutica* が若干産出することや、層と同様に陸生珪藻が多産することから、層と層は比較的乾い

表2 花粉分析結果

種 類	試料番号	層	層	層	層	層
木本花粉						
モミ属	5					
ツガ属	1					
トウヒ属	6					
マツ属	3	3	1			
スギ属		3				
ヤナギ属				1		
ヤブコウジ属	3	3	3			
クルミ属	10	10	9			
クマシラギ属 - アサギ属	8					
ハシバミ属	3		1			
カバノキ属	4					
ハンノキ属	30	60	109			4
ブナ属	28	47	26			
ニナラ属コナラ属	30	56	42			
クリ属	3	2	12			6
ニレ属 - ケヤキ属	2	4	2			
エノキ属 - ムクノキ属	3					
ヤドリギ属	1					
キハダ属	2	1	1			3
ウルシ属	1	3	1			2
モミノキ属						
カエデ属	2	1	1			
トチノキ属	41	2				6
ブドウ属	1					
シナノキ属	1					1
ウコギ科	3	1	1			1
イボタノキ属	1	1	1			
トネリコ属	9	10	7			
草本花粉						
イネ科	27	100	4			
カヤツリグサ科	11	7	8			
クワ科	2	2	1			
サナエタゴ - ウナギシカニ目	1		1			
ツツク木属						
カウマツソウ属	4	1	1			
アブラナ科			5			
ウレモコウ属			1			
マメ科	1					1
ツリフネソウ属	6		1			
セリ科						1
ミツガシワ属			1			
ネオシロズク属	1					
ゴキツル属	4					
ヨモギ属	5	3				
オオモミ属	2					
キク属科	1		1	1		3
カンゾウ属科						
不明花粉	9	4	7	2		1
シダ類孢子						
シダ類孢子	9	81	12	5		
合 計						
木本花粉	221	206	218	0	23	
草本花粉	65	113	24	1	5	
不明花粉	9	4	7	2	1	
シダ類孢子	9	81	12	5	0	
総計(不明を除く)	295	400	254	6	28	

表3 植物細胞体分析結果

種 類	試料番号	層	層	層	層	層
イネ科葉部細胞体						
タケ草科マザサ属	5			5	10	
タケ草科	74	22	8	85	186	
ヨシ属	46	161	217	134	7	
ワシクサ属ススキ属	7			2	20	2
イチゴツバキ属科						
不明キク属	12	9	4	12	3	
不明ヒツシバ属	29	15	2	6	5	
不明ダンチク属	32	5	2	4	8	
イネ科葉部細胞体						
タケ草科マザサ属	15				31	
タケ草科	118	15	4	55	220	
ヨシ属	27	91	144	61	5	
ワシクサ属						
不明	29	34	40	35	1	
合 計						
イネ科葉部細胞体	204	232	235	267	221	
イネ科葉部細胞体	189	140	188	155	257	
総 計	393	352	423	422	478	

た環境であったと思われる。これらの層では、花粉化石と種実遺体の保存が悪い。地形的に考えると、河川堆積物が離水して微高地となり、これが縄文時代前期初頭の生活面として利用されたと考えられる。珪藻化石の結果から、当時の地表面は比較的乾燥していたと考えられるが、好気的情況下では花粉化石や種実遺体は風化を受けやすいことから、これらの層ではほとんど検出されなかったと考えられる。植物珪酸体分析結果をみると、層ではクマザサ属を含むタケ亜科が多産する。冷温帯植生におけるタケ亜科は、ブナ林などの林床に広く分布するほか、何らかの理由で森林の一部が失われた時、先駆的に侵入してササ群落を作るなど重要な意味をもつ。十和田火山周辺の風成層の植物珪酸体分析成果によれば、最終氷期が終わってから縄文時代にかけてタケ亜科由来の植物珪酸体が優占しており（細野ほか，1992；佐瀬ほか，1993）後背山地にはタケ類が広く分布していたことが推測される。おそらく、人為的に切り開かれた場所や、林縁部などにはササ類を中心とする草場が広がっていたものと推測される。層になると、タケ亜科に混じてヨシ属が多産するようになる。層は腐植が多くなるが、これはヨシ属が腐植の由来となっているものと考えられる。一方、層からは沼沢湿地付着性種の *Navicula elginensis* などの水生珪藻もみられ、湿地化したことが伺われる。生業の中心が低地部から丘陵部に移った原因として、低地部の湿地化が挙げられているが、これらの成果からみても、調和的といえる。

層と層はともに未分解の泥炭層である。層は水生珪藻が多産し、沼沢湿地性種の *Pinnularia viridis* が多産する。また、沼沢湿地性種の *Eunotia pectinatis* var. *minor* や止水性種が数種類産出することから、沼沢地的な環境であったと推定される。層は珪藻化石の産出数が少ないことから、基本的には堆積環境の詳細が不明である。しかし、流水不定性種・沼沢湿地付着性種の *Cymbella aspera* が若干産出することから、層と同様な環境が推測される。一方層と層の花粉化石群集では木本類が、種実では草本類が、植物珪酸体ではヨシ属がそれぞれ多産し、化石により組成が大きく異なる。これは、各化石が反映している植生が異なるためと考えられる。分析地点の局地的な植生をよく反映しているのは、種実と植物珪酸体である。種実の種類構成をみると、スゲ属、ホタルイ属、オトギリソウ属、ミツガシワなど水生植物ならびに水生植物を多く含む種類が多産する。植物珪酸体では、ヨシ属が多産するが、ヨシ属の地下茎は層と層中に多量にみられる。また、花粉化石でもコウホネ属とミツガシワ属の花粉化石がみられる。これらは、水深が数十センチ以下の浅い水域に生育することから、珪藻化石でも推測されているように、ヨシ属、スゲ属、ホタルイ属、オトギリソウ属、ミツガシワなどが生育する水深の浅い沼沢地であったことが伺われる。一方、花粉化石ではハンノキ属が多産するが、泥炭層中にはハンノキ属の球果や果実がみられない。また、種実同定の結果からは、木材はみられず木本類の種実もほとんどない。このことから、当時の周辺は草本類主体の植生で、花粉化石で多産するハンノキ属は、離れた場所（岸近くなどもっと水深が浅い場所）に生育していた可能性が高い。

表4 種実同定結果

	層	層	層	層	層
分析量	140g	120g	130g	141g	210g
木本類					
キハダ			1		
クランノキ				1	
草本類					
ヒルムシロ属			1		
スゲ属	8	88	4		
ホタルイ属		1	多		
タケ属	1	1	1		
アザミ科				2	
タガラシ		3	1		
オトギリソウ属	9	100	14		
セリ科	1	1	4		
ミツガシワ	2	18	47		
キク科		1			
不明	2	6	11	1	1
菌虫	破	破	破		
菌核				6	1

層では珪藻化石群集は流水性種が多産し、若干の止水性種を伴うことから、河川などの影響を受ける環境に変化したと推測される。ただし、ヨシ属の地下茎や植物珪酸体が多く含まれ、水生植物の種実もみられることから、基本的には 層や 層と同様沼沢地的な環境であったと推測される。しかし、水生植物の種実の数が減少している点、タケ亜科の植物珪酸体が増加している点、花粉化石ではハンノキ属が減少し、トチノキ属などが増加している点を考慮すれば、各化石が河岸縁辺部の植生も反映するようになってきたと考えられる。おそらく流水の影響を受けるようになったため、河岸や丘陵縁辺部などの化石も流れ込んで堆積するようになり、各植物化石群集が広範囲な植生を反映するようになったと推測される。

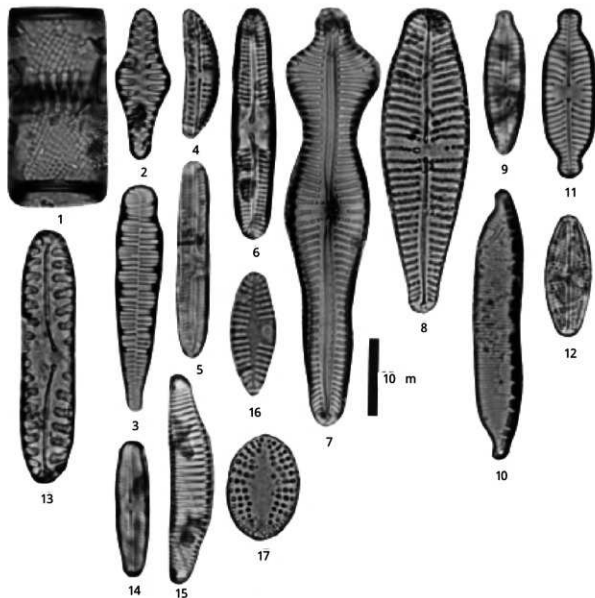
(2) 周辺の森林植生

検出された花粉化石のうち、ハンノキ属や草本類は、沼沢地内の植生を反映していると考えられる。これ以外で多産するブナ属、コナラ亜属、クリ属、トチノキ属、トネリコ属、クルミ属などは、後背山地の植生を反映していると考えられる。ブナ属をのぞけば、これらの大部分は低地との境界部分など林縁に生育すると考えられる。なお同様な種類が、小三内遺跡の下部層（縄文時代前期末とされている）で行われた木本質泥炭でも多産しており、低地には種類数の豊富な森林が作られ、その林床は比較的乾いていたことが推測されている（辻ほか、1994）。このことから、本遺跡周辺でも小三内遺跡と同様な景観をもつ低地林が近くに存在していたと考えられる。なお、ブナ属は山地深くに安定した森林を作る種類であることから、山地の植生を反映していると思われる。

引用文献

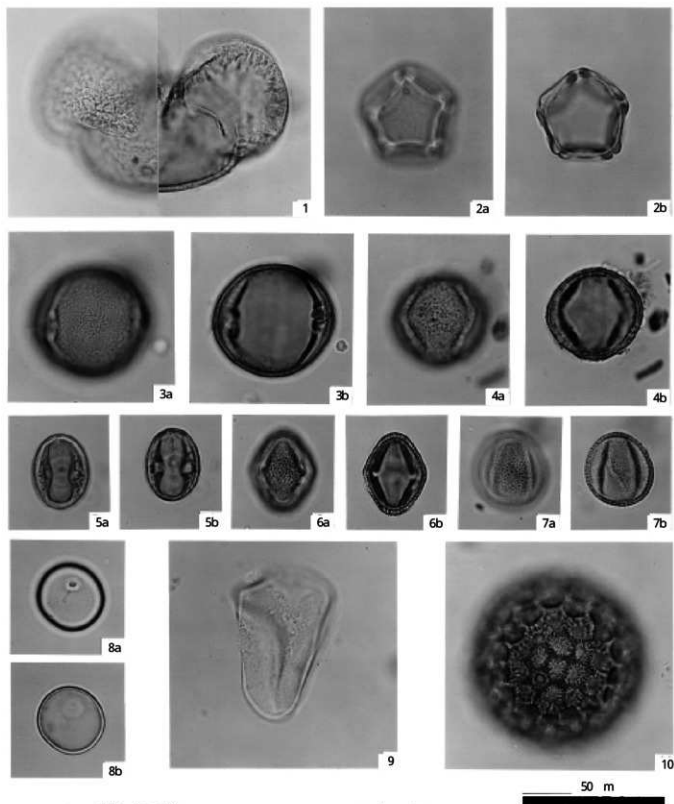
- 安藤一男（1990）淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用．東北地理，42，p 73 88.
- A sai K Watanabe T（1995）Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution(2) Saprophytic and saproxenous taxa. Diatom, 10, p 35 47.
- 細野 衛・佐瀬 隆・青木潔行（1992）示標テフラによる黒ボク土の生成開始時期の推定 - 十和田火山テフラ分布域場ノ台地区を例にして - ，地球科学，46，p 121 132.
- 伊藤良永・堀内誠示（1991）陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用．珪藻学会誌，6 p 23 45.
- 近藤鏡三・佐瀬 隆（1986）植物珪酸体分析，その特性と応用．第四紀研究，25，p 31 64.
- 小杉正人（1988）珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用．第四紀研究，27，p 1 20.
- Krammer K（1992）PINNULARIA, eine Monographie der europäischen Taxa. BBLIDTHECA DIATOMOLOGICA, BAND 26, p 1 353, BERLIN・STUTTGART.
- Krammer, K Lange Bertolt, H（1986）Bacillariophyceae, Teil 1, Naviculaeaceae. Band 2 1 von Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 876p, Gustav Fischer Verlag.
- Krammer, K Lange Bertolt, H（1988）Bacillariophyceae, Teil 2, Epithemiaeaceae, Bacillariaceae, Surirellaceae. Band 2 2 von Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 536p, Gustav Fischer Verlag.
- Krammer, K Lange Bertolt, H（1991a）Bacillariophyceae, Teil 3, Centrales, Fragilariaceae, Eunotiaceae. Band 2 3 von Die Suesswasserflora von Mitteleuropa,

- 230p, Gustav Fischer Verlag.
- Krammer, K Lange Bertolt, H (1991b) Bacillariophyceae, Teil 4, Achnantheaceae, Kritische Ergänzungen zu Navicula(Lineolatae) und Gomphonema. Band 2.4 von Die Süsswasserflora von Mitteleuropa, 248p, Gustav Fischer Verlag.
- Lange Bertolt, H, Kuebs, K, Lauser, T, Noerpel Schenpp, M. Willmann, M (1996) Dokumentation und Revision der von Georg Kraske beschriebenen Taxa. Iconographia Diatomologica 3, 358p, Koeltz Scientific Books
- Lange Bertolt, H. Metzeltin, D (1996) Oligotrophie Indikatoren 800 Taxa repräsentativ fuer drei diverse Seen Typen. Iconographia Diatomologica 2, 390p, Koeltz Scientific Books
- Metzeltin D Wikowski A (1996) Diatomeen der Baeren Insel, Süsswasser und marine Arten. Iconographia Diatomologica 4, 287p, Koeltz Scientific Books
- Reichardt E (1995) Die Diatomeen(Bacillariophyceae) in Ehrenbergs Material von Cayenne Guyana Gallica(1843). Iconographia Diatomologica 1, 107p, Koeltz Scientific Books
- 佐瀬 隆・細野 衛・青木潔行・木村 準(1993) 示標テフラによる黒ボク土の生成開始時期の推定と火山灰土壌生成に関する一考察 - 十和田火山テフラ分布域 川向・赤坂両地区を例にして -, 地球科学, 47, p391-408.
- 辻 誠一郎・植田弥生・南木睦彦(1994) 小三内遺跡低地域の古環境, 「青森市埋蔵文化財調査報告書 第 22集 小三内遺跡発掘調査報告書」, p125-133, 青森市教育委員会 .



1. *Aulacoseira italica* var. *valida* (Grun.) Simonsen (X I 層)
2. *Fragilaria pinnata* var. *lancottula* (Schum.) Hustedt (VIII 層)
3. *Meridion circularae* var. *constrictum* (Ralfs) V. Heurck (X I 層)
4. *Amphora pediculus* (Kuetz.) Grunow (VIII 層)
5. *Caloneis angustivalva* Petit (X II 層)
6. *Caloneis leptosoma* Kramer & Lange-Bertalot (X II 層)
7. *Gomphonema acuminatum* Ehrenberg (VIII 層)
8. *Gomphonema helveticum* Brun (VIII 層)
9. *Gomphonema parvulum* Kuetzing (X II 層)
10. *Hantzschia amphioxys* (Ehr.) Grunow (X II 層)
11. *Navicula elginensis* (Greg.) Ralfs (X II 層)
12. *Navicula mutica* Kuetzing (X II 層)
13. *Pinnularia borealis* Ehrenberg (X II 層)
14. *Stauroneis obtusa* Lagerstedt (X II 層)
15. *Eunotia pectinalis* var. *minor* (Kuetz.) Rabenhorst (X I 層)
16. *Achnanthes lanceolata* (Breb.) Grunow (VIII 層)
17. *Cocconeis pseudothumensis* Reichardt (VIII 層)

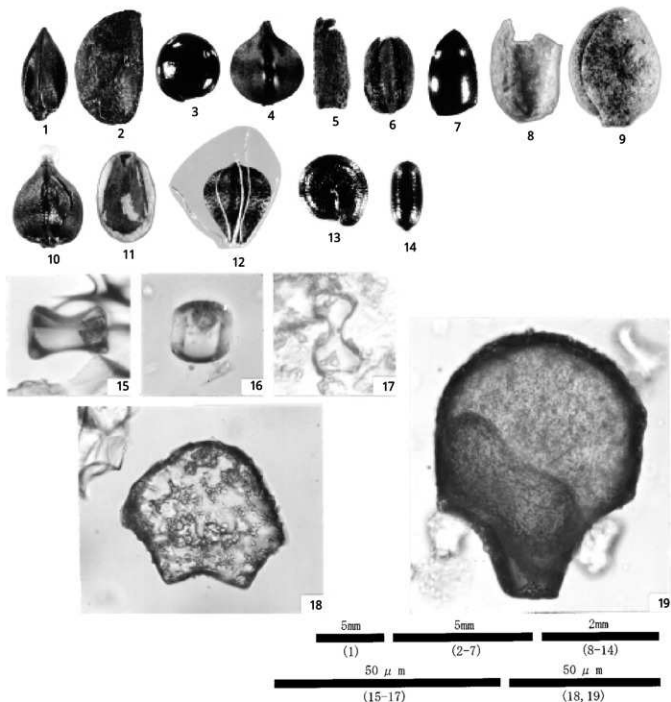
図版 1 珪藻化石



1. マツ属 (XIII層)
3. ブナ属 (XIII層)
5. トチノキ属 (XIII層)
7. トネリコ属 (XIII層)
9. カヤツリグサ科 (X層)

2. ハンノキ属 (XIII層)
4. コナラ属コナラ亜属 (XIII層)
6. ウコギ科 (XIII層)
8. イネ科 (X層)
10. サナエタデ節-ウナギツカミ節 (X層)

図版 2 花粉化石



- | | |
|--------------------------|---------------------------|
| 1. タデ属 (X層) | 2. キハダ (X I層) |
| 3. ミツガシラ (X I層) | 4. タデ属 (VII層) |
| 5. キク科 (X層) | 6. セリ科 (X I層) |
| 7. 昆虫 (X I層) | 8. タラノキ (X II層) |
| 9. ヒルムシロ属 (X層) | 10. スゲ属 (X層) |
| 11. タガシ (X層) | 12. ホタルイ属 (X I層) |
| 13. アカザ科 (X II層) | 14. オトギリソウ属 (X層) |
| 15. コマザザ属短細胞珪酸体 (X III層) | 16. ヨシ属短細胞珪酸体 (X I層) |
| 17. ススキ属短細胞珪酸体 (VII層) | 18. コマザザ属機動細胞珪酸体 (X III層) |
| 19. ヨシ属機動細胞珪酸体 (X I層) | |

図版 3 種実遺体・植物珪酸体

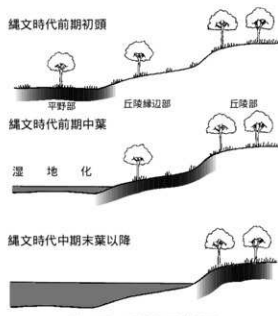
第 章 分析と考察

第 1 節 遺跡の時期と地形の相関からみた本遺跡における環境推移について

前述したように、本遺跡は地形的にみて平野部、丘陵縁辺部、丘陵部に区分することができる。そして、調査の結果、平野部に相当するA地区においては縄文時代前期初頭、丘陵縁辺部に相当するB地区においては縄文時代前期中葉、丘陵部に相当するC地区においては縄文時代中期後半～後期前半の遺構・遺物を主体としており、標高が高位の地区ほど遺構・遺物の主体となる時期が新しいという傾向がみられる。B地区・C地区においては削平を受けている部分のみみられたものの、各地区で検出された遺構・遺物は上記したような時期にそれぞれ限定され、各地区を個別に見た場合、長期間にわたる継続性は認められない。遺構・遺物の主体となる時期と地形的条件におけるこのような相関に加え、平野部の第 1 層及び丘陵縁辺部の第 1 号遺物集中ブロック 3・4層の上位に泥炭層が堆積している状況を考慮すると、本遺跡においては時期が下るにつれて当時の生活の舞台が丘陵地側へ推移していったと想定することが可能であろう。これは、縄文時代早期後半～前期中葉に最盛期を迎えたとされる縄文海進の影響により、標高の低い部分が徐々に湿地化していったことが要因であると考えられる。恐らく縄文時代前期初頭において集落を営むことが可能であった平野部は、前期中葉の頃までには湿地化し、丘陵縁辺部へ遷移し、丘陵縁辺部は中期の頃には湿地化したと考えられる。平野部における泥炭層について、珪藻分析及び植物珪酸体分析を行った結果（第 章参照）縄文時代前期初頭の遺物を包含する第 1 層からは比較的乾いた環境、その上位の第 2 層からは沼沢地的な環境であったことが推定されており、平野部が徐々に湿地化したことを裏付けるものである。縄文時代前期初頭の竪穴式住居跡が検出された地区の標高は約 75m、前期中葉の第 1 号遺物集中ブロックが検出された部分の標高は約 105mであり、前期初頭を約 6000年前、前期中葉を約 5500年前とすると、約 500年の間に湿地面が約 3m上昇したと推定することができる（注 1）。



写真 1 遺跡近景（N）



第 66 図 環境変遷模式図

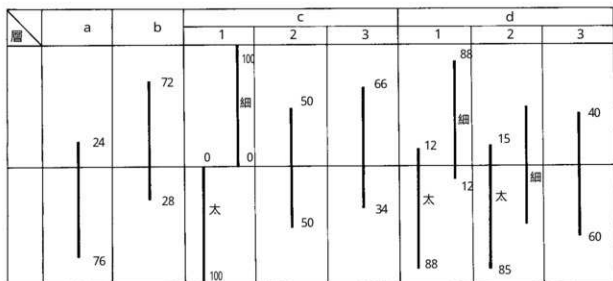
（注 1）ここで推定したのは海水面ではなくあくまで遺跡周辺に形成されたと考えられる湿地面のことである。

第2節 第 群土器について ～表館式・早稲田 6類の先後関係とその変遷～

第 群土器は県内における既知の型式では概ね表館式・芦野 群(以下、表館式)及び早稲田 6類土器に比定される土器である。両型式は縄文時代前期初頭の長七谷地 群直後に位置付けられているが、その先後関係については未だ統一的な見解が得られていないのが現状である。これまで提示されている見解は、三沢市早稲田貝塚及び六ヶ所村表館遺跡の調査によって両型式を検出した佐藤達夫氏による早稲田 6類 表館式という案(佐藤・渡辺 1960 佐藤・二本柳 1961)と、熊谷常正氏や武藤康弘氏などによる表館式 早稲田 6類という変遷案(熊谷 1983 武藤 1989 大沼 1981 三宅 1989)に集約される。このような見解の相違は、これまで両型式の土器を出土した遺跡において、その先後関係を明らかにし得る良好な層位的状況に恵まれなかったことにより、当該期の編年を構築していく上で型式学的手法に大きく依存せざるを得なかったことに起因すると考えられる。両型式の細別案・変遷案もいくつか提示されているが、それらは両型式の先後関係の如何によっては全く逆の変遷をたどる可能性がある。

本項では、本遺跡の基本層序第 層から出土した第 群土器の各類型を層位ごとにその個体数を調べ、表館式と早稲田 6類の層位的な先後関係及び両土器の型式的な変遷について若干考察してみたい。

本遺跡において第 群土器は平野部に相当するA地区の第 層から出土している。いずれの土層も黒色を呈し、下位の 層には浮石粒・砂粒が少量混入する。第 群土器の各類型における出土層位ごとの個体数の量比を集計したところ、第6図のような結果が得られた。上位の第 層からは押し引き沈線文が施され典型的な早稲田 6類に比定されるb類、全面にループ文が施されるc 1類のうち細い原体によるもの、胴部・底部破片ではループ文及び縄端回転文が施されるもののうち細い原体によるものが主体的に出土し、下位の第 層からは刺突文・コンパス文が施され典型的な表館式に比定されるa類、全面にループ文が施されるc 1類のうち太い原体によるもの、胴部・底部破片ではループ文及び縄端回転文が施されるもののうち太い原体によるもの、斜縄文・羽状縄文が施されるものが主体的に出土している。c 2・c 3類については出土量が少数であり、胴部・底部破片のうち細い原体による縄端回転文が施されるもの、斜縄文・羽状縄文が施されるものについては第 層から一定量出土している。表館式に比定されるa類と早稲田 6類に比定されるb類の地文に用いられる原体を比較してみると、前者に用いられる原体はかなり太いものが多いが、後者では太い原体は全く用いられず比較的細い原体



(5 : 16) (18 : 5) (0 : 1) (9 : 0) (3 : 3) (2 : 1) (3 : 22) (15 : 2) (16 : 16) (18) (8 : 12)

第6図 第 群土器各類型における層位ごとの出土量比

が用いられていることから、胴部破片については第 層から主体的に出土した細い原体によるループ文及び縄端回転文をもつものはb類に、第 層から主体的に出土したかなり太い原体によるループ文及び縄端回転文をもつものはa類に帰属する可能性が高いと考えられる。このことから表館式と早稲田 6類の先後関係については、表館式が先行し、早稲田 6類がこれに後続する可能性が高いと考えられる。

次に両型式の変遷について考察してみたい。

本遺跡から出土した刺突文とコンパス文が施される典型的な表館式土器は第 層から主体的に出土しており、文様構成から、a 1、両者が重層的に施されるもの、a 2、刺突列による三角繋ぎの区画が構成されその内部にコンパス文が充填されるもの、a 3、口縁上部及び胴部下半に両者が 1単位ずつ限定的に施されるもの、a 4、口縁上部に刺突列、胴部にコンパス文が施されるものに分けられ、これにa 5として縄文のみ施されるものが加わるが、層的にはそれらの先後関係は不明である。これまで当該型式の細分・変遷に関しては金木町芦野遺跡出土土器について細別を行なった名久井文明氏の論考(名久井 1971)や表館式と早稲田 6類の変遷案を示した前掲の武藤氏の論考、関山式との関連から細分した三宅氏の論考(三宅 1985)があるが、早稲田 6類のそれと比べてあまり論及されていない。前出の熊谷・武藤両氏は表館式を長七谷地 群に後続させる根拠の一つとして、長七谷地 群に併行する東北南部の上川名 式、関東地方の花積下層式の文様モチーフにおいて三角形・菱形、蕨手状の文様が用いられていることを挙げており(熊谷、武藤 前掲論文)それを肯首すれば、刺突列によって三角形のモチーフが描出されている第1図15・16が古いタイプに相当する。第1図9～11の個体には刺突文とコンパス文のほか沈線文が認められ、さらに半裁した竹管の内側によって押し引いたような文様が施されており、表館式に後続する可能性が高い早稲田 6類のメルクマールとなる押し引き沈線文と手法が類似していることから、これは押し引き沈線文の原型と考えられ、新しいタイプに相当すると考えられる。沈線により前もって区画をし、その部分に刺突を施す第1図12もこれと同様の文様効果と解釈することができよう。熊谷氏によれば、表館式の口唇部断面において認められる「内削ぎ」の形状も長七谷地 群及びこれに並行する東北南部の上川名 式、関東地方の花積下層式に系譜が求められるとされており、本遺跡から出土した表館式のほとんどにおいて内削ぎが認められるのに対して、9～12の口唇部には内削ぎが認められず口唇部がほぼ平坦に整形されており、むしろ早稲田 6類の口唇部形状に類似していることも本資料を新しいタイプとし得る傍証となろう。地文に着目すれば、第1図14に施されるループ文は比較的細い原体により施されているものであり、太い原体が用いられることの多い本類において唯一の資料である。早稲田 6類においてみられる地文は比較的細い原体が用いられていることから、本資料についても新しいタイプに属すると考えられる。本遺跡における刺突文・コンパス文をもつ土器に関してはa 2がもっとも古いタイプと考えられるが、それ以外のものに関しては早稲田 6類においてみられるような要素を具備しているものが多く、現時点では明確な変遷過程は不明である。しかし、先に想定した本遺跡における表館式の古いタイプと新しいタイプを比較すると、刺突文に関しては個々の刺突の幅が狭くなっていることが看取でき、時期が下るにつれて刺突の手法ないし施工の先端形状に変化が生じたと想定される器形に関しては口頸部にみられるくびれが次第に緩やかになり、直線的なものに遷移したことが想定される。本遺跡では刺突文・コンパス文を有する表館式の典型的な土器に共存して、ループ文が施される第1図5などのように縄文のみの施文と推定される土器も出土している。これは表館遺跡・芦野遺跡のような標識遺跡をはじめ、当該期の各遺跡においても同様であるが、これまで提示されている縄文時代前期初頭の土器編年に関する論考ではその位置付けについてはあまり触られていない。これらの縄文のみが施される土器については破片資料が多いため、本来、表館式・早稲田 6類のメルクマール文様が施されていたものも存在していると考えられるが、当該期の各遺跡の様相と

比較すると本遺跡においても少なからず存在していることは明白である。第 1 層から出土した土器において施される縄文はループ文のほか、斜縄文、羽状縄文(結束・非結束)が認められるが、ループ文は表館式・早稲田 6 類を通じて認められ、羽状縄文(特に非結束)や斜縄文は前型式の長七谷地群、後型式と想定される早稲田 6 類においても認められるものであり、刺突文・コンパス文が施される典型的な表館式と縄文のみ施される土器が併存するのか、それとも前後関係を示すのかという問題については、当該期における他地域との並行関係を踏まえ、今後検討が必要であろう。早稲田 6 類土器における羽状縄文のみが施されるものと押し引き沈線文が施されるものとの関係について、前者を「装飾されない土器」、後者を「装飾された土器」として併存する可能性が高いとした三宅徹也氏による指摘(三宅 1984)のように、現時点では表館式においても縄文のみの「装飾されない土器」と刺突文・コンパス文をもつ「装飾された土器」が併存していたと考えたい。

本遺跡から出土した早稲田 6 類土器は押し引き沈線文と地文の文様構成から、b 1. 地文を有し数条の押し引き沈線文が口縁部ないし底部に限定的に施されるもの、b 2. 器面全面に押し引き沈線文が施されるもの、b 3. 縄文のみ施されるものに分けられる。当該型式を設定した佐藤達夫氏は早稲田 6 類を a-c 類、尾駁式(尾駁例)に細分している(佐藤ほか 196Q 佐藤ほか 1957)が、これに照射すると本遺跡における b 1 は 6b 類と尾駁式、b 2 は 6a 類、b 3 は 6c 類に相当する。早稲田 6 類の変遷案については、佐藤氏による 6 類(姉沼) 6 類 尾駁、大湯氏や成田氏による 6c 類 6a・6c 類 尾駁(大湯 198Q 成田 1980)のほか、押し引き沈線文の施文箇所との相違を各期のバリエーションと捉えた三宅氏による置架群 春日町式 和野前山 8 群(三宅 1984) 武藤氏による器面全面に連続刺突による横位の波状ないし沈線文をもつもの・6c 6a 6b(武藤 前掲論文)などがあり、武藤氏による変遷案以外は基本的に早稲田 6 類が表館式に先行することを前提にしている。本遺跡においては、早稲田 6 類は第 1 層から主体的に出土しているが第 2 層からも少量出土している。押し引き沈線文が施される土器について、第 2 層出土資料と第 1 層出土資料を比較すると、前者は口縁部ないし底部に押し引き沈線文が限定的に施されるもののみが出土しており、後者はそれに加え、前者のものより口縁部における押し引き沈線文による文様帯幅が広がっているもの(仮に b 1 b とする)さらに器面全面に押し引き沈線文が施されるものが加わっている。このことから押し引き沈線文で構成される文様帯は古いタイプが狭く、それが次第に広くなり、やがて器面全面に至るという過程を着想できる。したがって、本遺跡における押し引き沈線文が施されているものの変遷については b 1 b 1 b b 2 と考えられ、佐藤氏の細分した類型をこれにあてはめると尾駁 6b 類 6a 類となり、器面に占める押し引き沈線文の密度に関して言えば、粗から密への変遷が想定される。八戸市と野前山遺跡の報告でも、出土状況において、器面全面に押し引き沈線文が施されるものよりも縄文の地文上に押し引き沈線文による幅広い文様帯をもつものの方が古い様相を示すことが示唆されており、本遺跡の出土資料から想定される変遷と合致する。しかし、表館式と同様にここでも問題となるのが縄文のみ施される b 3、即ち佐藤氏のカテゴリにおける 6c 類である。本遺跡から出土した b 3 に施される文様は、ループ文・縄端回転文・斜縄文・羽状縄文(非結束)がある。表館式でもこれらの文様は認められるが、前述したように本遺跡から出土した表館式においてみられるループ文・縄端回転文は太い原体によるものが主体であり、細い原体によるものについては早稲田 6 類(6c 類)に帰属する可能性が高いと考えられる。また、コンパス文・刺突文が施される表館式の地文にはループ文が多く、押し引き沈線文が施される土器の地文に縄端回転文(細い原体)が多いことから、縄端回転文は早稲田 6 類における主体的な文様であると考えられる。押し引き沈線による文様が粗密へと至る消長過程を踏まえれば、縄文のみが施され押し引き沈線文が施されない土器については「粗」と捉えることもでき、押し引き沈線文が施され

る b・1・b 2 に先行する可能性も想定できる。ただし、前型式とした表館式において刺突文・コンパス文が施される土器と縄文のみ施される土器が併存していた可能性があることは前述したとおりであるが、縄文のみ施される土器は第 Ⅰ 層のいずれにおいても一定量出土しており、前掲した三宅氏の指摘のように「装飾された土器」と「装飾されない土器」、即ち押し引き沈線文が施される土器と縄文のみが施される土器が併存する可能性も否定できないことから、現段階では両者の関係については断定できない。なお、早稲田 6 類を主体的に出土した第 Ⅰ 層からは、大木 1 式に比定される略完形の土器が出土しており、早稲田 6 類と大木 1 式の併行関係を示すものである。第 Ⅰ 層から出土した土器の中にはこの他にも大木 1 式に比定されるものが含まれている可能性があるが、破片資料であり、厳密には早稲田 6 類との判別が困難である。

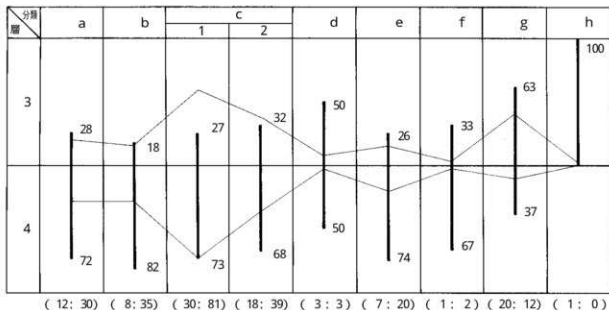
本遺跡から出土した表館式・早稲田 6 類についてその先後関係及び両者の変遷過程を考察したが、大局的には表館式から早稲田 6 類にいたる過程は、特に刺突文・コンパス文が施されるものと押し引き沈線文が施されるものというような両型式の典型的な土器における文様に着目すれば施文手法の簡略化即ち「手抜き」の過程と解釈することができよう。その代表的なものとして、連続刺突によって施した文様列が工具を押し引くことで描出した文様列へ変化したこと他に、環を作出した原体を回転させたルーブ文が閉じた縄の末端を強く押し付けながら回転させた縄端回転文に変化したことが挙げられる。そして、その文様構成においては次第に押し引き沈線文が占める部分が大きくなり、最終的には器面全面が押し引き沈線文で埋めつくされ幾何学的な文様を描出されるようになる。このように表館式から早稲田 6 類の連続性は両型式における典型的な土器における主に文様の施文手法の変遷によって解釈することができるが、両型式における縄文のみ施される土器の位置づけについては明らかにしえなかった。さらに、表館式・早稲田 6 類に先行・後続する土器を含めてその型式序列を構築しようとした場合、表館式とそれに先行する長七谷地 群、早稲田 6 類とそれに後続する芦野 群・深郷田式における系譜関係については、文様モチーフの連続性や平底から尖底への移行過程などいくつかの課題がある。これらについては太平洋側と日本海側の地域性や東北部・関東地方の当該期の土器との併行関係を踏まえつつ今後改めて検討したい。

第 3 節 第 Ⅱ 群土器について

第 1 号遺物集中ブロックの 3 層と 4 層から出土した第 Ⅱ 群土器は、円筒下層 a・b 式土器に比定されるものである。本報告では、口縁部に施される文様から第 Ⅱ 群土器を a～h に分類した。

円筒下層 a 式・b 式土器は八戸市中居貝塚出土資料を基に山内清男氏によって設定された型式である。その後、江坂輝彌氏（江坂 1970）、村越潔氏（村越 1974）、三宅徹也氏（三宅 1974）によって細分案が提示されているが、見解は一致していない。これらの細分案について逐一紹介しないが、下層 a 式と b 式を区別するメルクマールとしてこれまで着目されている主要な属性については、隆帯の多寡、口縁部文様帯の広狭と施される文様の変化、斜縄文から絡糸体回転文への胴部文様の変化、底面における縄文の有無などに集約されるが、各氏において基準とする属性は微妙に異なる。このような見解の相違は、前期初頭における編年研究と同様に良好な層位的事例が少なく、これまで両型式を分類するにあたって型式学的手法に主眼が置かれていたことが大きな要因と思われるが、三宅氏（三宅 前掲論文）や鈴木克彦氏（鈴木 1978）により当該期における狭い範囲での文様等の地域差（小文化圏）が存在していたことが指摘されているように、示準とした遺跡の所在する地域による差異も考慮される。下層 a・b 式の類型把握において両型式を判別する明確なメルクマールの同定が困難であることから、口縁部文様と胴部文様の構造的な把握によって最大公約数的なものを類型し、その位置付けを層位的観察によって行うべきとする方法論

的指針が鈴木克彦氏により指摘された(鈴木 1978)が、以降、当該型式を出土した遺跡においては両者を下層 a・b 式として一括して報告している例が大方であった。しかし、近年、木造町田小屋野貝塚から出土した一括資料を基に下層 a 式を結節回転文が施される土器を主体とする群、下層 b 式を結条体による回転文が施されるものを主体とする群に分類する案が、工藤大氏によって提示されており(工藤 1995)、層的には北海道戸井町戸貝塚・碓ヶ関村大面遺跡出土資料によって支持されるという。同氏は、前者は口縁部には隆帯が多用され胴部文様は縄文・結条体により斜行するものが多く、後者は区画文として側面圧痕が多用され胴部文様は縄文・結条体により縦走するものが多いとしており、同氏の細分案は山内清男により設定された型式内容を解体し再構成したものと捉えることができる。



第 68 図 3・4 層における第 1 群土器の出土量比

第 68 図は本遺跡における第 1 号遺物集中ブロックから出土した第 1 群土器を細分した各類型の個体数について、各層位における諸類型の個体数の量比(折れ線)と、各類型における層位ごとの出土個体数の量比(棒線)を示したものである。両層位における出土量を比較すると 4 層出土のものは 3 層出土のもの 2 倍以上である。第 3 章第 2 節でも述べたが、本ブロックは削平により平面的な範囲がかなり減じられており、本来の様相ではない可能性が高いが、3 層と 4 層における諸類型の量比を比較すると、両層位ともに口縁部文様帯に結節回転文が施される c 類が突出し、各種結条体回転文が施される d ~ h が少なく、単軸結条体第 6 A 類が施される g 類以外はほぼ同様の量比を示している。一方、各類型における層位ごと出土個体数の量比をみると、これまで提示されている細分案では統一的に下層 b 式に比定されている g・h 類は上位の 3 層において高い比率を示すほかは全体的に出土量が多い 4 層において高い比率がみられる。以上の量比の比較結果を総合すると、3 層・4 層から出土した g・h 類以外の類型については両層位においてほぼ同様の構成と量比を示していることから、層位的には分離できず、両層位から出土した土器群を別型式として類別するよりも、両層位の出土土器を同一型式として一括して捉える方が妥当であると考えられる。その場合、この土器群においては c 類の量比が最も多いことから「結節回転文土器群」と捉えられる。したがって、本遺跡の第 1 号遺物集中ブロックから出土した第 1 群土器の様相については、これまで提示されている細分案に照射すると工藤氏の細分案と調和的であるといえる。

ま と め

本遺跡の調査は南北に細長く走る全長約600mの工事用道路とその一部西側に隣接する遊水地の水面部分を対象に平成1年度から13年度まで実施した。約12,000㎡の調査対象面積に対して調査面積は3,700㎡であり、これは平成1年度の発掘調査と併行して行った試掘調査によって調査面積を絞り込んだ結果による。3,700㎡の調査に3箇年を要したのは、調査区である工事用道路が工事車両の通行にのみ使用されていただけでなく、隣接する農地に入入りするために不可欠な道路であったことにより、農繁期を回避した調査期間の設定、工事用道路と農地を連絡する取り付け道路部分に配慮した調査区の設定など様々な面で制約を受けたことに起因する。ただし、調査委託者である青森土木事務所並びに青森市都市整備部からは、工事工程の変更、砂利道への水の散布など最大限のご配慮・ご協力をいただき、調査を無事完了することができた。

三箇年にわたる調査の結果、遺構については縄文時代前期初頭の竪穴式住居跡1軒、土坑2基、焼土遺構1基、ピット4基、縄文時代前期中葉の遺物集中ブロック1箇所、縄文時代中期末葉～後期前葉のフラスコ状土坑1基、Tピット1基が検出され、縄文時代早期後半～後期初頭にわたる遺物が出土した。

南北に長い調査区であるために地形的に平野部・丘陵縁辺部・丘陵部が含まれ、平野部・丘陵縁辺部においては、現地表面から最大3mの深さまで泥炭層が堆積しており、縄文時代前期初頭～前期中葉の遺構・遺物は泥炭層の下位から検出されたものである。縄文時代前期初頭～前期中葉の遺跡調査例はこれ以降に帰属する遺跡に比べて少なく、特に縄文時代前期初頭に帰属する遺構・遺物がある程度まとまって検出された例は本市において初めてである。当該期に帰属する表館式・早稲田6類土器については、これまで県内における各遺跡において良好な層位的状況に恵まれなかったことから、その先後関係が不明確であったが、本遺跡では基本層序第1層から早稲田6類、下位の第2層から表館式が主体的に出土しており、表館式が早稲田6類に先行する可能性が高いことが判明した。

遺跡内の地形と各時期の遺構・遺物が出土する地点を併せてみると、標高が高位になるにつれて主体となる時期が下っており、その各地点においては時期の継続性が認められない。第2章でも述べたが、このような各時期の変遷と標高との相関は縄文海進の影響によると考えられ、これは自然科学分析結果によって裏付けられる。本市においては平野部に立地する遺跡が少ないのに対して、丘陵地上に立地する遺跡が多く、これまでは丘陵地に立地する遺跡が数多く調査されてきたが、前述のとおり縄文時代前期中葉以前の遺構・遺物の検出例は少なく、本遺跡において縄文時代前期初頭～前期中葉の遺構・遺物が平野部分に堆積する泥炭層の下位から検出されていることを踏まえれば、本市の平野部分において縄文時代前期中葉以前に帰属する未発見の遺跡が数多く眠っている可能性が高い。

本遺跡は、これまで本市においてあまり確認されていない時期の遺構・遺物が出されたことに加え、平野部に堆積する泥炭層のほか、平成10年度に確認された縄文時代・旧石器時代の埋没林、縄文時代の河川跡の存在から、考古学だけに留まらず植物学・地質学など諸分野においてもその学術的価値は高く、当時の生活とそれをとりまく環境を総合的に復元するうえで極めて貴重な遺跡であると考えられる。

最後となりましたが、本報告書を刊行するにあたり、調査委託者である青森土木事務所並びに青森市都市整備部をはじめとした関係各機関、遺跡周辺の土地所有者の方々、雨の日でも真夏の炎天下でも水気を含んだ重い土と格闘し一生懸命作業して下さった発掘作業員の方々、急な指示にも快くかつ的確に対応して下さった整理作業員の方々、発掘調査・整理作業において至らぬ担当者を補助して下さった調査補助員の方々、その他関係各位のご指導・ご協力に対しまして深く感謝の意を表する次第であります。

引用・参考文献

- 青森県教育委員会 1977 『三内沢部遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第4集
- 青森県教育委員会 1980 『熊沢遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第3集
- 青森県教育委員会 1980 『長七谷地貝塚』青森県埋蔵文化財調査報告書第5集
- 青森県教育委員会 1980 『鷹架遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第6集
- 青森県教育委員会 1981 『免茶沢遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第6集
- 青森県教育委員会 1982 『山崎遺跡(1)(2)(3)発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第6集
- 青森県教育委員会 1983 『和野前山遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第8集
- 青森県教育委員会 1985 『大石平遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第9集
- 青森県教育委員会 1985 『表館遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第9集
- 青森県教育委員会 1990 『空沢遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第13集
- 青森県教育委員会 1993 『小奥戸(1)遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第15集
- 青森県教育委員会 1996 『畑内遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第18集
- 青森県教育委員会 1996 『三内丸山遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第20集
- 青森県教育委員会 1998 『三内丸山遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第23集
- 青森県教育委員会 1999 『畑内遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第26集
- 青森県教育委員会 1999 『榎引遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第26集
- 青森県教育委員会 1999 『青森県遺跡詳細分布調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第26集
- 青森県教育委員会 1999 『大矢沢野田(1)遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第270集
- 青森県教育委員会 2000 『三内丸山(6)遺跡 東北縦貫自動車道八戸線(青森-青森)建設事業に伴う発掘調査報告』青森県埋蔵文化財調査報告書第279集
- 青森県教育委員会 2000 『青森市横内川遊水地埋没林調査報告書』
- 宮城県教育委員会 1986 『今熊野遺跡 縄文・弥生時代編』宮城県埋蔵文化財調査報告書第114集
- 山形県教育委員会・日本道路公団仙台建設局 1985 『にひゃく遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第9集
- 山形県教育委員会・日本道路公団仙台建設局 1987 『新山A遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第10集
- 国立歴史民俗博物館 1999 『歴博国際シンポジウム 過去1万年間の陸域環境の変遷と自然災害史』国立歴史民俗博物館研究報告第8集
- 青森県立郷土館 1995 『木造町田小屋野貝塚 岩木川流域の縄文前期の貝塚発掘調査報告書』青森県立郷土館調査報告第3集 考古 10
- 戸井町教育委員会 1992 『戸井貝塚』
- 戸井町教育委員会 1993 『戸井貝塚』
- 戸井町教育委員会 1993 『戸井貝塚』
- 木古内町教育委員会 1999 『木古内町釜谷遺跡 南渡島地区広域営農団地農道整備事業に伴う発掘調査報告書 - 遺物編』
- 青森市教育委員会 1965 『四ツ石遺跡調査概報』青森市の文化財 2
- 青森市教育委員会 1995 『桜峯(2)遺跡発掘調査報告書』青森市埋蔵文化財調査報告書第2集

- 青森市教育委員会 1997 『桜峯(1)遺跡発掘調査報告書』青森市埋蔵文化財調査報告書第32集
- 青森市教育委員会 2000 『熊沢遺跡発掘調査報告書』青森市埋蔵文化財調査報告書第4集
- 青森市教育委員会 2000 『大矢沢野田(1)遺跡調査報告書』青森市埋蔵文化財調査報告書第5集
- 青森市教育委員会 2001 『新町野遺跡発掘調査報告書・野木遺跡発掘調査報告書』青森市埋蔵文化財調査報告書第5集
- 青森市教育委員会 2001 『大矢沢野田(1)遺跡発掘調査概報』青森市埋蔵文化財調査報告書第5集
- 階上町教育委員会 1989 『白座遺跡・野場(3)遺跡発掘調査報告書』
- 盛岡市教育委員会 1986 『大館遺跡群 - 昭和60年度発掘調査概報 - 』
- 相原 淳一 1990 「東北地方における縄文時代早期前葉から前期前葉にかけての土器編年 仙台湾周辺の分層発掘資料を中心に」『考古学雑誌』第70巻第1号
- 阿部 千春 1993 「北海道南部における初期の円筒土器とその周辺」『月刊考古学ジャーナル』第36号
- 江坂 輝彌 1970 『石神遺跡』
- 大沼 忠春 1981 「道央部の縄文前期土器群の編年について」『北海道考古学』17
- 大沼 忠春 1984 「道南の縄文前期土器群の編年について」『北海道考古学』20
- 大沼 忠春 1986 「道南の縄文前期土器群の編年について」『北海道考古学』22
- 小笠原雅行 2000 「円筒下層a式といわゆる白座式について - 現状とその問題点の把握 - 」『村越潔先生古稀記念論文集』
- 佐藤達夫・二本柳正一・角鹿扇三 1958 「青森県上北郡早稲田貝塚」『考古学雑誌』第4巻第2号
- 佐藤達夫・渡辺兼庸 1961 「六ヶ所村表館出土の土器」『上北考古学会誌』2
- 佐藤達夫・二本柳正一・1961 「六ヶ所村尾較出土の土器」『上北考古学会誌』2
- 鈴木 克彦 1978 「第 章 総括」『熊沢遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第38集
- 鈴木 克彦 2001 『北日本の縄文後期土器編年の研究』
- 興野 義一 1967 「大木式土器理解のために()」『月刊考古学ジャーナル』第1号
- 興野 義一 1968 「大木式土器理解のために()」『月刊考古学ジャーナル』第16号
- 興野 義一 1984 「大木式土器について」『宮城の研究』1
- 工藤 大 1995 「第6章 考察 第1節 縄文土器」『木造町田小屋野貝塚 岩木川流域の縄文前期の貝塚発掘調査報告書』青森県立郷土館調査報告第3集 考古 10
- 工藤 竹久 1989 「縄文尖底系土器様式」『縄文土器大観』1
- 黒坂 禎二 1993 「羽状縄文系土器の文様構成(点描) - 2」『研究紀要』第10号 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 小林 達雄編 1999 『縄文土器の編年と社会』
- 白鳥 良一 1989 「前期大木式土器様式」『縄文土器大観』1
- 津村 宏臣 2000 「GISを利用した遺跡環境評価の方法 考古学における空間分析(1)」『動物考古学』第1号
- 名久井文明 1971 「青森県芦野遺跡の土器群について」『考古学雑誌』第57巻第2号
- 成田 滋彦 1989 「入江・十腰内式土器様式」『縄文土器大観』4
- 松井 章・牧野 久実 2000 『古代湖の考古学』
- 三宅 徹也 1974 「青森県における円筒下層式土器群の地域展開」『北奥古代文化』第6号
- 三宅 徹也 1977 「円筒土器の概念とその崩壊」『青森県立郷土館調査研究年報』第3号

- 三宅 徹也 1981 「円筒土器」『縄文文化の研究』3
- 三宅 徹也 1984 「第3節 分析と考察 2土器」『和野前山遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第8集
- 三宅 徹也 1985 「第 群土器について」『表館式遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第9集
- 三宅 徹也 1986 「円筒下層式様式」『縄文土器大観』1
- 三宅 徹也 1989 「早稲田 6類と表館式との関係」『東北・北海道における縄文時代早期中葉から前期初頭にかけての土器編年について』第4回縄文文化検討会シンポジウム資料
- 武藤 康弘 1989 「東北地方北部の縄文前期土器群の編年学的研究 - 表館式、早稲田 6類土器をめぐる -」
『考古学雑誌』第74巻第2号
- 村越 潔 1974 『円筒土器文化』
- 山内 清男 1929 「関東北における縄文土器」『史前学雑誌』第1巻第2号
- 山内 清男 1979 『日本先史土器の縄文』

写 真 图 版



遺跡遠景 (N)



AE-22~24グリッドセクション (W)



AA~AC-15~23グリッド実掘 (S)



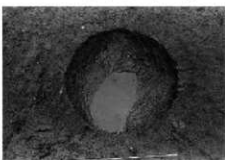
SI-01完掘 (W)



SI-01セクション (S)



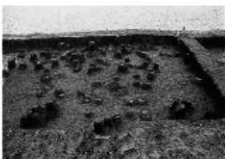
SN-01 (W)



SK-0完掘 (W)



SK-0完掘 (W)



AC-27グリッド遺物出土状況 (W)



作業風景

写真 1



第1号遺物集中ブロックセクション(W)



第1号遺物集中ブロック遺物出土状況(N)



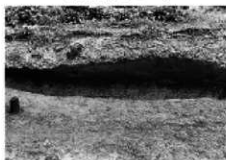
石槍出土状況(W)



作業風景(E)



C地区盛り土(E)



G-Hラインセクション(N)



SK-03完掘(S)



SK-03セクション(S)

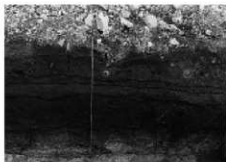


SK-04完掘(S)



SK-04セクション(S)

写真 2



AA- 60～61ラインセクション (W)



SK- 01セクション (N)



SK- 02セクション (W)



AC- 18グリッド遺物出土状況 (E)



第1号遺物集中ブロック遺物出土状況 (N)



第1号遺物集中ブロック遺物出土状況 (N)



C地区遺物出土状況 (W)

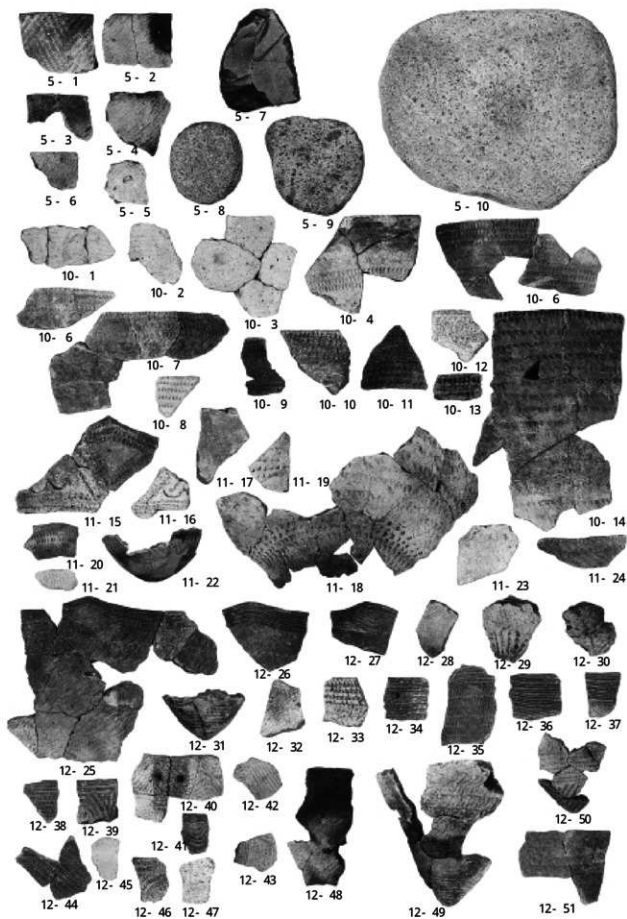


写真 4 出土遺物

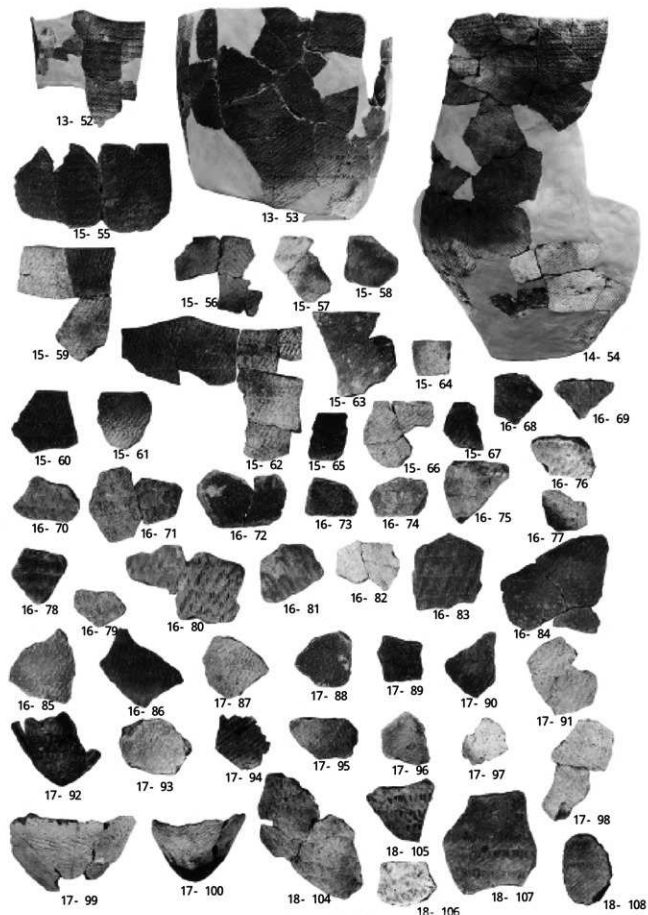


写真 5 出土遺物

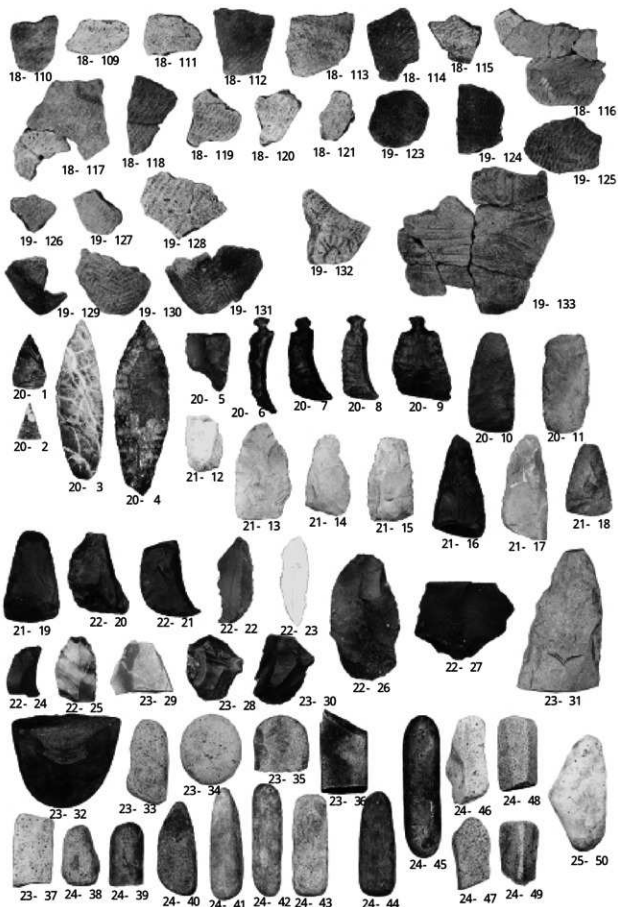


写真 6 出土遺物

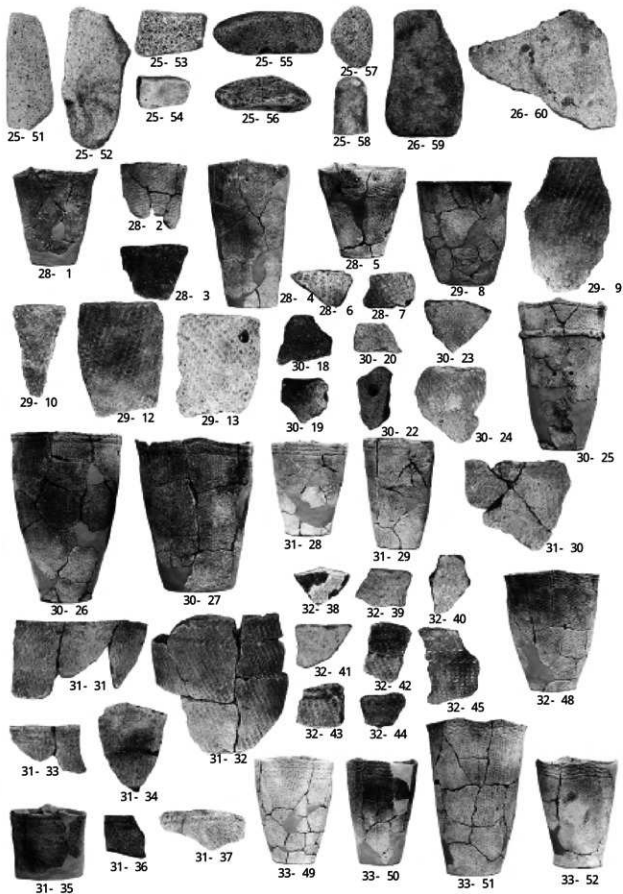


写真 7 出土遺物

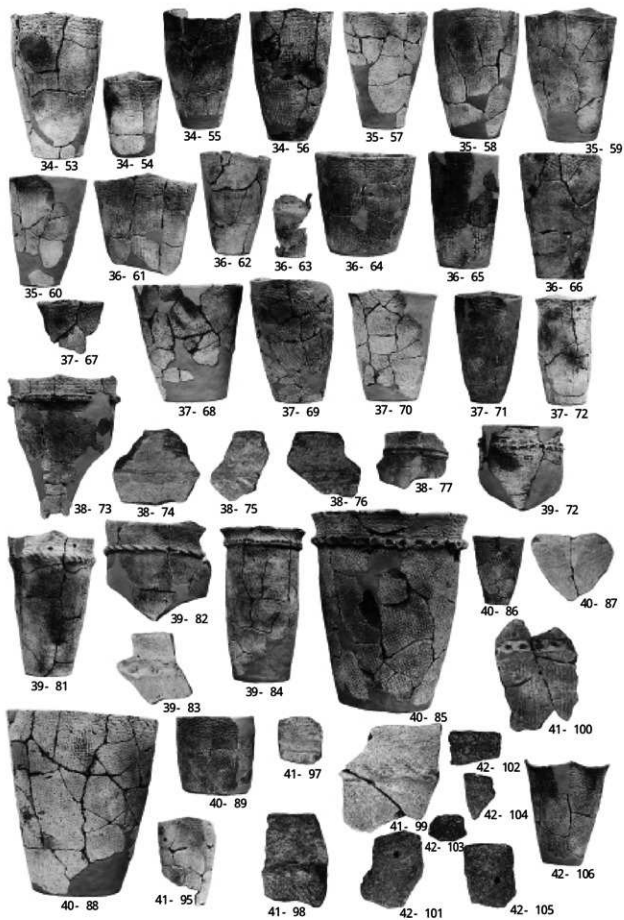


写真 8 出土遺物

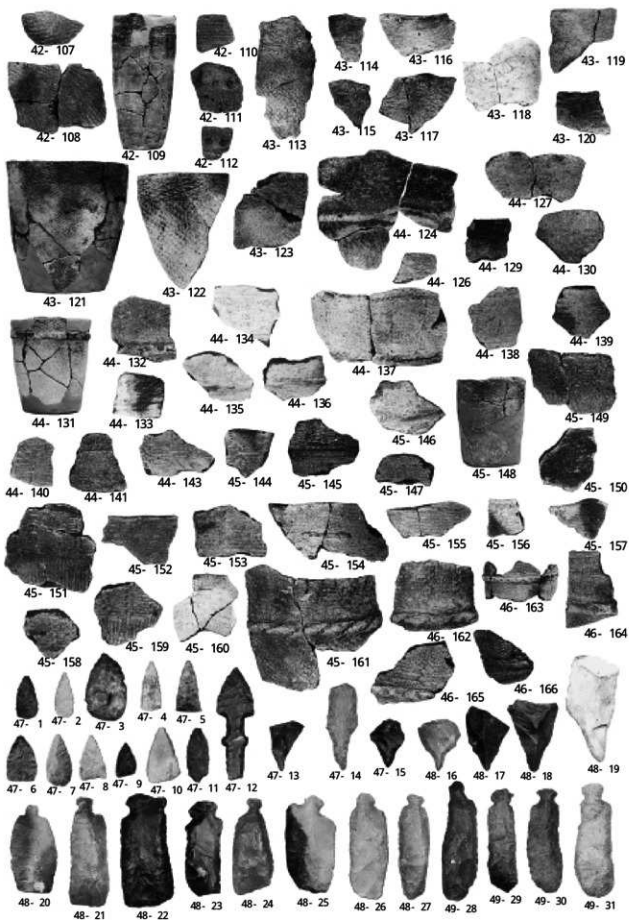


写真 9 出土遺物

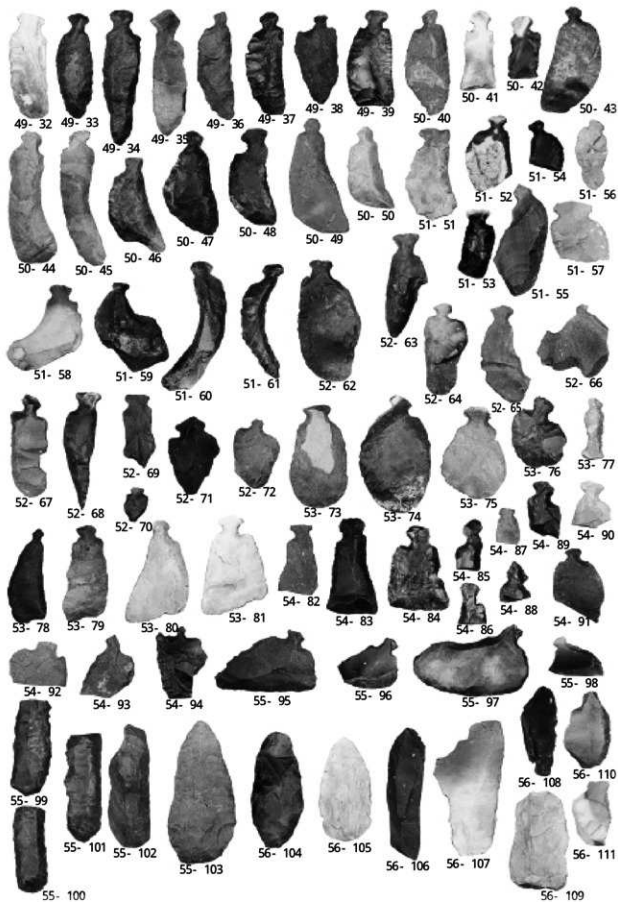


写真10 出土遺物

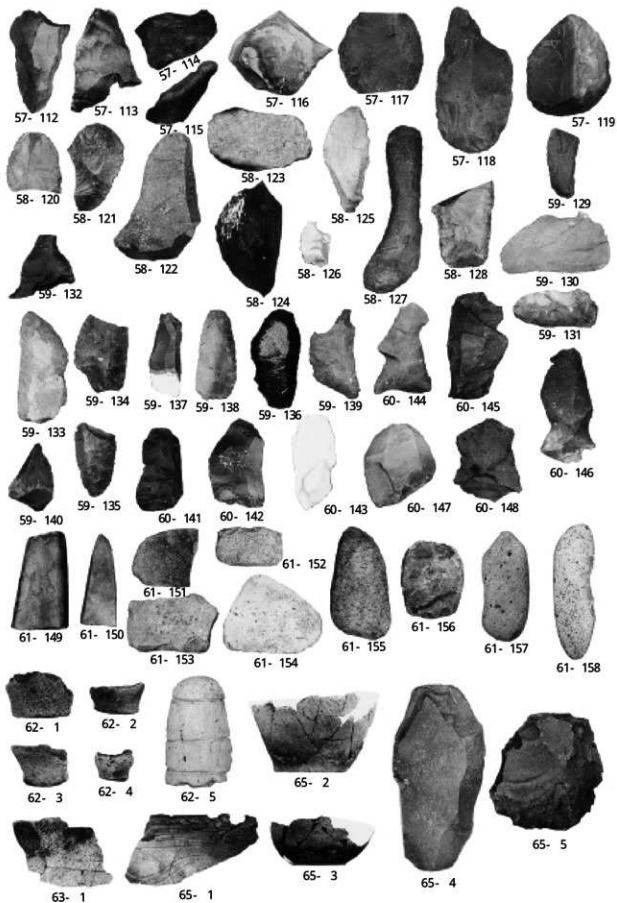


写真11 出土遺物

報告書抄録

ふりがな	おおやさわのだからこいちいせきはつちょうさほうこくしょ							
書名	大矢沢野田(1)遺跡発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	青森市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第6巻							
編著者名	設楽政健							
編集機関	青森市教育委員会							
所在地	〒030 8555 青森県青森市中央一丁目 22- 5 017- 734- 1111							
発行年月日	西暦 2002年 3月 2日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m	調査原因
		市町村	遺跡番号					
大矢沢野田(1)	青森市大学 大矢沢野田	01	292	40 47 30	140 39 77	19990614 ～ 19990930 20000817 ～ 20001031 20010711 ～ 20010809	3 700	堤川広域基幹 河川改修事業 及び市道筒井 幸畑団地線特 殊改良一種特 定事業に伴う 発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
大矢沢野田(1)	集落跡	縄文	竪穴住居跡	軒	縄文土器		本市で初めて 縄文時代前期 初頭の遺構を 検出	
			土坑	2基	石器			
			プラスチック土坑	1基	土製品			
			Tピット	1基	石製品			
			焼土遺構	1基				
			ピット	4基				
			遺物集中ブロック	箇所				

既刊埋蔵文化財関係報告書一覧

青森市の文化財	1	1962 『三内遺跡発掘調査概報』	第 33 集	1997 『小牧野遺跡発掘調査報告書』
"	2	1965 『四ツ石遺跡調査概報』	第 30 集	1998 『桜峯(1)遺跡発掘調査報告書』
"	3	1967 『玉清水遺跡調査概報』	第 3 集	1998 『新町野遺跡発掘調査報告書』
"	4	1970 『三内丸山遺跡調査概報』	第 38 集	1998 『野木遺跡発掘調査報告書』
"	5	1971 『野木和遺跡調査報告書』	第 35 集	1998 『市内遺跡詳細分布調査報告書』
"	6	1971 『玉清水 遺跡発掘調査報告書』	第 40 集	1998 『小牧野遺跡発掘調査報告書』
"	7	1971 『大浦遺跡調査報告書』	第 4 集	1998 『野木遺跡発掘調査概報』
"	8	1973 『孫内遺跡発掘調査報告書』	第 4 集	1998 『熊沢遺跡発掘調査概報』
		1979 『堂沢遺跡』	第 4 集	1999 『市内遺跡詳細分布調査報告書』
		1983 『四戸橋遺跡調査報告書』	第 4 集	1999 『葛野(2)遺跡発掘調査報告書』
青森市の埋蔵文化財	1983	『山野峠遺跡』	第 4 集	1999 『小牧野遺跡発掘調査報告書』
"	1985	『長森遺跡発掘調査報告書』	第 40 集	1999 『新町野・野木遺跡発掘調査概報』
"	1986	『田茂木野遺跡発掘調査報告書』	第 4 集	1999 『稲山遺跡発掘調査概報』
"	1987	『横内城跡発掘調査報告書』	第 48 集	2000 『熊沢遺跡発掘調査報告書』
"	1988	『三内丸山 遺跡発掘調査報告書』	第 49 集	2000 『稲山遺跡発掘調査概報』
青森市埋蔵文化財調査報告書			第 50 集	2000 『小牧野遺跡発掘調査報告書』
"	第 16 集	1991 『山吹(1)遺跡発掘調査報告書』	第 5 集	2000 『桜峯(1)・雲谷山吹(3) 遺跡発掘調査報告書』
"	第 17 集	1992 『埋蔵文化財出土遺物調査報告書』		
"	第 18 集	1993 『三内丸山(2)遺跡発掘調査概報』	第 5 集	2000 『大矢沢野田(1)遺跡調査報告書』
"	第 19 集	1993 『市内遺跡発掘調査報告書』	第 5 集	2000 『市内遺跡発掘調査報告書』
"	第 20 集	1993 『小牧野遺跡発掘調査概報』	第 5 集	2001 『新町野遺跡発掘調査報告書』
"	第 2 集	1994 『市内遺跡詳細分布調査報告書』		野木遺跡発掘調査報告書』
"	第 2 集	1994 『小三内遺跡発掘調査報告書』	第 5 集	2001 『小牧野遺跡発掘調査報告書』
"	第 2 集	1994 『三内丸山(2)・小三内遺跡発掘調査報告書』	第 5 集	2001 『稲山遺跡発掘調査報告書』
"	第 2 集	1995 『横内遺跡・横内(2)遺跡発掘調査報告書』	第 5 集	2001 『稲山遺跡発掘調査概報』
"	第 2 集	1995 『市内遺跡詳細分布調査報告書』	第 5 集	2001 『大矢沢野田(1)遺跡 発掘調査報告書』
"	第 2 集	1995 『桜峯(2)遺跡発掘調査報告書』	第 6 集	2002 『小牧野遺跡発掘調査報告書』
"	第 2 集	1996 『桜峯(1)遺跡発掘調査概報』	第 6 集	2002 『大矢沢野田(1)遺跡 発掘調査報告書』
"	第 2 集	1996 『三内丸山(2)遺跡発掘調査報告書』		
"	第 2 集	1996 『市内遺跡詳細分布調査報告書』	第 6 集	2002 『稲山遺跡発掘調査報告書』
"	第 30 集	1996 『小牧野遺跡発掘調査報告書』	第 6 集	2002 『稲山遺跡発掘調査概報』
"	第 3 集	1997 『市内遺跡詳細分布調査報告書』	第 6 集	2002 『市内遺跡発掘調査報告書』
"	第 3 集	1997 『桜峯(1)遺跡発掘調査概報』		
"	第 3 集	1997 『新町野遺跡発掘調査報告書』		
"	第 3 集	1997 『葛野(2)遺跡発掘調査報告書』		

青森市埋蔵文化財調査報告書第6集

大矢沢野田(1)遺跡発掘調査報告書

発行年月日 平成 14 年 3 月 2 日

発行 青森市教育委員会

〒030 8555 青森市中央一丁目 22 5

TEL 017 734 1111

印刷 東北印刷工業株式会社

〒030 0902 青森市合浦一丁目 2 12

TEL 017 742 2221